始

特 214
721

さくら

文學士　平林治德編

はしがき

偉大なる自由思想家にして、高い趣味と、人間味とを豐に有する吾が愛好法師の隨筆徒然草を有する事は吾々の誇であり、感謝である。徒然草に對する時、その緊縮した、しかも妥當な表現のうちに讀者の年齢・階級・知識・經驗の程度によつて、考へさせられ、教へられ、味はされる事が無限にあるを認める。高等の教養を有する者が通讀すべきは勿論、誰もの一生の伴侶として飽くことを知らない。

この書に關する無數の註書及び研究に於ける論議が無際限にあるのを見ても、その複雜さは知られるが、かつて無關心に讀過した一行一節を再び讀みかへすとき、そこに大きな眞理を認めることは、本書に於て屢〻經驗する所である。

かういふものを教科書として編纂する場合に、編者の私意を以てみだりに取捨するのは恐しい事で、愛好に對する冒瀆とせへ感ずる。尤も實際教授にあたつて、時間その他の關係から取捨して取拔はれるのは當然なことで、この取捨を百人百色に出來るやうにする爲にも編者の用意としては全篇を採錄しておく必要がある。

これが徒然草完本を編した所以である。

凡　例

一、本書は高等諸學校の教科書とする目的を以て編纂しましたが、師範學校・中學校・高等女學校等の上級用又は補習科用としても役立つと思ひます。

一、流布本徒然草文段抄を底本とし、數種の古版及び古寫本を以て校合しました。

一、古版の姿を保存することにつとめましたが、繙讀の便宜上、句讀・假名遣等は現代の慣用に改め、會話の部分には「　」を加へました。

一、段を分つことは原書には無いことと思はれるが、便宜上文段抄に從つて標記することにしました。

一、書中の固有名詞・引句・引歌等を頭註に揭げましたが、人名に就いては從來研究せられて居る限に於て時代を明かにする事に務め、引句・引歌は兼好が意識して用ひたと思はれるものに限り揭載しました。

一、教授の際、圖畫を見せる事は理解を助ける爲め必要であるが、一々板書するのは煩しいので、つとめて多く挿入しました。

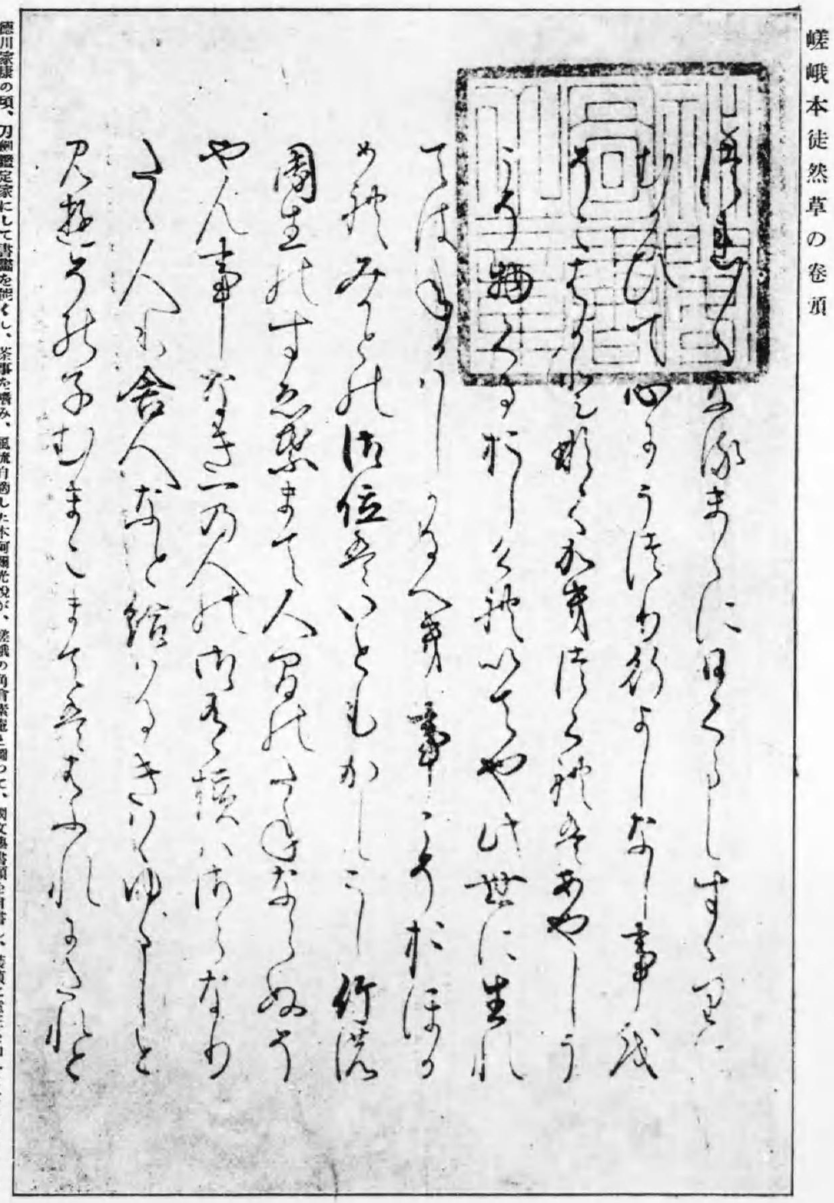
一、扉文字は前田侯爵家藏の兼好自筆家集より拾字しました。

一、挿圖は文段抄・大全・諸抄大成・直解等の古註書及び繪卷物・貞丈雜記・宮殿調度圖解・國史大辭典其他から廣く集めました。

一、挿圖及び附圖の中、發行者の都合によつて、共發行にかゝる島津久基氏の「源氏物語新抄」、高木市之助・沼澤龍雄兩氏の「平家物語」の附圖から借用したものがあります。轉載を快諾せられたこ

とを謝します。

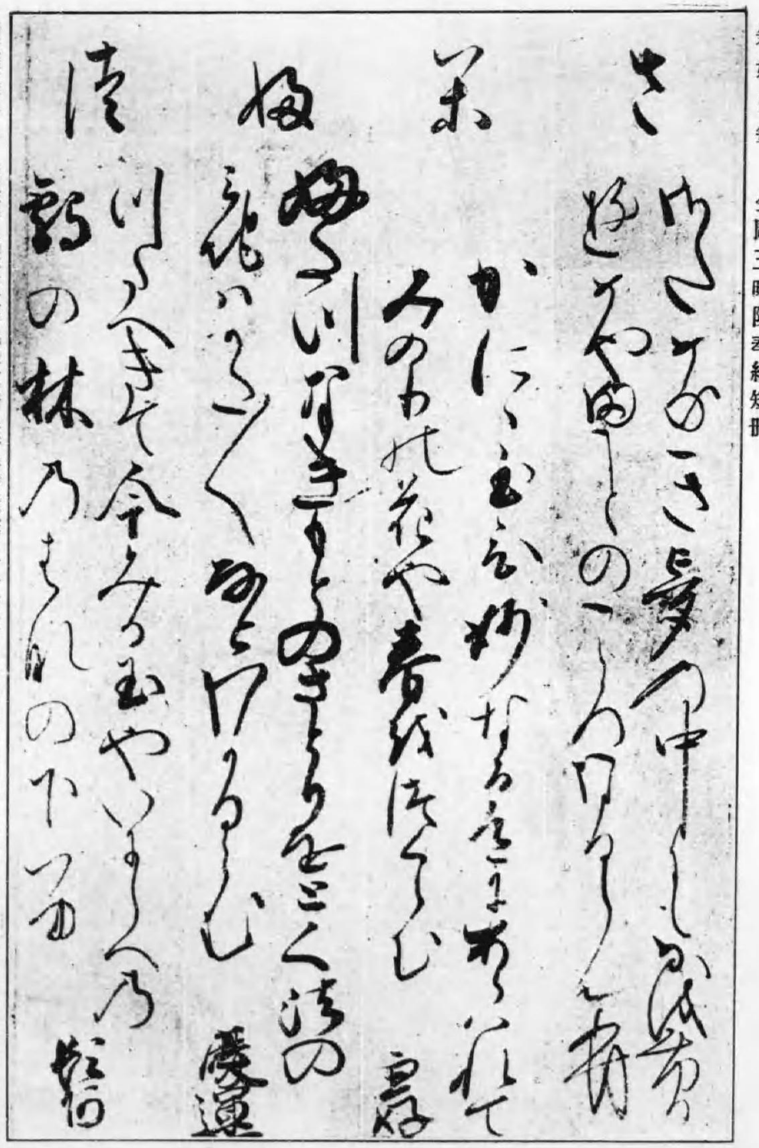
一、挿圖中第二百三十六段にある出雲の狛犬は同僚の長友魚澄總五郎氏が親しく踏査して撮影されたものである。同氏からは又兼好傳資料に就いて教へられた所が多々あります。こゝに厚く謝意を表します。



嵯峨本徒然草の卷頭

徳川家康の頃、刀劍鑑定家にして書藝を能くし、茶事を嗜み、風流自適した本阿彌光悦が、嵯峨の角倉素庵と謀つて、國文學書類を自書し、裝幀に意匠を加へて世に出したものの一。原本和田維四郎氏藏。

兼好自筆　金剛三昧院奉納短冊



足利直義靈夢によつて光明天皇・足利尊氏・直義・高師直・頓阿・兼好・淨弾・慶運等二十八人が、各々なむさかふつせむしむさり（南無釋迦佛舍身舍利）の十二字を首句に冠した和歌百二十一首を、各々自筆で短冊に認め、裝して一軸となし、その裏には、直義・夢窓國師・尊氏の三人順次に寶積經要品を寫し、康永三年十月八日の直義の跋を附して、高野山金剛三昧院に納めたもの。元祿三年前田松雲公金三百枚を以て三昧院より購入し、今前田侯爵家の所藏である。こゝに掲げたのは當時和歌の四天王、淨弾・兼好・慶運・頓阿の筆蹟である。

徒然草　目次

序　段　つれづれなるまゝに……一
第一段　いでやこの世に生れては……一
第二段　いにしへの聖の御代の……二
第三段　よろづにいみじくとも……二
第四段　後の世のこと心に忘れず……三
第五段　不幸にうれへに沈める人の……三
第六段　わが身のやむごとなからむにも……三
第七段　あだし野の露……三
第八段　世の人の心をまどはす事……四
第九段　女は髪のめでたからむこそ……四
第一〇段　家居のつきづきしくあらまほしきこそ……五
第一一段　神無月の頃……六
第一二段　同じ心ならむ人と……六
第一三段　ひとりともしびの下に……七
第一四段　和歌こそ……七
第一五段　いづくにもあれ……八
第一六段　神楽こそ……八
第一七段　山寺にかきこもりて……八
第一八段　人はおのれをつづまやかに……八
第一九段　折ふしの移りかはるこそ……九
第二〇段　某とかやいひし世すて人の……一〇
第二一段　よろづのことは月見るにこそ……一一
第二二段　何事もふるき世のみぞ……一一
第二三段　衰へたる末の世とはいへど……一一
第二四段　齋宮の野の宮に……一三
第二五段　飛鳥川の淵瀬……一三
第二六段　風も吹きあへず……一三
第二七段　御國讓の節會……一四
第二八段　諒闇の年ばかり……一四
第二九段　しづかに思へば……一四
第三〇段　人のなきあとばかり……一五
第三一段　雪のおもしろう降りたりし朝……一六
第三二段　長月二十日の頃……一六

第三三段　今の內裏つくり出されて……一六
第三四段　甲香は……一七
第三五段　手のわろき人の……一七
第三六段　久しくおとづれぬ頃……一七
第三七段　朝夕へだてなく馴れたる人の……一七
第三八段　名利につかはれて……一七
第三九段　ある人法然上人に……一八
第四〇段　因幡の國に……一九
第四一段　五月五日賀茂のくらべ馬を……一九
第四二段　唐橋の中將といふ人の子に……二〇
第四三段　春のくれつ方……二〇
第四四段　あやしの竹の編戸のうちより……二〇
第四五段　公世の二位の兄に……二一
第四六段　柳原の邊に……二一
第四七段　ある人清水へ參りけるに……二二
第四八段　光親卿院の最勝講奉行して……二二
第四九段　老來りて……二二
第五〇段　應長の頃伊勢の國より……二三
第五一段　龜山殿の御池に……二四
第五二段　仁和寺にある法師……二四
第五三段　これも仁和寺の法師……二四
第五四段　御室にいみじき兒の……二五
第五五段　家の造りやうは……二六
第五六段　久しく隔たりて逢ひたる人の……二六
第五七段　人の語り出でたる歌物語の……二七
第五八段　道心あらば……二七
第五九段　大事を思ひ立たむ人は……二六
第六〇段　眞乘院に盛親僧都とて……二六
第六一段　御產の時……二九
第六二段　延政門院……二〇
第六三段　後七日の阿闍梨……二〇
第六四段　車の五緒は……二〇
第六五段　この頃の冠は……二〇
第六六段　岡本の關白殿……二〇
第六七段　賀茂の岩本橋本は……二二
第六八段　筑紫に某の押領使……二二
第六九段　書寫の上人は……二二
第七〇段　元應の清暑堂の御遊に……二三

第七一段　名を聞くより……二三
第七二段　いやしげなるもの……二三
第七三段　世に語り傳ふること……二四
第七四段　蟻の如くに集りて……二五
第七五段　つれづれわぶる人は……二五
第七六段　世のおぼえ花やかなるあたりに……二六
第七七段　世の中にその頃人の……二六
第七八段　今樣の事どもの……二六
第七九段　何ごとも入りたゝぬさま……二六
第八〇段　人ごとにわが身にうとき事……二七
第八一段　屏風障子などの……二七
第八二段　うすものの表紙は……二七
第八三段　竹林院の入道左大臣殿……二八
第八四段　法顯三藏の……二八
第八五段　人の心すなほならねば……二八
第八六段　惟繼の中納言は……二九
第八七段　下部に酒飲ますることは……二九
第八八段　あるもの小野道風の書ける……四〇
第八九段　奥山に猫またといふもの……四〇
第九〇段　大納言の法印の……四一
第九一段　赤舌日といふ事……四一
第九二段　ある人弓射ることを習ふに……四一
第九三段　牛を賣る者あり……四一
第九四段　常磐井の相國……四三
第九五段　箱のくりかたに……四三
第九六段　めなもみといふ草……四三
第九七段　そのものにつきて……四四
第九八段　尊き聖のいひ置きけること……四四
第九九段　堀川の相國は……四四
第一〇〇段　久我の相國は……四五
第一〇一段　ある人任大臣の節會の……四五
第一〇二段　尹の大納言光忠入道……四五
第一〇三段　大覺寺殿にて……四五
第一〇四段　荒れたる宿の人めなきに……四六
第一〇五段　北の屋かげに……四七
第一〇六段　高野の證空上人……四七
第一〇七段　女のものいひかけたる返事……四七
第一〇八段　寸陰惜む人なし……四八

第一〇九段　高名の木のぼり……四九
第一一〇段　雙六の上手といひし人に……五〇
第一一一段　囲碁雙六好みて……五〇
第一一二段　明日は遠國へ……五〇
第一一三段　四十にもあまりぬる人の……五一
第一一四段　今出川のおほい殿……五一
第一一五段　宿河原といふ所にて……五一
第一一六段　寺院の號……五一
第一一七段　友とするにわろきもの……五一
第一一八段　鯉のあつものくひたる日は……五二
第一一九段　鎌倉の海に鰹魚といふ魚は……五二
第一二〇段　からの物は……五三
第一二一段　養ひ飼ふものには……五四
第一二二段　人の才能は……五四
第一二三段　無益の事をなして……五五
第一二四段　是法法師は……五五
第一二五段　人におくれて……五五
第一二六段　ばくちのまけ極りて……五六
第一二七段　あらためて益なきことは……五六
第一二八段　雅房の大納言は……五六
第一二九段　顔回は……五七
第一三〇段　ものに爭はず……五七
第一三一段　貧しき者は……五八
第一三二段　鳥羽のつくり道は……五八
第一三三段　夜の御殿は……五八
第一三四段　高倉院の法華堂の三昧僧……五九
第一三五段　資季大納言入道とかや……六〇
第一三六段　醫師あつしげ……六〇
第一三七段　花は盛に……六一
第一三八段　祭過ぎぬれば……六四
第一三九段　家にありたき木は……六五
第一四〇段　身死して財殘る事は……六六
第一四一段　悲田院の堯蓮上人は……六六
第一四二段　心なしと見ゆるものも……六七
第一四三段　人の終焉のありさまの……六八
第一四四段　栂尾の上人……六八
第一四五段　御隨身秦重躬……六八
第一四六段　明雲座主……六九

第一四七段　灸治あまた所になりぬれば……六九
第一四八段　四十以後の人……六九
第一四九段　鹿茸を鼻にあてて……六九
第一五〇段　能をつかむとする人……六九
第一五一段　ある人の曰く……七〇
第一五二段　西大寺靜然上人……七〇
第一五三段　爲兼大納言入道……七〇
第一五四段　この人東寺の門に……七一
第一五五段　世に從はむ人は……七一
第一五六段　大臣の大饗は……七一
第一五七段　筆を取れば……七一
第一五八段　盃のそこを棄つることは……七一
第一五九段　みなむすびといふは……七一
第一六〇段　門に額かくるを……七二
第一六一段　花のさかりは……七二
第一六二段　遍照寺の承仕法師……七二
第一六三段　太衇の太の字……七四
第一六四段　世の人あひ逢ふ時……七四
第一六五段　あづまの人の……七四
第一六六段　人間の營みあへるわざ……七四
第一六七段　一道にたづさはる人……七四
第一六八段　年老いたる人の……七五
第一六九段　何事の式といふことは……七五
第一七〇段　さしたることとなくて……七六
第一七一段　貝をおほふ人の……七六
第一七二段　若き時は……七七
第一七三段　小野小町が事……七七
第一七四段　小鷹によき犬……七八
第一七五段　世には心得ぬ事の……七八
第一七六段　黑戸は……八〇
第一七七段　鎌倉の中書王にて……八〇
第一七八段　ある所の侍ども……八一
第一七九段　入宋の沙門道眼上人……八一
第一八〇段　さぎちやうは……八一
第一八一段　降れ降れこ雪……八一
第一八二段　四條大納言隆親卿……八二
第一八三段　人突く牛をば……八二
第一八四段　相模の守時賴の母は……八二

第一八五段　城の陸奥の守泰盛は……八二
第一八六段　吉田と申す馬乗の……八三
第一八七段　よろづの道の人……八三
第一八八段　あるもの子を法師になして……八四
第一八九段　今日はその事を……八六
第一九〇段　妻といふものこそ……八六
第一九一段　夜に入りてもののはえなし
　といふ人……八七
第一九二段　神佛にも人のまうでぬ日……八七
第一九三段　くらき人の……八七
第一九四段　達人の人を見る眼は……八八
第一九五段　ある人久我縄手を通りけるに……八九
第一九六段　東大寺の神輿……八九
第一九七段　諸寺の僧のみにもあらず……八九
第一九八段　揚名の介に限らず……八九
第一九九段　横川の行宣法印が……八九
第二〇〇段　吳竹は葉細く……九〇
第二〇一段　退凡下乗の卒都婆……九〇
第二〇二段　十月を神無月といひて……九〇
第二〇三段　勅勘の所に……九〇
第二〇四段　犯人を笞にて打つ時は……九〇
第二〇五段　比叡山に大師勸請の……九〇
第二〇六段　德大寺の右大臣殿……九一
第二〇七段　龜山殿建てられむとて……九一
第二〇八段　經文などの紐をゆふに……九一
第二〇九段　人の田を論ずるもの……九一
第二一〇段　喚子鳥は……九二
第二一一段　よろづの事は賴むべからず……九二
第二一二段　秋の月は……九二
第二一三段　御前の火爐に……九三
第二一四段　想夫戀といふ樂……九三
第二一五段　平の宣時朝臣……九四
第二一六段　最明寺入道……九四
第二一七段　ある大福長者の曰く……九五
第二一八段　狐は人にくひつくものなり……九六
第二一九段　四條の黄門……九六
第二二〇段　何事も邊土は……九七
第二二一段　建治弘安の頃は……九七

第二二二段　竹谷の乘願房……九八
第二二三段　鶴のおほいどのは……九八
第二二四段　陰陽師有宗入道……九八
第二二五段　多の久資が申しけるは……九九
第二二六段　後鳥羽院の御時……九九
第二二七段　六時禮讃は……九九
第二二八段　千本の釋迦念佛は……一〇〇
第二二九段　よき細工は……一〇〇
第二三〇段　五條の内裏には……一〇〇
第二三一段　園の別當入道は……一〇〇
第二三二段　すべて人は……一〇一
第二三三段　よろづのとがあらじと思はば……一〇一
第二三四段　人のものを問ひたるに……一〇一
第二三五段　主ある家には……一〇一
第二三六段　丹波に出雲といふ所……一〇一
第二三七段　柳筥に据うるものは……一〇二
第二三八段　御隨身近友が……一〇四
第二三九段　八月十五日九月十三日は……一〇六
第二四〇段　しのぶの浦のあまのみるめも……一〇六
第二四一段　望月のまどかなることは……一〇七
第二四二段　とこしなへに違順につかはる る事は……一〇八
第二四三段　八になりし年……一〇八

―目次終―

徒然草（完本）

【序】つれづれなるまゝに、日ぐらし硯にむかひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

【一】いでや、この世に生れては、願はしかるべき事こそ多かめれ。みかどの御位はいともかしこし。竹の園生の末葉まで、(一)人間の種ならぬぞやむごとなき。一の人の御有様はさらなり、ただうども舎人など賜るきはは、ゆゝしと見ゆ。その子、うまごまでは、はふれにたれどなほなまめかし。それより下つかたは、ほどにつけつゝ、時にあひ、したり顔なるも、みづからはいみじと思ふらめど、いとくちをし。法師ばかり、羨しからぬ者はあらじ。「人には木のはしのやうに思はるるよ」と、清少納言が書けるも、げにさることぞかし。勢猛にのゝしりたるにつけて、いみじとは見えず。(二)増賀聖のいひけむやうに、(三)名聞ぐるしく、佛の御教にたがふらむとぞ覺ゆる。ひたぶるの世すて人は、なかなかあらまほしきかたもありなむ。人はかたちありさまのすぐれたらむこそ、あらまほしかるべけれ。ものうちいひたる、聞きにくからず、愛敬ありて、ことば多からぬこそ、あかずむかはさほ

（一）芸花非二是人間種一遺樹枝頭第二花。（和漢朗詠集、名花在二閑軒一後江河念）

（二）おるはん子を法師になしたらんこそいと心苦しけれ。さるは、いとたのもしきわざを、ただ木のはしなどのやうに思ひたらん こそ、いといとほしけれ。（枕草紙、ことごとなるもの）

（三）大和多武峯に居りし僧。諫議大夫藤原平の子。比叡山の座主慈慧に學ぶ。長保五年寂。年八十七

（四）かくて名聞こそくるしかりけれ、乞食の身こそたのもしかりけれと歌ひてうちはなれにけり。（鴨長明、發心集、増賀の語）

しけれ。めでたしと見る人の、心おとりせらるる本性見えむこそ、くちをしかるべけれ。品かたちこそ生れつきたらめ、心はなどか、賢きより賢きにも、移さば移らざらむ。かたち、心ざまよき人も、才なくなりぬれば、品くだり、顔にくさげなる人にも立ち交りて、かけずけおさるるこそ、本意なきわざなれ。ありたきことは、まことしき文の道・作文・和歌・管絃の道、また有職に公事のかた、人の鑑ならむこそいみじかるべけれ。手など拙からずはしりがき、聲をかしくて拍子とり、いたましうするものから下戸ならぬこそをのこはよけれ。

【三】いにしへの聖の御代の政をも忘れ、民のうれへ、國のそこなはるるをも知らず、よろづに清らをつくして、いみじと思ひ、所せき樣したる人こそ、うたて思ふ所なく見ゆれ。「(一)衣冠より馬・車に至るまで、あるに隨ひて用ひよ。美麗を求むる事なかれ」とぞ、九條殿の遺誡にも侍る。順德院の禁中の事ども書かせ給へるにも「(二)公のたてまつりものは、おろそかなるをもてよしとす」とこそ侍れ。

【三】よろづにいみじくとも、色好まざらむをのこは、いとさうざうしく、(五)玉の盃そこなき心ちぞすべき。露霜にしほたれて、所定めずまどひありき、親のいさめ、世のそしりをつゝむに、心のいとまなく、あふさきるさに思ひ亂れ、さるはひとりねがちに、まどろむ夜なきこそをかしけれ。さりとて、ひたすらたはれたるかたにはあらで、女にたやすからず思はれむこそ、あらまほしかるべきわざなれ。

【四】後の世のこと心に忘れず、佛の道うとからぬ、心にくし。

【五】不幸にうれへに沈める人の、かしらおろしなど、ふつゝかに思ひ取りたるにはあらで、あるかなきかに門さしこめて、待つ事もなく、明し暮したる、さるかたにあらまほし。

(一)顯基の中納言のいひけむ、(二)配所の月、罪なくて見むこと、さもおぼえぬべし。

【六】わが身のやむごとなからむにも、えして數ならざらむにも、子といふものなくてありなむ。(三)前の中書王、(四)九條の太政大臣、(五)花園の左大臣、皆ぞう絶えむ事を願ひ給へり。染殿の大臣も、「子孫おはせぬぞよく侍る。末のおくれ給へるは、わろきことなり」とぞ、(六)世(七)繼の翁の物語にはいへる。(八)聖德太子の、御墓をかねて築かせ給ひける時も、「(九)こゝを切れ、かしこをたて。子孫あらせじと思ふなり」と侍りけるとかや。

【七】あだし野の露、消ゆる時なく、鳥部山の烟、立ち去らでのみ住みはつる習ならば、いかにもののあはれもなからむ。世は定めなきこそいみじけれ。命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。(一〇)かげろふの夕を待ち、(一一)夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つくづくと一年を暮すほどだにも、こよなうのどけしや。飽かず惜しと思はば、千年を過すとも、一夜の夢の心ちこそせめ。住みはてぬ世に、みにくき姿を待ちえて何かはせむ。命長ければ恥多し。長くとも四十に足らぬほどにて死なむこそめやすかるべけれ。そのほど

(一)始ハ自ニ衣冠一及ニ于馬車一隨レ有用レ之、勿レ求ニ美麗一、不レ費ニ己力一、好ニ美物一必招ニ嗜欲之誚一(遺誡)
(二)藤原師頼。朱雀村上兩朝に仕へ、天慶元年右大臣となり、天曆四年薨ず。年五十三、その邸九條にあり
(三)禁秘抄のこと
(四)但天位賞御物以レ祚爲レ美(禁秘抄、御製東事)
(五)且天玉無レ當、雖レ實非レ用(文選卷一、左太沖三都賦序)
(一)藤原師尹。冬嗣の子。清和、光孝、文德、清和四朝に歷仕し、太政大臣となる。貞觀十四年薨、年六十九。邸、染殿にあり
(七)大鏡のこと
(八)用明帝の皇子、推古帝の皇太子
(九)推古天皇二十六年、太子四十七歲、冬十二月、太子病ニ篤ニ、獨料長墓所一、繁三造ル墓者一、流入三諸内一、四圍岡三左右一曰、此處必斷、萩處必切、欲レ令レ塵ニ累三子孫之後一、聖德太子傳暦)
(一〇)(孟)蜉蝣生而夕死、而衆三兵繁一(淮南子、說林訓)
(一一)(莊)蟪蛄不レ知ニ春秋一、此小年也(莊子、逍遙遊)
(一二)客三勇子一則多懼、富則多事、壽則多辱、是三者非レ所ニ以養一レ德也(莊子、天地篇)

過きぬれば、かたちを恥づる心もなく、人に出でまじらはむことを思ひ、夕の日に子孫を愛してさかゆく末を見むまでの命をあらまし、ひたすら世を貪る心のみ深く、もののあはれも知らずなりゆくなむあさましき。

（一）朝露貪二名利一夕塵憂二子孫一（白氏文集巻二、歎中吟不致仕）

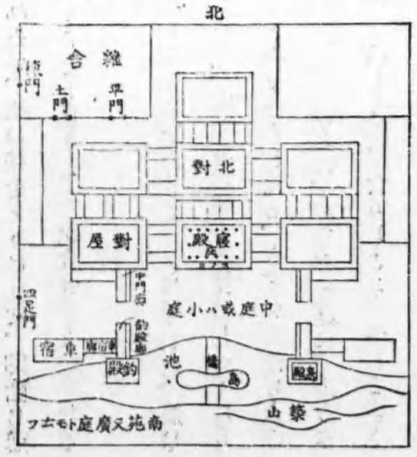
【八】世の人の心をまどはす事、色欲にはしかず。人の心は惑なるものかな。にほひなどは假のものなるに、しばらく衣裳にたきものすと知りながら、えならぬにほひには、必ず心ときめきするものなり。（二）久米の仙人の、もの洗ふ女の脛の白きを見て、通を失ひけむは、まことに手足肌などの、清らに肥えあぶらづきたらむは、外の色ならねば、さもあらむかし。

（二）久米仙者和州上郡ノ人、入二深山一學二仙法一食二松朮一服二朧霧一一旦假レ空飛過二故里一會婦人以レ足洗ス衣一其脛甚白、忽生二染心一即時墜落（元亨釋書巻十八）

【九】女は髪のめでたからむこそ、人のめだつべかめれ。人のほど心ばへなどは、ものうちいひたるけはひにこそ、ものごしにも知らるれ。事にふれて、うちある様にも人の心をまどはし、すべて女のうちとけたる、いも寢ず、身を惜しとも思ひたらず、堪ふべくもあらぬわざにも、よく堪へ忍ぶは、ただ色を思ふが故なり。まことに愛著の道、その根深く、源遠し。六塵の樂欲多しといへども、みな厭離しつべし。その中にただかのまどひの、ひとつやめ難きのみぞ、老いたるも若きも、智あるも愚なるも、かはる所なしとぞ見ゆる。されば女の髪筋をよれる綱には、大象もよく繋がれ、女のはける足駄にて作れる笛には、秋の鹿必ず寄るとぞ、いひ傳へ侍る。みづから戒めて、恐るべく慎むべきは、このまどひなり。

（三）鹿笛

【一〇】家居のつきづきしくあらまほしきこそ、かりのやどりとは思へど、興あるものなれ。よき人ののどやかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色も、一きはしみじみと見ゆるぞかし。今めかしくきらゝかならねど、木立ものふりて、わざとならぬ庭の草も、心あるさまに、簀子・透垣のたよりをかしく、うちある調度も、昔覺えてやすらかなるこそ、心にくしと見ゆれ。多くのたくみの心を盡して磨き立て、からの、やまとの、めづらしく、えならぬ調度ども並べ置き、前栽の草木まで、心のまゝならず作りなせるは、見るめも苦しく、いとわびし。さてもやはながらへ住むべき、また時の間の煙となりなむとぞ、うち見るより思はるる。大方は家居にこそ、ことざまは推し量らるれ。（一）後德大寺のおとどの（二）寢殿に（三）鳶ゐさせじとて、縄を張られたりけるを、西行が見て、（四）鳶の居たらむは、何かは苦しかるべき。この殿の御心さばかりにこそとて、その後は參らざりけると聞き侍るに、（五）綾の小路の宮のおはします小坂殿の棟に、いつぞや縄を引かれたりしかば、か



寢殿造略圖

（一）左大臣藤原實定、建久二年薨
（二）寢殿　下圖參照
（三）後名藤原親清、後鳥羽院北面の武士。二十三歳、出家。建久元年授、年七十三
（四）西行法師、出家よりさきは、鳥羽大寺左大臣の家人にて侍りけり。多年修行の後、都へかへりて、年ごろの主君にまゐはしまする聲しきに、後德大寺左大臣の御許にたどり參りて、まづ門外より内を見入れければ、寢殿の棟に縄をはりけり。あやしう思ひて人に問ねければ「あれは鳥すゑじとて張られたる」と答へけるとて、「鳶の居る何か苦しき」とてうとみて歸りぬ（古今著聞集宿執篇二十三）
（五）亀山帝の皇子性惠法親王

のためし思ひ出でられ侍りしに、さことや鳥の群れゐて、池の蛙をとりければ、御覽じ悲ませ給ひてなむと、人の語りしこそさてはいみじくこそと覺えしか。德大寺にもいかなる故か侍りけむ。

【一一】 神無月の頃、栗栖野(一)といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入ること侍りしに、遙なる苔の細道を踏みわけて、心細く住みなしたる庵あり。木の葉に埋るる寛(二)のしづくならでは、つゆおとなふものなし。閼伽棚(三)に菊・紅葉など折りちらしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられけるよと、あはれに見るほどに、かなたの庭に、大きなる柑子(かうじ)の木の、枝もたわわになりたるが、まばらをきびしく圍ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばと覺えしか。

(一) 山城國乙訓郡山科村大字栗栖野
(二) 筧
(三) 閼伽棚

【一二】 同じ心ならむ人と、しめやかに物語して、をかしきことも、世のはかなきことも、うらなくいひ慰まむこそうれしかるべきに、さる人あるまじければ、つゆたがはざらむと向ひゐたらむは、ひとりある心ちやせむ。互にいはむほどのことをば、げにと聞くかひあるものから、聊かたがふ所もあらむ人こそ、われはさやは思ふなど、爭ひにくみ、さるからさぞともうち語らはば、つれづれ慰まめと思へど、げには少しかこつかたも、われと等しからざらむ人は、大方のよしなしごといはむほどこそあらめ、まめやかの心の友には、遙に隔たる所のありぬべきぞわびしきや。

【一三】 ひとりともしびの下に文をひろげて、見ぬ世の人を友とすること、こよなう慰むわざなれ。文は文選(一)のあはれなる卷々、白氏文集(二)・老子(三)のことば・南華(四)の篇。この國の博士どもの書けるものも、古のはあはれなること多かり。

【一四】 和歌こそなほをかしきものなれ。あやしのしづ山がつのしわざも、いひ出づればおもしろく、おそろしき猪も、臥(五)すゐの床といへば、やさしくなりぬ。この頃の歌は、一ふしをかしくいひかなへたりと見ゆるはあれど、ふるき歌どものやうに、いかにぞや、ことばの外に、あはれにけしき覺ゆるはなし。貫之(六)が「絲(七)によるものならなくに」といへるは、古今集(八)の中の歌屑とかやいひ傳へたれど、今の世の人のよみぬべきことがらとは見えず。その世の歌には、すがたことば、このたぐひのみ多し。この歌に限りて、かくいひ立てられたるも知り難し。源氏物語(九)には、「ものとはなしに(一〇)」とぞ書ける。新古今(一一)には、「殘る松さへ峯にさびしき」といへる歌をぞいふなるは、まことに少しくだけたる姿にもや見ゆらむ。されどこの歌も、衆議判の時、よろしきよし沙汰ありて、後にもことさらに感じ仰せ下されけるよし、家長(一二)が日記には書けり。歌の道のみ古に變らぬなどいふこともあれど、いさや、今もよみあへる同じことばの、歌枕も、昔の人のよめるは、更に同じものにあらず。やすく、すなほにして、姿も清げに、あはれも深く見ゆ。梁塵秘抄(一三)の郢曲のことばこそ又あはれなることは多かめれ。昔の人は、いかにいひ棄てたることぐさも、皆いみじく聞ゆ

(一) 梁の昭明太子編、三十卷
(二) 唐の白樂天詩文集、七十一卷
(三) 周の老聃著二卷
(四) 莊子のこと。莊周著、八卷
(五) 寢所法師がいひけう、歌のかちにいみじきものなし。ゐのしなどいふおろしきものをも、ふすゐのとこといひつれば、やさしきなり。（八雲御抄）
(六) 紀貫之。古今和歌集の撰者天慶九年卒。年六十五
(七) 絲によるのならなくに、別れ路の心細くもおもほゆるかなあづまへまかりける時、道にてよめる。之（古今集、羇旅）
(八) 醍醐帝の延喜五年勅撰。和歌勅撰集の第一。二十卷
(九) 紫式部の著、五十四帖
(一〇) 物とはなしに、と、賀之がこの世ながらの別をだに、心細き筋に引きかけむを（源氏物語、總角の卷）
(一一) 土御門帝建仁三年の勅撰集二十卷
(一二) 冬の來て山もあらはに木の葉より殘る松さへ峯にさびしき（新古今集、冬部、藤原成仲）
(一三) 源家長、土御門帝の建久元年後鳥羽上皇和歌所を置きたまふ時開闔となる
(一四) 後白河院勅撰の謠ひ物集

るにや。

【一五】 いづくにもあれ、しばし旅だちたるこそ目さむる心ちすれ。そのわたりこゝかしこ見ありき、田舎びたる所、山里などは、いと目馴れぬ事のみぞ多かる。都へたよりもとめて文やる。「そのこと、かのこと、便宜に忘るな」などいひやるこそをかしけれ。さやうの所にてこそ、よろづに心づかひせらるれ。もてる調度まで、よきはよく、能ある人、かたちよき人も、常よりはをかしとこそ見ゆれ。寺・社などに忍びてこもりたるもをかし。

【一六】 神楽こそ、なまめかしくおもしろけれ。大方ものの音には、笛・篳篥。常に聞きたきは、琵琶・和琴。

【一七】 山寺にかきこもりて、佛につかうまつるこそ、つれづれもなく、心の濁も清まる心ちすれ。

【一八】 人はおのれをつづましやかにし、おごりを退けて財をもたず、世を貪らざらむぞいみじかるべき。昔より賢き人の富めるは稀なり。もろこしに許由といひつる人は、さらに身に隨へる貯もなくて、水をも手して捧げて飲みけるを見て、なりひさごといふものを人の得させたりければ、ある時、木の枝に懸けたりければ、風に吹かれて鳴りけるを、かしがましとて棄てつ。また手にむすびてぞ水も飲みける。いかばかり心の中すずしかりけむ。孫晨は冬の月に衾なくて、わら一束ありけるを、ゆふべにはこれに臥し、あしたにはをさめけり。もろこしの人は、これをいみじと思へばこそ、記しとどめて世にも傳へけめ、これらの人は語りも傳ふべからず。

【一九】 折ふしの移りかはるこそ、ものごとにあはれなれ。「もののあはれは秋こそまされ」と、人ごとにいふめれど、それもさるものにて、いま一きは心も浮きたつものは、春のけしきにこそあめれ。鳥の聲などもことの外に春めきて、のどやかなる日かげに、垣ねの草萌え出づる頃より、やゝ春深く霞みわたりて、花もやうやうけしきだつ程こそあれ、折しも雨風うち續きて、心あわただしく散り過ぎぬ。青葉になりゆくまで、よろづにただ心をのみぞなやます。花橘は名にこそ負へれ、なほ梅のにほひにぞ古のことも立ちかへり、戀しう思ひ出でらるる。山吹の清げに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひ棄て難きこと多し。灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢すずしげに茂りゆく程こそ、世のあはれも、人のこひしさもまされと、人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月あやめふく頃、早苗とる頃、水鶏のたゝくなど、心ぼそからぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊やり火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。七夕祭るこそなまめかしけれ。やうやう夜寒になるほど、雁鳴きて來る頃、萩の下葉色づくほど、わさ田刈りほすなど、取り集めたる事は、秋のみぞ多かる。また野分の朝こそをかしけれ。いひつづくれば、みな源氏物語・枕草子などにことふりにたれど、同じこと、また今更にいはじとにもあ

（一）笛篠

（二）和琴

（三）支那唐帝時代の賢人

（四）詩中國三賢山一以手掬水飲之、人遺二一瓢一得以取飲、飲訖掛二於樹上一風吹隕々作聲、尚以爲煩、棄去之（高士傳）

（五）三輔決錄云、孫晨字元公、家貧傭書給業、明三詩書一、爲三京兆功曹一、冬月無被、有三織一束一蓐臥朝取、（蒙求、孫晨蓐帳）

（一）花も見つ紅葉をも見つ桑の蔭々多く秋はまされり（拾遺集卷九、詠人知らず）

春はただ花のひとへに咲くばかりもののあはれは秋ぞまされる（拾遺集卷九、詠人知らず）

（二）四月八日、佛生會

（三）賀茂　賀茂祭、四月中の酉の日

（四）七月七日、乞巧奠

（五）清少納言の隨筆

らず。おぼしき事いはぬは、腹ふくるるわざなれば、筆にまかせつつあちきなきすさびにて、かいやり棄つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。さて冬がれのけしきこそ、秋にはをさをさ劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとどまりて、霜いと白う置ける朝、やり水より、煙の立つこそをかしけれ。年の暮れはてて、人ごとに急ぎあへる頃ぞ、又なくあはれなる。(一)すさまじきものにして、見る人もなき月の、寒けくすめる二十日あまりの空こそ、心ぼそきものなれ、(二)御佛名(三)荷前の使たつなどぞ、あはれにやむごとなき。公事ども繁く、春のいそぎに取り重ねて、催し行はるるさまぞいみじきや。(四)追儺より(五)四方拝につづくこそおもしろけれ。つごもりの夜いたう暗きに、松どともして、夜半過ぐるまで、人の門たたきはしりありきて、何事にかあらむ、ことごとしくののしりて、足を空にまどふが、暁方よりさすがに音なくなりぬるこそ、年のなごりも心ぼそけれ。なき人の來る夜とて、魂祭るわざは、この頃都にはなきを、あづまの方には、なほすることにてありしこそあはれなりしか。かくて明けゆく空のけしき、昨日に變りたりとは見えねど、引きかへめづらしきこゝちぞする。大路のさま、松立てわたして、花やかにうれしげなるこそ、またあはれなれ。

【二〇】某(なにがし)とかやいひし世すて人の、「この世のほだしもたらぬ身に、ただ空のなごりのみぞ惜しき」といひしこそ、まことにさも覺えぬべけれ。

(一)世の人のすさまじきことにいふなゝ師走の月夜の、くもりなくさし出でたる（源氏物語、紅葉の巻）
(二) 十二月十七日より三日間禁中に於ける公事。佛名會
(三) 十二月、十陵八墓への遣使
(四) 十二月晦日の夜、禁中に於ける追儺（おにやらひの式）
(五) 正月元旦、天皇、天地四方山陵を拜したまふ

【二一】よろづのことは月見るにこそ慰むものなれ。ある人の、「月ばかりおもしろきものはあらじ」といひしに、またひとり、「露こそあはれなれ」と爭ひしこそをかしけれ。折にふれば、何かはあはれならざらむ。

月花はさらなり、風のみこそ、人に心はつくめれ。岩に碎けて、清く流るる水のけしきこそ、時をもわかずめでたけれ。「(一)沅湘日夜東に流れ去る、愁人の爲に住ることしばらくもせず」といへる詩を見侍りしこそ、あはれなりしか。(二)嵇康も、「(三)山澤に遊びて魚鳥を見れば、心たのしぶ」といへり。人遠く、水草清きところにさまよひありきたるばかり、心なぐさむことはあらじ。

【二二】何事らふるき世のみぞしたはしき。今様はむげにいやしくこそなりゆくめれ。かの木の道のたくみの作れるうつくしきうつはものも、古代のすがたこそ、をかしと見ゆれ。文のことばなどぞ、昔の反古どもはいみじき。

ただいふことばも、口惜しうこそなりもてゆくなれ。古は、「車もたげよ」「火かゝげよ」とこそいひしを、今様の人は、「もてあげよ」「かきあげよ」といふ。主殿寮(とのもりれう)の、「人數(にんず)たて」といふべきを、「たちあかししろくせよ」といひ、(四)最勝講の御聽聞所(みちやうもんどころ)なるをば、「御講(ごかう)の廬(ろ)」とこそいふを、「講廬」といふ、口惜しとぞ、ふるき人は仰せられし。

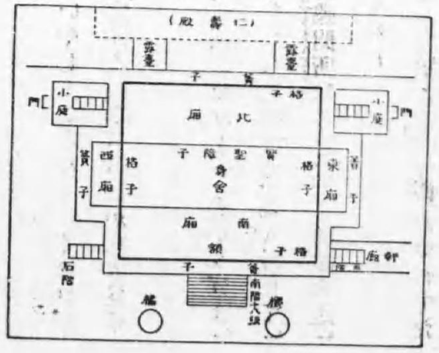
【二三】衰へたる末の世とはいへど、なほ九重の神さびたる有樣こそ、世づかずめでた

(一) 班婕妤閑居賦眺望賦、出門何處望、京師、沅湘日夜東流去、不爲三楚人住少時（三體詩、鶯啼柳）
(二) 支那三國時代の人。竹林七賢の一人
(三) 洗心山澤、觀三魚鳥一心甚悅、之（文選卷九、嵇康與三山濤一絶交書）
(四) 五月、清涼殿に於て、最勝王經を講ぜしめたまふ式

きものなれ。

(一)露臺・(二)朝餉・何殿・何門などは、いみじとも聞ゆべし。あやしの所にもありぬべき小蔀・小板敷・高遣戸なども、めでたくこそ聞ゆれ。「陣に夜のまうけせよ」といふこそ、いみじけれ。夜の(三)御殿のをば、「かいともし、とうよ」などいふ、まためでたし。上卿の陣にて事行へるさまはさらなり、諸司の下人どもの、したりがほに馴れたるもをかし。さばかり寒き夜もすがら、ここかしこに眠り居たるこそをかしけれ。「内侍所の御鈴の音は、めでたく優なるものなり」とぞ、(四)德大寺の太政大臣は仰せられける。

【二四】齊宮の野の宮におはします有様こそ、やさしくもおもしろき事のかぎりとは覺えしか。「經」「佛」など忌みて、「なかご」「そめ紙」などいふなるもをかし。すべて神の社こそ、棄てがたく、なまめかしきものなれや。ものふりたる森のけしきもただならぬに、玉垣しわたして、榊に木綿かけたるなど、いみじからぬかは。ことにをかしきは伊勢・賀茂・(七)春日・(八)平野・(九)住吉・(一〇)三輪・(一一)貴船・(一二)吉田・(一三)大原野・(一四)松の尾・(一五)梅の宮。



(一)露臺　下図参照
(二)朝餉　清涼殿略図参照
(三)御殿　清涼殿略図参照
(四)德大寺實基。建長六年太政大臣に任ぜられ、文永二年薨
(五)伊勢大神宮
(六)賀茂御祖神社。山城國愛宕郡下鴨村
(七)春日神社。大和國添上郡春日山の下
(八)平野神社。山城國葛野郡衣笠村平野
(九)住吉神社。摂津國住吉郡住吉町
(一〇)大神大物主神社。大和國磯城郡三輪山
(一一)貴布禰神社。山城國愛宕郡貴船村
(一二)吉田神社。京都市吉田町吉田山
(一三)大原野神社。山城國乙訓郡山崎山
(一四)松尾神社。山城國葛野郡松尾村
(一五)梅宮。山城國葛野郡西梅津

【二五】(一)飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時(二)移り事去り、たのしびかなしび行きかひて花やかなりしあたりも、人住まぬ野らとなり、變らぬ住家は、人あらたまりぬ。桃李(三)もものいはねば、誰と共にか昔を語らむ。まして見ぬ古のやむごとなかりけむあとのみぞ、いとはかなき。

(四)京極殿・法成寺(五)など見るこそ、志とどまり、事變じにけるさまはあはれなれ。御堂(六)殿の造りみがかせ給ひて、庄園多く寄せられ、わが御族のみ、みかどの御うしろみ、世のかためにて、行末までとおぼし置きし時、いかならむ世にも、かばかりあせはてむとはおぼしてむや。大門・金堂など、近くまでありしかど、正(七)和の頃、南門は燒けぬ。金堂はその後倒れ伏したるまゝにて、とり立つるわざもなし。無量壽院ばかりぞ、そのかたとて殘りたる。丈六の佛九體、いと尊くて並びおはします。行(八)成大納言の額、兼(九)行が書ける扉、あざやかに見ゆるぞあはれなる。法華堂なども未だ侍るめり。これも又いつまでかあらむ。かばかりのなごりだになき所々は、おのづから礎ばかり殘るもあれど、さだかに知れる人もなし。されば よろづに、見ざらむ世までを思ひおきてむこそ、はかなかるべけれ。

【二六】(一〇)風も吹きあへず、うつろふ人の心の、花になれにし年月を思へば、あはれと聞きしことのはごとに忘れぬものから、わが世のほかになりゆくならひこそ、なき人の別よりもふさりて、悲しきものなれ。されば(一一)白き絲の染まむことを悲び、(一二)道の巷の別れむことを

(一)世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞ今日は瀬となる（古今集、雜、讀人不知）
(二)時移り事去り、樂み悲み行きかふとも、この歌の文字あるをや（古今集序）
(三)桃李不言春蔵暮、烟霞無主夕迎昔（和漢朗詠集、菅原文時）
(四)藤原道長の邸
(五)法成寺立の寺
(六)道長。藤原兼家の子。後一條・後朱雀・後冷泉三代の外祖父。寛仁二年太政大臣となり、萬壽四年薨、年六十二
(七)花園帝の時
(八)權大納言藤原行成。能書家。萬壽四年薨、年五十六
(九)大和守藤原兼行
(一〇)櫻花とく散りぬとおもほえず、人の心ぞ風も吹きあへぬ。（古今集、春、紀貫之）
(一一)(一二)機子見二遥路一、而哭之、詩其可二以南一可二以北一、顧子見二練絲一而泣之詩其可二以黄一可二以染上（凝南子、說林訓）

なげく人もありけむかし。(一)堀川院の百首の歌の中に、

(一) 堀川院御時百首和歌

(二) 藤原公實の歌

(二)昔見しいもがかきねはあれにけり
つばなまじりのすみれのみして

(三) 花園天皇

(四) 殿守のとものみやつこ心あらばこの春ばかり朝ぎよめすな（拾遺集雜春、源公忠）

さびしきけしき、さること侍りけむ。

【二七】 御國讓の節會行はれて、劍璽・内侍所わたし奉らるるほどこそ、限なう心ぼそけれ。(三)新院のおりゐさせ給ひての春、よませ給ひけるとかや。

(四)殿守のとものみやつこよそにして
はらはぬ庭に花ぞ散りしく

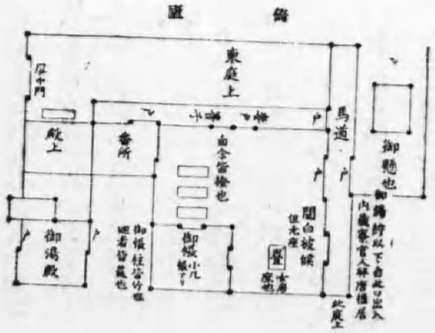
今の世のことしげきにまぎれて、院には參る人もなきぞさびしげなる。かかる折にぞ、人の心もあらはれぬべき。

【二八】 諒闇の年ばかり、あはれなることはあらじ。(五)倚廬の御所のさまなど、板敷をさげ、蘆の御簾をかけて、布の帽額(もかう)あらあらしく、御調度どもおろそかに、みな人の裝束(さうぞく)、太刀・(六)平緒まで、ことやうなるぞゆゝしき。

(五) 倚廬 下圖參照

(六) 平緒

倚廬



【二九】 しづかに思へば、よろづ過ぎにし方のこひしさのみぞ、せむ方なき。人靜りて後、長き夜のすさびに、何となき

具足とりしたゝめ、殘し置かじと思ふ反古(ほうご)などやりすつる中に、なき人の手ならひ、繪かきすさびたる見出でたるこそ、ただその折の心ちすれ。この頃ある人の文だに、久しくなりて、いかなる折、いつの年なりけむと思ふは、あはれなるぞかし。手なれし具足なども、心なくて變らず久しき、いとかなし。

【三〇】 人のなきあとばかり悲しきはなし。中陰のほど、山里などにうつろひて、便あしくせばき所に、あまたあひゐて、後のわざども營みあへる、心あわただし。日數の早く過ぐるほどぞ、ものにも似ぬ。はての日はいとなさけなう、互にいふ事もなく、われかしこげに物ひきしたゝめ、ちりぢりに行きあかれぬ。もとの住家に歸りてぞ、更に悲しきことは多かるべき。しかじかの事は、あなかしこ、あとのため忌む事ぞなどいへるこそ、かばかりの中に何かはと、人の心はなほうたて覺ゆれ。年月經てもつゆ忘るるにはあらねど、(一)去る者は日々にうとしといへることなれば、さはいへど、そのきはばかりは覺えぬにや、よしなしごといひて、うちも笑ひぬ。からはけうとき山の中にをさめて、さるべき日ばかり詣でつゝ見れば、ほどなく卒都婆も苔むし、木の葉ふり埋みて、夕の嵐・夜の月のみぞ、こととふよすがなりける。思ひ出でてしのぶ人あらむ程こそあらめ、そもまたほどなく失せて、聞き傳ふるばかりの末々は、あはれとやは思ふ。さるはあととふわざも絶えぬれば、(二)いづれの人と名をだに知らず、年々の春の草のみぞ、心あらむ人はあはれとも見るべき

(一)（次頁一）去者日以疎、生者日以親、出門一直視、但見丘與一墳、古墓犂爲田、松柏摧爲薪（文選、古詩）

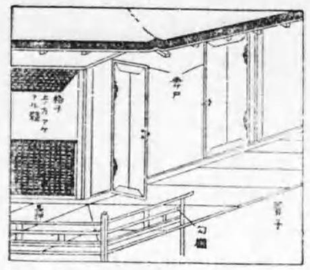
(二) 古墓何代人、不ニ二知姓與一名、化爲二路傍土一、年々春草生（白氏文集、擬古詩）

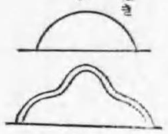
を、はては嵐にむせびし松(一)も、千年を待たで薪に摧かれ、ふるき墳は鋤かれて田となりぬ。そのかただになくなりぬるぞ悲しき。

【三一】雪のおもしろう降りたりし朝、人のがりいふべき事ありて、文をやるとて、雪のこと何ともいはざりし返事に、「この雪いかが見ると、一筆のたまはせぬほどの、ひがひがしからむ人の仰せらるること、聞き入るべきかは。かへすがへす口惜しき御心なり」といひたりしこそ、をかしかりしか。今はなき人なれば、かばかりのことも忘れ難し。

【三二】長月二十日の頃、ある人にさそはれ奉りて、明くるまで月見ありくこと侍りしに、おぼし出づる所ありて、案内せさせて入り給ひぬ。荒れたる庭の露しげきに、わざとならぬにほひ、しめやかにうちかをりて、忍びたるけはひ、いとものあはれなり。よきほどにて出で給ひぬれど、なほことざまの優に覺えて、もののかくれより、しばし見ゐたるに、妻戸をいますこし推しあけて、月見るけしきなり。やがてかけこもらましかば、口惜しからまし。あとまで見る人ありとは、いかでか知らむ。かやうのことは、ただ朝夕の心づかひによるべし。その人、ほどなく失せにけりと聞き侍りし。

【三三】今の内裏つくり出されて、有職の人々に見せられけるに、いづくも難なしとて、既に遷幸の日近くなりけるに、玄輝門院御覽じて、「閑院の櫛形の穴は圓く、ふちもなくてぞありし」と仰せられける、いみじかりけり。これは葉の入りて、木にてふちをしたりければ、あやまりにて、直されにけり。





(一) 前頁(一)參照
(二) 妻戸
(三) 冷泉萬里小路の内裏
(四) 伏見帝の母后、左大臣藤原竹雄の女
(五) もと藤原冬嗣の邸、後に皇居となる
(六) 附圖殿上内の圖參照
(七)(八) 上、圓く綴ぢなきもの　下、葉の入りたるもの

【三四】甲香(一)は、ほらがひのやうなるが、小くて、口のほどの細長にして、出でたる貝の蓋なり。武藏の國金澤といふ浦にありしを、所の者は、へなたりと申し侍るとぞいひし。

(一) 甲香

【三五】手のわろき人の、憚らず、文書きちらすはよし。見ぐるしとて、人に書かするはうるさし。

【三六】久しくおとづれぬ頃、いかばかり怨むらむと、わがおこたり思ひ知られて、ことばなき心ちするに、女の方より、「仕丁やある、一人」などいひおこせたるこそ、あり難くうれしけれ。さる心ざましたる人ぞよきと、人の申し侍りし、さもあるべきことなり。

【三七】朝夕へだてなく馴れたる人の、ともある時、われに心おき、引きつくろへる樣に見ゆるこそ、いまさらかくやはなどいふ人もありぬべけれど、なほげにげにしく、よき人かなとぞおぼゆる。うとき人の、うちとけたる事などいひたる、またよしと思ひつきぬべし。

【三八】名利につかはれて、靜なるいとまなく、一生を苦むるこそ愚なれ。財多ければ身をまもるにまどし。害を買ひ、わづらひを招くなかだちなり。身の後には、金をして北斗を支ふとも、人の爲にぞわづらはるべき。愚なる人の目を喜ばしむるたのしび、又あぢきなし。大きなる車肥えたる馬金玉のかざりも、心あらむ人は、うたて愚なりとぞ見るべ

(二) 身後堆金拄二北斗一不如生前一杯酒(白氏文集廿一、勸酒)

き。(一)金は山に棄て、玉は淵に投ぐべし。利にまどふは、すぐれて愚なる人なり。うづもれぬ名を永き世に殘さむこそ、あらまほしかるべけれ。位高く、やむごとなきをしも、すぐれたる人とやはいふべき。愚につたなき人も、家に生れ、時にあへば、高き位にのぼり、おごりを極むるもあり。いみじかりし賢人(二)、聖人、みづから卑しき位にをり、時にあはずして止みぬる、また多し。ひとへに高きつかさ、位を望むも、次に愚なり。智惠と心とこそ、世にすぐれたる譽も殘さまほしきを、つらつら思へば、譽を愛するは、人の聞きを喜ぶなり。ほむる人、そしる人、共に世にとどまらず、傳へ聞かむ人、またまた速に去るべし。誰をか恥ぢ、誰にか知られむことを願はむ。譽はまた毀のもとなり。身の後の名殘りて、更に益なし。これを願ふも、次に愚なり。但し強ひて智をもとめ、賢を願ふ人の爲にいはば、智惠出でては僞あり、才能は煩惱の增長せるなり。つたへて聞き、まなびて知るは、まことの智にあらず。いかなるをか智といふべき。可不可は一條なり。いかなるをか善といふ。まことの人は、智もなく、徳もなく、功もなく、名もなし。誰か知り、誰か傳へむ。これ徳をかくし、愚を守るにはあらず。もとより賢愚得失の境に居らざればなり。まよひの心をもちて名利をもとむるに、かくのごとし。萬事みな非なり。いふに足らず、願ふに足らず。

(一) 捐二金於山一、沈二珠於淵一（文選卷一、班固、東都賦）

(二) 老子莊周吾之師也、親於二親戚一、榜下惠東方朔達人也、安二乎埤位一、吾豈短之哉（文選、卷九、琴心、廣絕三山論一絕交書）

(三) 大道廢有二仁義一、智慧出有二大僞一（老子）

(四) 方可方不可、方不可方可、因是因、非非因、是（莊子齊物論）

(五) 至人無二己一、神人無二功一、聖人無二名一（莊子逍遙遊）

(六) 以爵祿、賞二於性一、故辭而不受焉、非二以要三名譽一也（莊子、盜跖）

(七) 淨土宗の祖、源空、建暦二年歿、年八十

【三九】　ある人法然上人に、「念佛の時、睡におかされて行をおこたり侍ること、いかがしてこのさはりをやめ侍らむ」と申しければ、「目のさめたらむほど念佛し給へ」と答へられける。いと尊かりけり。又「往生は一定と思へば一定、不定と思へば不定なり」といはれけり。これも尊し。又「疑ひながらも、念佛すれば往生す」ともいはれけり。これもまた尊し。たりけれども、この女、ただ栗をのみ食ひて、更に米のたぐひを食はざりければ、かゝることやうのもの、人に見ゆべきにあらずとて、親ゆるさざりけり。

【四〇】　因幡の國に何の入道とかやいふものの女、かたちよしと聞きて、人あまたいひわ

【四一】　五月五日、賀茂のくらべ馬を見侍りしに、車の前に雜人立ち隔てて見えざりしかば、各〻下りて、埒のきはによりたれど、ことに人多く立ちこみて、わけ入りぬべきやうもなし。かゝる折に、向ひなる樗の木に、法師の上りて、木の股についゐてもの見るあり。取つきながらいたう眠りて、落ちぬべき時に、目を覺すことたびたびなり。これを見る人嘲りあざみて、「世のしれものかな。かく危き枝の上にて、やすき心ありて眠るらむよ」といふに、わが心にふと思ひしまゝに、「われらが生死の到來、ただ今にもやあらむ。それを忘れてもの見て日を暮す。愚なることは、なほまさりたるものを」といひたれば、前なる人ども、「まことにさにこそ候ひけれ。最も愚に候ふ」といひて、みな後を見かへりて、「ここへ入らせ給へ」とて、所を去りて呼び入れ侍りにき。かほどのことわり、誰かは思ひ寄らざらむなれども、折からの思ひかけぬ心ちして、胸に當りけるにや。人木石にあらねば

時にとりて、ものに感ずることなきにあらず。

【四二】唐橋の中將といふ人の子に、行雅僧都とて、教相の人の師する僧ありけり、氣のあがる病ありて、年のやうやうたくるほどに、鼻の中ふたがりて、息も出で難かりければ、さまざまにつくろひけれど、わづらはしくなりて、目・眉・額なども腫れまどひて、うち覆ひければ、ものも見えず、二の舞の面のやうに見えけるが、ただおそろしく鬼の顔になりて、目は頂の方につき、額のほど鼻になりなどして、後は坊の中の人にも見えず、籠り居て、年久しくありて、なほわづらはしくなりて死ににけり。かゝる病もあることにこそ。

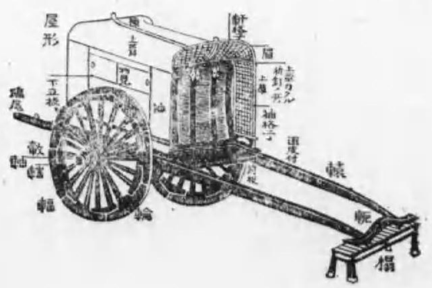
(一) 參議中將源雅清
(二) 二の舞

【四三】春のくれつ方、のどやかに艶なる空に、いやしからぬ家の奥深く、木立ちのふりて、庭に散りしをれたる花見過し難きを、さし入りて見れば、南面の格子みな下ろしてさびしげなるに、東に向きて、妻戸のよきほどにあきたる、御簾のやぶれより見れば、かたち清げなる男の、年二十ばかりにて、うちとけたれど、心にくくのどやかなる樣して、机の上にふみをくりひろげて見ゐたり。いかなる人なりけむ、尋ね聞かまほし。

【四四】あやしの竹の編戸のうちより、いと若き男の、月影に色合さだかならねど、つやゝかなる狩衣に、濃き指貫、いとゆゑづきたるさまにて、さゝやかなる童ひとりを具して、遙なる田の中の細道を、稻葉の露にそぼちつゝ分け行くほど、笛をえならず吹きすさびたる、あはれと聞き知るべき人もあらじと思ふに、行かむ方知らまほしくて、見送りつゝ行けば、笛を吹きやみて、山の際に惣門のあるうちに入りぬ。榻に立てたる車の見ゆるも、都よりは目とまる心ちして、下人に問へば、「しかじかの宮のおはします頃にて、御佛事など候ふにや」といふ。御堂の方に法師ども參りたり。夜寒の風に誘はれくる空だきもののにほひも、身にしむ心ちす。寢殿より御堂の廊に通ふ女房の、追風用意など、人目なき山里ともいはず、心づかひしたり。心のまゝに茂れる秋の野らは、置きあまる露に埋れて、蟲の音かごとがましく、遣水の音のどやかなり。都の空よりは、雲のゆきゝも早き心ちして、月の晴れ曇ること定め難し。

(五) 狩衣
(四) 妻戸同右

前頁(六) 指貫
(一) 榻 下圖參照
(二) 廂殿 十四段插圖參照



【四五】公世の二位の兄に、良覺僧正と聞えしは、極めて腹あしき人なりけり。坊の側に大きなる榎のありければ、人、榎の僧正とぞいひける。この名然るべからずとて、かの木を伐られにけり。その根のありければ、さりくひの僧正といひけり。いよいよ腹だちて、切りくひを掘り棄てたりければ、その跡大きなる堀にてありければ、堀池の僧正とぞいひける。

【四六】柳原の邊に、强盜法印と號する僧ありけり。たびたび强盜にあひたる故に、この

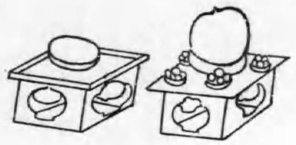
(三) 從二位侍從藤原公世、正安三年死
(四) 比叡山の大僧正
(五) 京都市上京區家町邊

名をつけにけるとぞ。

【四七】　ある人、清水へ参りけるに、老いたる尼の行きつれたりけるが、道すがら、「くさめくさめ」といひもて行きければ、「尼御前、何事をかくはのたまふぞ」といひけれども、いらへもせず、猶いひ止まざりけるを、たびたび問はれて、うち腹だちて、「やゝ、はなひたる時、かくまじなはねば死ぬるなりと申せば、やしなひ君の、比叡の山にちごにておはしますが、ただ今もやはなひ給はむとおもへば、かく申すぞかし」といひけり。ありがたき志なりけむかし。

【四八】　光親卿、院の最勝講奉行して候ひけるを、御前へ召されて、供御を出されて、食はせられけり。さて食ひちらしたる銜重を、御簾の中へさし入れてまかり出でにけり。女房、「あなきたな、誰にとれとてか」など申しあはれければ、「有職のふるまひ、やむごとなきことなり」と、かへすがへす感ぜさせ給ひけるとぞ。

【四九】　老來りて、はじめて道を行せむと待つことなかれ。ふるき墳多くはこれ少年の人なり。はからざるに病をうけて、忽にこの世を去らむとする時にこそ、はじめて過ぎぬる方のあやまれることは知らるれ。あやまりといふは他の事にあらず、速にすべき事をゆるくし、ゆるくすべき事をいそぎて、過ぎにし事のくやしきなり。その時悔ゆとも、かひあらむや。



(一) 京都東山清水寺
(二) 藤中納言藤原光親、承久七年北條氏の爲に斬らる、年四十六
(三) 後鳥羽上皇
(四) 銜重
(五) 老來ッテ若ニモ來ル方樂ト道古墳多是少年人。（寒山詩）

人はただ、無常の身に迫りぬる事を、心にひしとかけて、つかのまも忘るまじきなり。さらばなどか、この世の濁りも薄く、佛道をつとむる心もまめやかならざらむ。昔ありけるひじりは、人の來りて自他の要事をいふ時、答へていはく、「今、火急の事ありて、既に朝夕に迫れり」とて、耳をふたぎて念佛して、遂に往生を遂げけりと、禪林の十因に侍り。心戒といひけるひじりは、あまりにこの世のかりそめなる事を思ひて、しづかについゐけることだになく、常はうづくまりてのみぞありける。

【五〇】　應長の頃、伊勢の國より、女の鬼になりたるをゐて上りたりといふ事ありて、その頃二十日ばかり、日ごとに京白川の人、鬼見にとて出でまどふ。「昨日は西園寺に參りたりし、今日は院へ參るべし、ただ今はそこそこに」などいひあへり。まさしく見たりといふ人もなく、そらごとといふ人もなし。上下ただ、鬼の事のみいひやまず。その頃、東山より安居院の邊へまかり侍りしに、四條よりかみざまの人、みな北を指して走る。一條室町に鬼ありとのゝしりあへり。今出川の邊より見やれば、院の御棧敷のあたり、更に通り得べうもあらず立ちこみたり。はやくあとなき事にはあらざめりとて、人をやりて見するに、大方あへる者なし。暮るるまでかく立ち騒ぎて、はては鬪諍起りて、あさましき事どもありけり。その頃おしなべて、二日三日人のわづらふこと侍りしをぞ、かの鬼のそらごとは、このしるしを示すなりけりといふ人も侍りし。

(一) 京都東山永觀堂の永觀律師の著、往生十因
(二) 平宗盛の子、俗名宗親、平家滅亡の後出家
(三) 花園帝の年號
(四) 京都及び東方郊外白川
(五) 左大臣西園寺公衡、或は太政大臣西園寺實兼の邸
(六) 後宇多院或は伏見院の御所
(七) 山城國愛宕郡

【五一】 亀山(一)殿の御池に、大井川の水をまかせられむとて、大井の土民に仰せて、水車を作らせられけり。多くのあしを賜ひて、數日にいとなみ出して、かけたりけるに、大方めぐらざりければ、とかくなほしけれども、遂にまはらで、徒に立てりけり。さて宇治の里人を召して、こしらへさせられければ、やすらかにゆひて參らせたりけるが、思ふやうにめぐりて、水を汲み入るる事、めでたかりけり。よろづにその道を知れるものは、やむごとなきものなり。

【五二】 仁和寺(二)にある法師、年よるまで石清水(三)を拜まざりければ、心うくおぼえて、ある時思ひ立ちて、ただひとり、かちより詣でけり。極樂寺(四)・高良(五)などを拜みて、かばかりと心得て歸りにけり。さてかたへの人にあひて、「年頃思ひつること果し侍りぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも參りたる人毎に、山へ登りしは、何事かありけむ。ゆかしかりしかど、神へ參るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず」とぞいひける。すこしの事にも先達はあらまほしきことなり。

【五三】 これも仁和寺の法師、重の法師にならむとする名殘とて、各〻遊ぶことありける に、醉ひて興に入るあまり、傍なる足鼎(六)を取りて、頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおしひらめて、顔をさし入れて舞ひ出でたるに、滿座興に入ること限なし。しばしかなでて後、ぬかむとするに、大方ぬかれず。酒宴ことさめて、いかがはせむとまどひけり。

(一) 京都郊外嵯峨にありし離山院の山莊

(二) 眞言宗の寺、山城岡崎神郡花園村御室にあり、通稱御室

(三) 石清水八幡宮、山城岡崎喜郡八幡町男山にあり

(四)(五) 男山の麓にあり、八幡宮の末社

(六) 足鼎

とかくすれば、頸のまはりかけて、血垂り、ただはれみちて、息もつまりければ、うちわらむとすれど、たやすくわれず。響きて堪へ難かりければ、かなはで、すべきやうなくて、三足なる角の上に、かたびらをうちかけて、手を引き、杖をつかせて、京なる醫師のがりゐて行きけるに、道すがら、人の怪み見ること限なし。醫師のもとにさし入りて、對ひゐたりけむありさま、さこそことやうなりけめ。ものをいふも、くぐもり聲に響きて聞えず。「かかる事は書にも見えず、傳へたる教もなし」といへば、又仁和寺へ歸りて、親しき者、老いたる母など、枕上に寄りゐて、泣き悲めども、聞くらむとも覺えず。かゝるほどに、ある者のいふやう、「たとひ耳鼻こそ切れ失すとも、命ばかりはなどか生きざらむ。ただ力を立てて引き給へ」とて、藁のしべをまはりにさし入れて、かねを隔てて、頸もちぎるばかり引きたるに、耳鼻缺けうげながら拔けにけり。からき命まうけて、久しく病みゐたり。

【五四】 御室にいみじき兒のありけるを、いかでさそひ出して遊ばむとたくむ法師どもありて、能ある遊び法師どもなどかたらひて、風流の破籠(一)やうのもの、ねんごろに營み出でて、箱風情のものにしたゝめ入れて、雙の岡の便よき所に埋み置きて、紅葉ちらしかけなど、思ひよらぬさまにして、御所へ參りて、兒をそそのかし出でにけり。うれしと思ひて、こゝかしこ遊びめぐりて、ありつる苦のむしろになみゐて、「いたうこそこうじにたれ。あはれ紅葉(二)をたかむ人もがな。驗あらむ僧だち、祈り試みられよ」などいひしろひて、埋

(一) 破籠

(二) 林間暖、酒爐二紅葉一、石上題詩擲二難銷一(白氏文集卷十四)

みつる木の下に向きて、数珠おしすり、印ことごとしく結び出でなどして、いらなくふるまひて、木の葉をかきのけたれど、つやつやものも見えず。所の違ひたるにやとて、掘らぬ所もなく、山をあされども、なかりけり。埋みけるを、人の見置きて、御所へ参りたるまに、盗めるなりけり。法師ども言の葉なくて、聞きにくくいさかひ、腹だちて帰りにけり。あまりに興あらむとする事は、必ずあいなきものなり。

【五五】家の造りやうは、夏をむねとすべし。冬はいかなる所にも住まる。暑き頃、わろき住居は堪へ難きことなり。深き水は涼しげなし。浅くて流れたる、はるかに涼し。こまかきものを見るに、遣戸は蔀の間よりもあかし。天井の高きは、冬寒く、ともしびくらし。造作は用なき所を造りたる見るもおもしろく、よろづの用にもたちてよしとぞ、人の定めあひ侍りし。

【五六】久しく隔たりて逢ひたる人の、わが方にありつること、かずかずに残りなく、語りつづくるこそあいなけれ。へだてなく馴れぬる人も、程へて見るは恥かしからぬかは。夫ざまの人は、あからさまに立ち出でても、興ありつる事とて、息もつきあへず語り興ずるぞかし。よき人の物語するは、人あまたあれど、一人に向きていふを、おのづから人も聞くにこそあれ。よからぬ人は、誰ともなく、あまたの中にうち出でて、見ることのやうに語りなせば、みな同じく笑ひのゝしる、いとらうがはし。をかしき事をいひても、いたく興せぬと、興なき事をいひても、よく笑ふにぞ、品のほどはしられぬべき。人の見ざまのよしあし、才ある人は、その事など定めあへるに、おのが身を引きかけていひ出でたる、いとわびし。

【五七】人の語り出でたる歌物語の、歌のわろきこそ本意なけれ。少しその道知らむ人は、いみじと思ひては語らじ。すべて、いとも知らぬ道の物語したる、かたはらいたく、聞きにくし。

【五八】「道心あらば住む所にしもよらじ。家にあり、人に交るとも、後世を願はむに難かるべきかは」といふは、更に後世知らぬ人なり。げにはこの世をはかなみ、必ず生死を出でむと思はむに、何の興ありてか、朝夕君に仕へ、家を顧みるいとなみのいさましからむ。心は縁に引かれて移るものなれば、しづかならでは道は行じがたし。そのうつはものは昔の人に及ばず、山林に入りても、飢をたすけ、嵐を防ぐよすがなくては、あられぬわざなれば、おのづから世を貪るに似たることも、便にふれば、などかなからん。さればとて、「背けるかひなし。さばかりならば、なじかは棄てし」などいはむは、むげの事なり。さすがに一たび道に入りて、世を厭はむ人、たとひ望ありとも、勢ある人の貪欲多きに似るべからず。紙の衾・麻の衣・一鉢のまうけ・藜のあつもの、いくばくか人の費をなさむ。求むる所はやすく、その心早く足りぬべし。かたちに恥づる所もあれば、さはいへど、悪にはう

とく、善には近づく事のみぞ多き。人と生れたらむしるしには、いかにもして世を遁れむ事こそ、あらまほしけれ。ひとへに貪る事をつとめて、菩提に赴かざらむは、よろづの畜類に變る所あるまじくや。

【五九】大事を思ひ立たむ人は、さりがたく、心にかゝらむことの本意を遂げずして、さながらすつべきなり。しばしこの事はてて、同じくはかの事沙汰しおきて、しかじかの事、人の嘲やあらむ、行く末難なくしたゝめまうけて、年頃もあればこそあれ、その事待たむほどあらじ、ものさわがしからぬやうになど思はむには、えさらぬ事のみ、いとどかさなりて、ことの盡くるかぎりもなく、思ひ立つ日もあるべからず。おほやう人を見るに、少し心あるきはは、みなこのあらましにてぞ、一期は過ぐめる。近き火などに逃ぐる人は、しばしとやいふ。身をたすけむとすれば、恥をも顧みず、財をもすてて、逃れ去るぞかし。命は人を待つものかは。無常の來ることは、水火の攻むるよりも速に、逃れ難きものを。その時、老いたる親・いときなき子・君の恩・人の情すて難しとてすてざらむや。

【六〇】眞乘院(一)に、盛親僧都(二)とて、やむごとなき智者ありけり。芋頭といふ物を好みて、多く食ひけり。談義の座にても、大きなる鉢にうづたかく盛りて、膝もとに置きつゝ、食ひながら書をも讀みけり。煩ふ事あるには、七日二七日など、療治とて籠りゐて、思ふやうに、よき芋頭えらびて、ことに多く食ひて、よろづの病をいやしけり。人に食はする事

(一) 仁和寺の末寺
(二) 傳不詳

なし。ただひとりのみぞ食ひける。極めて貧しかりけるに、師匠死にざまに、錢二百貫と坊一つを讓りたりけるを、坊を百貫に賣りて、かれこれ三萬疋を、芋頭のあしと定めて、京なる人に預けおきて、十貫づつ取り寄せて、芋頭をともしからずめしけるほどに、又ことように用ふることなくて、そのあし皆になりにけり。三百貫のものを貧しき身にまうけて、かゝはからひける、まことにありがたき道心者なりとぞ人申しける。

この僧都、ある法師を見て、しろうるりといふ名をつけたりけり。「とは何物ぞ」と、人の問ひければ、「さる物をわれも知らず。もしあらましかば、この僧の顔に似てむ」とぞいひける。この僧都、みめよく、力強く、大食にて、能書、學匠、辯說、人にすぐれて、宗の法燈なれば、寺中にも重く思はれたりけれども、世を輕く思ひたるくせものにて、よろづ自由にして、大かた人に從ふといふ事なし。出仕して饗膳などにつく時も、皆人の前するわたすを待たず、わが前に据ゑぬれば、やがてひとりうち食ひて、歸りたければ、一人つい立ちて行きけり。時、非時も人にひとしく定めて食はず、わが食ひたき時、夜中にも、曉にも食ひて、ねぶたければ、晝もかけ籠りて、いかなる大事あれども、人のいふこと聞き入れず。目さめぬれば、いく夜もいねず、心をすましてうそぶきありきなど、世の常ならぬさまなれども、人にいとはれず、よろづ許されけり。德の至れりけるにや。

【六一】御產の時、甑(一)落すことは、定れることにはあらず。御胞衣とどこほる時のまじな

(一) 甑

ひなり。とどこほらせ給はねばこの事なし。下ざまより事おこりて、させる本説なし。大原の里の甑をめすなり。ふるき寶藏の繪に、いやしき人の子産みたる所に、甑落したるを書きたり。

(一) 後嵯峨帝皇女悦子内親王

【六二】(一)延政門院、いときなくおはしましける時、院へ參る人に、ことづてとて申させ給ひける御歌、

ふたつもじ牛の角もじすぐなもじ
ゆがみもじとぞ君はおぼゆる

こひしく思ひ參らせ給ふとなり。

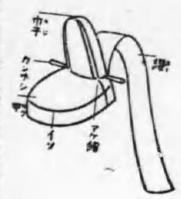
【六三】(二)後七日の阿闍梨、武者を集むること、いつとかや盗人にあひにけるより、宿直人(とのゐびと)とて、かくことごとしくなりにけり。一とせの相は、この修中のありさまにこそ見ゆなれば、つはものを用ひむこと、おだやかならぬ事なり。

(二) 正月八日より一日間、禁中眞言院の御修法

【六四】車の五緒(いつを)は、必ず人によらず、ほどにつけて、きはむる官位(つかさくらゐ)に至りぬれば、乘るものなりとぞ、ある人仰せられし。

【六五】(三)この頃の冠(かぶり)は、昔よりははるかに高くなりたるなりとぞ、ある人仰せられし。古代の冠桶を持ちたる人ははたをつぎて、今用ふるなり。

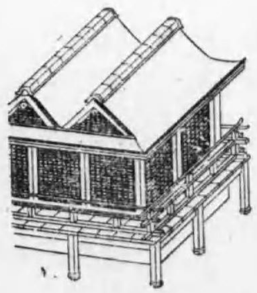
(三) 冠



【六六】(四)岡本の關白殿、さかりなる紅梅の枝に、鳥一雙を添へて、この枝につけて參らすべきよし、御鷹飼下毛野武勝に仰せられたりけるに、「花に鳥つくるすべ知り候はず。一枝に二つつくることも存じ候はず」と申しければ、膳部に尋ねられ、人々に問はせ給ひて、また武勝に、「さらばおのれが思はむやうにつけて參らせよ」と、仰せられたりければ、花もなき梅の枝に、一つをつけて參らせけり。武勝が申し侍りしは、「柴の枝・梅の枝、つぼみたると散りたるとにつく。五葉などにもつく。枝の長さ七尺、或は六尺、かへし刀五分に切る。枝の半に鳥をつく。つくる枝、踏まする枝あり。しじら藤のわらぬにて二所つくべし。藤の先は、火打羽のたけにくらべて切りて、牛の角のやうにたわむべし。初雪の朝、枝を肩にかけて、中門よりふるまひて參る。大砌の石を傳ひて、雪に跡をつけず、雪おほひの毛を少しかなぐりちらして、二棟の御所の高欄に寄せかく。禄を出さるれば、肩にかけて拜して退く。初雪といへども、沓の鼻のかくれぬほどの雪には參らず。雨おほひの毛ぞちらす事は、鷹は弱腰をとることなれば、御鷹のとりたるよしなるべし」と申しき。花に鳥つけずとは、いかなる故にかありけむ。長月ばかりに梅の造り枝に雉をつけて、「君がためにと折る花は、時しもわかぬ」といへること、伊勢物語に見えたり。造り花は、苦しからぬにや。

(一) 返し刀

(二) 二棟の御所　下圖參照



(三) 昔おほきおほいまうちぎみと聞ゆるおはしけり。つかうまつる男、長月ばかりに梅の作り枝に雉を附けて奉るとて「わが頼む君が爲にと折る花は時しもわかぬものにぞありける」とよみて奉りたりければ、いとかしこく、をかしがりたまひて、使に祿たまへりけり。(伊勢物語)

(一)(二) 京都上賀茂神社の末社。在原業平、平城帝の孫阿保親王の五男、元慶四年歿、年五十六
(三) 藤原實方、奥州に流され長徳四年歿。実方朝臣和尚、悲田ともいふ。開白忠通の子、京都東山の吉水に居りたり
(四) 山帝の中宮嬉子（今出川院）に仕へたる近衛といふ宮女

【六七】 賀茂の岩本・橋本は、業平・實方なり。人の常にいひまがへ侍れば、一とせ參りたりしに、老いたる宮司の過ぎしを呼びとどめて、「尋ね侍りしに、實方は御手洗に影のうつりける所と侍れば、橋本やなほ水の近ければと覺え侍る。吉水の和尚、「月をめで花をながめしいにしへの、やさしき人はこゝにあり原」とよみ給ひけるは、岩本の社とこそ承り置き侍れど、おのれらよりは、なかなか御存知なども候はめ」と、いと恭しくいひたりしこそ、いみじく覺えしか。

今出川の院の近衛とて、集どもにあまた入りたる人は、若かりける時、常に百首の歌をよみて、かの二つの社の御前の水にて書きて、手向けられたりけり。まことにやむごとなき譽ありて、人の口にある歌多し。作文・詩序などいみじく書く人なり。

【六八】 筑紫に某の押領使などいふやうなる者のありけるが、土大根をよろづにいみじき藥とて、朝毎に二つづつ燒きて食ひけること、年久しくなりぬ。ある時、館の中に人もなかりける隙をはかりて、敵襲ひ來りて、圍み攻めけるに、館の中につはもの二人出で來て、命を惜まず戰ひて、皆追ひ返してけり。いと不思議に覺えて、「日頃こゝにものし給ふとも見えぬ人々の、かく戰し給ふは、いかなる人ぞ」と問ひければ、「年頃たのみて、朝な朝なめしつる土大根らに候ふ」といひて、失せにけり。深く信を致しぬれば、かゝる德もありけるにこそ。

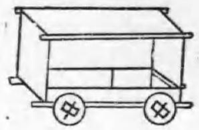
(一) 性空の事。繹聞書寫山に居り、寛弘四年寂、年八十
(二) 眼・耳・鼻・舌・身・意
(三) 後醍醐帝の年號
(四) 宮中顯榮院の後殿
(五) 藤原養秀、元亨二年右大臣となる。「に菊花を植ゑ、菊亭と稱す

【六九】 書寫の上人は、法華讀誦の功つもりて、六根淨にかなへる人なりけり。旅のかりやに立ち入られけるに、豆の殼を焚きて豆を煮ける音の、つぶつぶと鳴るを聞き給ひければ、「うとからぬおのれらしも、うらめしくわれをば煮て、からきめを見するものかな」といひける。焚かるる豆殼のはらはらと鳴る音は、「わが心よりすることかは。燒かるるはいかばかり堪へ難けれども、力なき事なり。かくな恨み給ひそ」とぞ聞えける。

【七〇】 元應の清暑堂の御遊に、玄上は失せにし頃、菊亭のおとど、牧馬を彈じ給ひけるに、座に著いて先づ柱をさぐられたりければ、一つ落ちにけり。御懷にそくひをもち給ひたるにてつけられければ、神供の參る程に、よくひて、こと故なかりけり。いかなる意趣かありけむ、もの見げるきぬかづきの寄りて、放ちて、もとのやうに置きたりけるとぞ。

【七一】 名を聞くより、やがて面影は推し量らるる心ちするを、見る時はまた、かねて思ひつるまゝの顏したる人こそなけれ。昔物語を聞きても、この頃の人の家の、そこ程にてぞありけむと覺え、人も今見る人の中に、おもひよそへらるるは、誰もかく覺ゆるにや。又いかなる折ぞ、ただ今人のいふ事も、目に見ゆるものも、わが心の中も、かゝる事の、いつぞやありしがと覺えて、いつとは思ひ出でねども、まさしくありし心ちするは、われはかりかく思ふにや。

【七二】 いやしげなるもの。居たるあたりに調度の多き、硯に筆の多き、持佛堂に佛の多



＊文車

き、前栽に石・草木の多き、家の中に子孫の多き、人にあひてことばの多き、願文に作善多く書き載せたる。多くて見苦しからぬは文車の文・塵塚の塵。

【七三】 世に語り傳ふること、まことはあいなきにや、多くはみなそらごとなり。あるにも過ぎて、人はものをいひなすに、まして年月過ぎ、境も隔たりぬれば、いひたきまゝに語りなして、筆にも書きとどめぬれば、やがて定りぬ。

道々のものの上手のいみじき事など、かたくなる人の、その道知らぬは、そぞろに神の如くにいへども、道知れる人は、更に信を起さず。音に聞くと見る時とは、何事もかはるものなり。かつあらはるるをも顧みず、口にまかせていひちらすは、やがてうきたることと聞ゆ。又われもまことしからずは思ひながら、人のいひしまゝに、鼻のほどをごめきていふは、その人のそらごとにはあらず。げにげにしく所々うちおぼめき、よく知らぬよしして、さりながらつまづき合せて語るそらごとは、恐しきことなり。わがため面目あるやうにいはれぬるそらごとは、人いたくあらがはず。皆人の興ずるそらごとは、ひとりさもなかりしものを」といはむも詮なくて、聞き居たるほどに、證人にさへなされて、いとど定りぬべし。とにもかくにも、そらごと多き世なり。ただ常にある、めづらしからぬことのまゝに心得たらむ、よろづ違ふべからず。下ざまの人の物語は、耳驚くことのみあり。よき人はあやしきことを語らず。

かくはいへど、佛神の奇特、權者の傳記、さのみ信ぜざるべきにもあらず。これは世俗のそらごとを、ねんごろに信じたるもをこがましく、よもあらじなどいふも詮なければ、大方はまことしくあしらひて、ひとへに信ぜず、また疑ひあざけるべからず。

【七四】 蟻の如くに集りて、東西にいそぎ、南北に走る。高きあり、卑しきあり。老いたるあり、若きあり、行く所あり、歸る家あり。夕に寢ねて、朝に起く。いとなむ所何事ぞや。生を貪り、利を求めて、やむ時なし。身を養ひて、何事をか待つ。期するところ、ただ老と死とにあり。その來る事速にして、念々の間にとどまらず。これを待つ間、何の樂があらむ。惑へるものはこれを恐れず。名利に溺れて、先途の近きことを顧みねばなり。愚なる人はまたこれを悲しぶ。常住ならむことを思ひて、變化の理を知らねばなり。

【七五】 つれづれわぶる人は、いかなる心ならむ。まぎるる方なく、ただ一人あるのみこそよけれ。世に從へば、心、外の塵にうばはれて惑ひやすく、人に交はれば、ことばよその聞きにしたがひて、さながら心にあらず。人に戲れ、ものに爭ひ、一度は恨み、一度は喜ぶ。その事定れることなし。分別みだりに起りて、得失やむ時なし、まどひの上に醉へり。醉の中に夢をなす。走りていそがはしく、ほれて忘れたること、人みなかくの如し。未だまことの道を知らずとも、緣をはなれて身を靜にし、事にあづからずして、心をやすくせむこそ、暫く樂ぶともいひつべけれ。生活、人事、伎能、學問等の諸緣をやめよとこそ、摩

＊文車　文車の文・塵塚の塵。

＊天台三大部の一、智者大師法華觀心の行法を口述し、弟子灌頂之を記す、十卷

訶止観にも侍れ。

【七六】 世のおぼえ花やかなるあたりに、なげきも喜びもありて、人多く行きとぶらふなかに、聖法師のまじりて、いひ入れ、たゝずみたるこそ、さらずともと見ゆれ。さるべき故ありとも、法師は人にうとくてありなむ。

【七七】 世の中にその頃、人のもてあつかひぐさにいひあへること、いろふべきにはあらぬ人の、よく案内しりて、人にも語り聞かせ、問ひ聞きたるこそうけられね。殊にかたはとりなる聖法師などぞ、世の人の上は、わが如く尋ね聞き、いかでかばかりは知りけむと覺ゆるまでぞ、いひちらすめる。

【七八】 今様の事どもの珍しきを、いひ廣めもてなすこそ、又うけられね。世にことふりたるまで知らぬ人は心にくし。今更の人などのある時、こゝもとにいひつけたることぐさ、物の名など、心得たるどち、かたはしいひかはし、目見あはせ、笑ひなどして、心知らぬ人に、心得ず思はすること、世なれず、よからぬ人の、必ずある事なり。

【七九】 何ごとも入りたゝぬさましたるぞよき。よき人は知りたる事とて、さのみ知り顔にやはいふ。片田舎よりさし出でたる人こそ、よろづの道に心得たるよしのさしいらへはすれ。されば世に恥しきかたもあれど、みづからいみじと思へるけしき、かたくななり。よくわきまへたる道には、必ず口重く、問はぬかぎりは、いはぬこそいみじけれ。

【八〇】 人ごとに、わざ身にうとき事をのみぞ好める。法師はつはものの道を立て、夷は弓引くすべ知らず、佛法知りたる氣色し、連歌し、管絃を嗜みあへり。されどおろかなるおのれが道より、なほ人に思ひ侮られぬべし。法師のみにあらず、上達部・殿上人、上ざまで、おしなべて武を好む人多かり。百たび戰ひて百たび勝つとも、未だ武勇の名を定め難し。その故は、運に乘じてあたをくだく時、勇者にあらずといふ人なし。つはものつき、矢きはまりて、遂に敵に降らず、死をやすくして後、はじめて名をあらはすべき道なり。生けらむほどは、武に誇るべからず。人倫に遠く、禽獸に近きふるまひ、その家にあらずば、好みて益なきことなり。

【八一】 屏風・障子などの繪も、文字も、かたくなる筆やうして書きたるが見にくきよりも、宿の主人のつたなく覺ゆるなり。大方もてる調度にても、心おとりせらるる事はありぬべし。さのみよき物をもつべしとにもあらず。損せざらむためとて、品なく、見にくきさまにしなし、珍しからむとて、用なき事どもし添へ、わづらはしく好みなせるをいふなり。ふるめかしきやうにて、いたくことごとしからず、つひえもなくて、物がらのよきがよきなり。

【八二】 「うすものの表紙は、とく損ずるがわびしき」と、人のいひしに、頓阿*が、「うすものは上下はづれ、螺鈿の軸は貝落ちて後こそいみじけれ」と申し侍りしこそ、心ぶかさりて

* 兼好と同時代の僧にして歌人。元中元年寂、年八十四。殷富・源氏・兼好と共に、和歌の四天王と稱せらる

(一) 僧好と同時代の人、伊賀國佛性寺の覺照座に住す

(二) 西園寺公衡、應長元年出家、正和四年歿、年五十二

(三) 藤原實泰、文保二年左大臣となり、元亨二年之を辭し、嘉歴二年薨

(四) 亢龍有悔（易經乾卦）

(五) 支那唐代の高僧、羅安二年經經を求めむ爲印度に渡る、年八十六歴にて寂

(六) 法顯去三國之難年、所三與交接一悉異城人、山川草木變目無一舊、又同行分散、或疾或亡、顧影唯一、心常懼一悲、忽於二異玉像邊一見一商人以二白絹扇一供養一、不覺悲然、淚下滿一目（高僧法顯傳）

覺えしか。一部とある草紙などの、同じやうにあらぬを、見にくしといへど、弘融僧都が、「ものを必ず一具に整へむとするは、拙き者のすることなり。不具なるこそよけれ」といひしも、いみじく覺えしなり。すべて何もみな、事のとゝのほりたるは、あしきことなり。し殘したるを、さてうち置きたるはおもしろく、生きのぶるわざなり。內裏造らるるにも、必ず造りはてぬ所を殘すことなりと、ある人申し侍りしなり。先賢の作れる內外の文にも、章段の缺けたることのみぞ侍る。

【八三】竹林院の入道左大臣殿、太政大臣にあがり給はむに、何のとどこほりかおはせむなれども、「珍しげなし、一の上にてやみなむ」とて、出家し給ひにけり。洞院左大臣殿、この事を甘心し給ひて、相國の望おはせざりけり。亢龍の悔ありとかやいふ事侍るなり。月滿ちては缺け、ものさかりにしては衰ふ。よろづの事、さきのつまりたるは、やぶれに近き道なり。

【八四】法顯三藏の天笠にわたりて、故郷の扇を見て悲み、病に臥しては漢の食を願ひ給ひることを聞きて、「さばかりの人の、むげにこそ心よわきけしきを、人の國にて見え給ひけれ」と人のいひしに、弘融僧都、「優になさけありける三藏かな」といひたりしこそ、法師のやうにもあらず、心にくゝ覺えしか。

【八五】人の心すなほならねば僞なきにしもあらず。されどもおのづから正直の人など

かからむ。おのれすなほならねど、人の賢を見て羨むは世の常なり。至りて愚なる人は、たまたま賢なる人を見て、これをにくむ。「大きなる利を得むが爲に、少しきの利を受けず、僞りかざりて、名を立てむとす」とそしる。おのれが心に違へるによりて、この嘲をなすにて知りぬ。この人は下愚の性、移るべからず。僞りて小利をも辭すべからず。かりにも愚を學ぶべからず。狂人のまねとて、大路を走らば、則ち狂人なり。惡人のまねとて人を殺さば、惡人なり。驥を學ぶは驥のたぐひ、舜を學ぶは舜の徒なり。僞りても賢を學ばむを、賢といふべし。

【八六】惟繼の中納言は、風月の才に富める人なり。一生精進にて讀經うちして、寺法師の聞伊僧正と同宿して侍りけるに、文保に三井寺燒かれし時、坊主にあひて、「御坊をば寺法師とこそ申しつれど、寺はなければ、今よりは法師とこそ申さめ」といはれけり。いみじき秀句なりけり。

【八七】下部に酒飲ますることは、心すべきことなり。宇治に住みける男、京に具覺坊とて、なまめきたる遁世の僧を、小舅なりければ、常に申しむつびけり。ある時、迎へに馬をつかはしたりければ、「遙なる程なり、口つきの男にまづ一どせさせよ」とて酒を出したれば、さし受けさし受け、よゝと飲みぬ。太刀うちはきて、かひがひしければ、たのもしく覺えて、召し具して行くほどに、木幡のほどにて、奈良法師の兵士あまた具して逢ひたるに、

(一) 驥好馬之異、亦驥之乘也（揚子法言）

(二) 支那上代の聖天子

(三) 平氏、元德二年權中納言、建武二年文章博士、康永二年歿、年七十八

(四) 大納言伊平の孫、歌人

(五) 花園帝の文保元年四月二十五日三井寺燒く

(六) 山城國宇治郡宇治村大字木幡の邊

この男立ち向ひて、「日くれにたる山中にあやしきぞ、とまり候へ」といひて、太刀を引き抜きければ、人もみな太刀ぬき、矢はげなどしけるを、具覺坊手をすりて、「うつし心なく酔ひたるものに候ふ。まげて許し給はらむ」といひければ、おの〳〵嘲りて過ぎぬ。この男、具覺坊にあひて、「御坊は口惜しき事し給ひつるものかな。おのれ酔ひたること侍らず。高名仕らむとするを、抜ける太刀、空しくなし給ひつること」と怒りて、ひた切りに切り落しつ。さて山だちありと、のゝしりければ、里人起り出であへば、「われこそ山だちよ」といひて、走りかゝりつゝ切り廻りけるを、あまたして手おほせ、うち伏せて縛りけり。馬は血つきて、宇治大路の家に走り入りたり。あさましくて、男どもあまた走らかしたれば、具覺坊は、梔原（くちなしはら）にによび伏したるを、もとめ出でて、かきもて來つ。からき命生きたれど、腰切り損ぜられて、かたはになりにけり。

【八八】　あるもの、小野道風（一）の書ける和漢朗詠集（二）とて持ちたりけるを、あの人、「御相傳、うける事には侍らじなれども、四條大納言（三）撰ばれたるものを、道風書かむこと、時代や違ひ侍らむ、おぼつかなくこそ」といひければ、「さ候へばこそ、世にあり難きものには侍りけれ」とて、いよいよ秘藏しけり。

【八九】「奥山に猫またといふものありて、人を食（くら）ふなる」と、人のいひけるに、「山ならねども、これらにも猫のへあがりて、猫またになりて、人とる事はあなるものを」といふものありけるを、何阿彌陀佛とかや、連歌しける法師の、行願寺*のほとりにありけるが聞きて、一人ありかむ身は、心すべきことにこそと、思ひける頃しも、ある所にて、夜更くるまで連歌して、ただ一人歸りけるに、小川のはたにて、音に聞きし猫また、あやまたず足のもとへ、ふと寄り來て、やがてかきつくまゝに、頸のほどを食（くら）はむとす。肝心も失せて、防がむとするに力もなく、足も立たず、小川へころび入りて、「助けよや、猫また、よやよや」と叫べば、家々より松どもともして、走り寄りて見れば、このわたりに見知れる僧なり。「こはいかに」とて、川の中より抱き起したれば、連歌の賭物取りて、扇・小箱など、懐に持ちたるも水に入りぬ。希有にして助りたるさまにて、はふはふ家に入りにけり。飼ひたる犬の、暗けれど主を知りて、飛びつきたりけるとぞ。

【九〇】　大納言法印の召し使ひし乙鶴丸、やすら殿といふ者を知りて、常に行き通ひしに、ある時出でて歸り來たるを、法印、「いづくへ行きつるぞ」といひしかば、「やすら殿のがりまかりて候ふ」といふ。「そのやすら殿とは、男か法師か」とまた問はれて、袖かきあはせて、「いかが候ふらむ、頭（かしら）をば見候はず」と答へ申しき。などか頭ばかりの見えざりけむ。

【九一】　赤舌日（しやくぜつにち）といふ事、陰陽道には沙汰なき事なり。昔の人これを忌まず。この頃何者のいひ出でて、忌みはじめけるにか。この日ある事、末通らずといひて、その日いひたりしこと、したりし事かなはず、得たりし物は失ひ、企てたりし事成らずといふ、愚なり。

（一）書道の名家、醍醐・朱雀・村上の三朝に歴事し、康保三年歿、年七十一
（二）藤原公任編、和歌漢詩の朗詠すべきものを集む、二卷
（三）藤原公任の事。詩歌のオすぐれたる人、正二位權大納言兼按察使に至り、長久二年歿、年七十六

＊京都一條にあり、俗に革堂（かうどう）といふ

吉日を選びてなしたるわざの末通らぬを數へて見むも、又等しかるべし。その故は、無常變易のさかひ、ありと見るものも存せず、始あることも終なし。志は遂げず、望は絶えず。人の心不定なり、もの皆幻化なり。何事か暫くも住する。この理を知らざるなり。吉日に惡をなすに、必ず凶なり。惡日に善を行ふに、必ず吉なりといへり。吉凶は人によりて、日によらず。

【九二】 ある人、弓射ることを習ふに、もろ矢を手挿みて的に向ふ。師のいはく、「初心の人、二つの矢をもつことなかれ。後の矢をたのみて、初の矢になほざりの心あり。毎度ただ得失なく、この一矢に定むべしと思へ」といふ。僅に二つの矢、師の前にて、一つをおろかにせむと思はむや。懈怠の心、みづから知らずといへども、師これを知る。この戒め萬事にわたるべし。道を學する人、夕には朝あらむことを思ひ、朝には夕あらむことを思ひて、重ねて懇に修せむことを期す。いはむや一刹那のうちにおいて、懈怠の心あることを知らむや。何ぞただ今の一念において、ただちにすることの甚だ難き。

【九三】 「牛を賣る者あり。買ふ人、明日その價をやりて、牛を取らむといふ。夜の間に牛死ぬ。買はむとする人に利あり、賣らむとする人に損あり」と語る人あり。これを聞きて、かたへなる者の曰く、「牛の主、まことに損ありといへども、また大なる利あり。その故は生あるもの、死の近き事を知らざること、牛既にしかなり。人また同じ。はからざるに牛

は死し、はからざるに主は存せり。一日の命、萬金よりも重し。牛の價、鵝毛よりも輕し。萬金を得て一錢を失はむ人、損ありといふべからず」といふに、皆人嘲りて、「その理は牛の主に限るべからず」といふ。又曰く、「されば人、死をにくまば、生を愛すべし。存命のよろこび、日々に樂まざらむや。愚なる人この樂を忘れて、いたつがはしく外の樂を求め、この財を忘れて、あやふく他の財を貪るには、志満つことなし。生ける間生を樂まずして、死に臨みて死を恐れば、この理あるべからず。人皆生を樂まざるは、死を恐れざる故なり。死を恐れざるにはあらず、死の近き事を忘るるなり。もしまた生死の相に與らずといはば、まことの理を得たりといふべし」といふに、人いよいよ嘲る。

【九四】 常磐井の相國、出仕し給ひけるに、勅書をもちたる北面あひ奉りて馬より下りたりけるを、相國後に、「北面なにがしは、勅書をもちながら下馬し侍りし者なり。かほどの者、いかでか君につかうまつり候ふべき」と申されければ、北面を放たれにけり。勅書を馬の上ながら、捧げて見せ奉るべし。下るべからずとぞ。

【九五】 「箱のくりかたに、緒をつくること、いづかたにつけ侍るべきぞ」と、ある有職の人に尋ね申し侍りしかば、「軸につけ、表紙につくること、兩說なれば、いづれも難なし。文の箱は、多くは右につく。手箱には、軸につくるも常のことなり」と仰せられき。

【九六】 めなもみといふ草あり。くちばみにさゝれたる人、かの草をもみてつけぬれば、

(一) 太政大臣藤原實氏、文永六年薨、年七十六
(二) 箱のくりかた　圓形　山形　スハマ形
(三) 下圖の○は緒を通すル
(三) めなもみ

すなはち癒ゆとなむ。見知りて置くべし。

【九七】　そのものにつきて、そのものを費しそこなふもの、數を知らずあり。身に虱あり、家に鼠あり、國にぬすびとあり、小人に財あり、君子に仁義あり、僧に法あり。

【九八】　尊き聖のいひ置きけることを書きつけて、(一)一言芳談とかや名づけたる草紙を見侍りしに、心にあひて覺えし事ども、

一、しやせまし、せずやあらましと思ふ事は、おほやうはせぬはよきなり。

一、後世を思はむ者は、糂粉瓶一つも持つまじきことなり。持經・本尊に至るまで、よきものを持つ、よしなき事なり。

一、遁世者は、なきに事かけぬやうをはからひて過ぐる、最上のやうにてあるなり。

一、上臈は下臈になり、智者は愚者になり、德人は貧になり、能ある人は無能になるべきなり。

一、佛道を願ふといふは、別の事なし。暇ある身になりて、世のこと心にかけぬを、第一の道とす。

この外もありしことども覺えず。

【九九】　(二)堀川の相國は美男の樂しき人にて、その事となく過差を好み給ひけり。御子基俊卿を大理になして、廳務を行はれけるに、廳屋(三)の唐櫃見ぐるしとて、めでたく造り改めらるべき由仰せられけるに、この唐櫃は上古より傳はりて、その始を知らず、數百年を經たり。累代の公物、古弊をもつて規模とす。たやすく改め難き由、故實の諸官等申しければ、この事やみにけり。

【一〇〇】　(一)久我の相國は殿上にて水をめしける時、主殿司土器を奉りければ、「まがりを參らせよ」とて、まがりしてぞめしける。

【一〇一】　ある人、任大臣の節會の內辨を勤められけるに、內記のもちたる宣命を取らずして堂上せられにけり。きはまりなき失禮なれども、立ち返り取るべきにもあらず、思ひわづらはれけるに、六位の外記康綱、きぬかづきの女房をかたらひて、かの宣命をもたせて、しのびやかに奉らせけり。いみじかりけり。

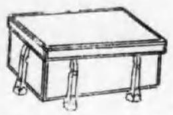
【一〇二】　(二)尹の大納言光忠入道、追儺の上卿を勤められけるに、(三)洞院の右大臣殿に次第を申し請けられければ、「又五郎男を師とするより外の才覺候はじ」とぞのたまひける。かの又五郎は、老いたる衞士の、よく公事に馴れたる者にてぞありける。近衞殿、著陣し給ひける時、膝突を忘れて、外記を召されければ、火たきて候ひけるが、「まづ膝突を召さるべくや候ふらむ」と、しのびやかにつぶやきける、いとをかしかりけり。

【一〇三】　(四)大覺寺殿にて近習の人ども、なぞ〳〵を作りて解かれける所へ、くすし(五)忠守參りたりけるに、(六)侍從大納言公明卿、「わが朝の者とも見えぬ忠守かな」と、なぞ〳〵にせら

(一) 作者不詳　二卷、續群書類從にも收む

(二) 久我太政大臣源基具

(三) 唐櫃



(一) 太政大臣源雅實、大治二年薨、年六十九

(二) 從正尹大納言源光忠、入道して野忠といふ

(三) 從一位右大臣藤原實泰

(四) 後宇多院の御所

(五) 典藥頭丹波忠守

(六) 藤原公明

れけるを、「唐瓶子」と解きて笑ひあはれければ、腹だちてまかでにけり。

【一〇四】　荒れたる宿の人めなきに、女の憚る事ある頃にて、つれづれと籠りゐたるを、ある人とぶらひ給はむとて、夕月夜のおぼつかなきほどに、忍びて尋ねおはしたるに、犬のことごとしく咎むれば、げす女の出でて、「いづくよりぞ」といふに、やがて案内せさせて入り給ひぬ。心ばそげなるありさま、いかで過すらむと、いと心ぐるし。あやしき板敷にしばし立ち給へるを、もてしづめたるけはひの若やかなるして、こなたへといふ人あれば、たてあけ所せげなる遣戸よりぞ入り給ひぬる。内のさまは、いたくすさまじからず。心にくく、火はあなたにほのかなれど、もののきらなど見えて、俄にしもあらぬにほひ、いとなつかしう住みなしたり。「門よくさしてよ、雨もぞ降る。御車は門の下に、御供の人はそこそこに」といへば、「今宵ぞやすきいは寝べかめる」と、うちさゝめくも忍びたれど、ほどなければほの聞ゆ。さてこのほどの事ども、こまやかに聞え給ふに、夜ぶかき鶏も鳴きぬ。こしかたゆく末かけて、まめやかなる御物語に、このたびは、鶏もはなやかなる聲にうちしきれば、明けはなるるにやと聞き給へど、夜深く急ぐべき所のさまにもあらねば、少したゆみ給へるに、ひま白くなれば、忘れ難き事などいひて、立ち出で給ふに、梢も庭もめづらしく青みわたりたる、卯月ばかりのあけぼの、艶にをかしかりしをおぼし出でて、桂の木の大きなるが隠るるまで、今も見送り給ふとぞ。

(一) 轅　四十四段挿圖参照

(二) 長押　三十二段挿圖参照

(三) 傳不詳

【一〇五】　北の屋かげに消え殘りたる雪の、いたうこほりたるに、さし寄せたる車の轅も、霜いたくきらめきて、有明の月さやかなれども、隈なくはあらぬに、人ばなれたる御堂の廊に、なみなみにはあらずと見ゆる男、女と長押に尻かけて、物語するさまこそ、何事にかあらむ、つきすまじけれ。かぶし・かたちなど、いとよしと見えて、えもいはぬにほひの、さとかをりたるこそをかしけれ。けはひなど、はつれはつれ聞えたるもゆかし。

【一〇六】　高野の證空上人、京へ上りけるに、細道にて、馬に乗りたる女の行きあひたりけるが、口引ける男あしく引きて、聖の馬を堀へ落してけり。聖いと腹あしく咎めて、「こは希有の狼藉かな。四部の弟子はよな、比丘よりは比丘尼は劣り、比丘尼より優婆塞は劣り、優婆塞より優婆夷は劣れり。かく優婆夷などの身にて、比丘を堀へ蹴入れさする、未曾有の悪行なり」といはれければ、口引きの男、「いかに仰せらるるやらむ、えこそ聞き知らね」といふに、上人なほいきまきて、「何といふぞ、非修非學の男」と、あらゝかにいひて、きはまりなき放言しつと思ひけるけしきにて、馬引きかへして逃げられにけり。尊かりけるいさかひなるべし。

【一〇七】　女のものいひかけたる返事、とりあへずよきほどにする男はあり難きものぞとて、龜山院の御時、しれたる女房ども、若き男たちの參らるるごとに、「時鳥や聞き給へる」と問ひて試みられけるに、某の大納言とかや、「數ならぬ身は、え聞き候はず」と、答へ

られけり。堀川の内大臣殿は、「岩倉にて聞きて候ひしやらむ」と仰せられたりけるを、「これは難なし。数ならぬ身むつかし」など、定めあはれけり。すべて男をば、女に笑はれぬやうにおふしたつべしとぞ。「浄土寺の前の關白殿はをさなくて、安喜門院のよく教へまゐらせさせ給ひける故に、御詞などのよきぞ」と、人の仰せられけるとかや。山階左大臣殿は、「あやしの下女の見奉るも、いと恥しく、心づかひせらるる」とこそ仰せられけれ。女のなき世なりせば、衣紋も冠もいかにもあれ、引きつくろふ人も侍らじ。

かく人に恥ぢらるる女、いかばかりいみじきものぞと思ふに、女の性は皆ひがめり。人我の相深く、貪慾甚しく、物の理を知らず、ただ迷の方に、心もはやくうつり、ことばもたくみに、苦しからぬ事をも、問ふ時はいはず、用意あるかと見れば、又あさましき事まで、問はずがたりにいひ出す。深くたばかり飾れる事は、男の智恵にもまさりたるかと思へば、その事あとよりあらはるるをも知らず。すなほならずして、拙きものは女なり。その心に従ひてよく思はれむことは、心うかるべし。されば何かは、女の恥しからむ。もし賢女あらば、それもものうとくすさまじかりなむ。ただ迷をあるじとして、かれに従ふ時、やさしくも、おもしろくも覺ゆべき事なり。

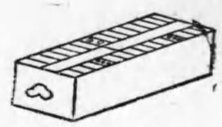
〔一〇八〕 寸陰惜む人なし。これよく知れるか、愚なるか。愚にして怠る人のためにいはば、一錢輕しといへども、これを重ぬれば、貧しき人を富める人となす。されば商人の一

(一) 源具守、堀川太政大臣基具の子、正和二年内大臣となる
(二) 九條師教、左大臣、關白、摂政となり、元應二年薨、年四十四
(三) 後堀河帝の皇后、藤原有子
(四) 浄土寺太政入道公藤の女
(四) 藤原實雄、文永十年薨　年五十七

錢を惜む心切なり。刹那覺えずといへども、之を運びてやまざれば、命を終ふる期忽に至る。されば道人は、遠く日月を惜むべからず、ただ今の一念、空しく過ぐる事を惜むべし。もし人來りて、わが命あすは必ず失はるべしと告げ知らせたらむに、けふの暮るる間、何事をか頼み、何事をか營まむ。われらが生けるけふの日、何ぞその時節に異らむ。一日の中に、飲食、便利、睡眠、言語、行歩、やむことを得ずして、多くの時を失ふ。そのあまりの暇いくばくならぬ中に、無益のことを爲し、無益のことをいひ、無益のことを思惟して、時を移すのみならず、日を消し月をわたりて、一生を送る、最も愚なり。謝靈運は法華の筆受なりしかども、心常に風雲の思を觀せしかば、慧遠、白蓮の交を許さざりき。しばらくもこれなき時は死人に同じ。光陰何の爲に惜むとならば、内に思慮なく、世事なくして、やまむ人はやみ、修せむ人は修せよとなり。

〔一〇九〕 高名の木のぼりといひし男、人を掟てて、高き木にのぼせて梢をきらせしに、いと危く見えしほどは、いふ事もなくて、下るる時に、軒だけばかりになりて、「あやまちすな、心して下りよ」と、言葉をかけ侍りしを、「かばかりになりては、飛び下るとも下りなむ。いかにかくはいふぞ」と、申し侍りしかば、「その事に候ふ。目くるめき、肢危きほどは、おのれが恐れ侍れば申さず。過はやすき所になりて、必ず仕ることに候ふ」といふ。あやしき下薦なれども、聖人のいましめにかなへり。鞠も難き所を蹴出して後、やすく思

(一) 支那六朝時代、詩人、元嘉十年歿、年四十九
(二) 東晉の人、廬山の虎溪東林寺の僧
(三) 慧遠、池に白蓮を植え、僧俗の信徒相會して白蓮社と呼ぶ
(四) 君子安而不忘危、存而不忘亡、治而不忘亂、是以身安而國家可保也（易經繫辭）



(一) 雙六

へば、必ず落つと侍るやらむ。

【一一〇】 雙六(一)の上手といひし人に、そのてだてを問ひ侍りしかば、「勝たむと打つべからず、負けじと打つべきなり。いづれの手かとく負けぬべきと案じて、その手をつかはずして、一目なりとも、おそく負くべき手につくべし」といふ。道を知れる教、身を修め、國を保たむ道も、またしかなり。

【一一一】 「圍碁、雙六好みて、あかしくらす人は、四重五逆(二)にもまされる惡事とぞ思ふ」と、ある聖の申し事、耳にとどまりて、いみじく覺え侍る。

【一一二】 明日は遠國へ赴くべしと聞かむ人に、心しづかになすべからむわざをば、人いひかけてむや。俄の大事をもいとなみ、切になげく事もある人は、他のこと聞き入れず、人の愁喜をもとはず。とはずとて、などやと恨むる人もなし。されば年もやうやうたけ、病にもまつはれ、況や世をも逃れたらむ人、またこれに同じかるべし。人間の儀式、いづれの事かさり難からぬ。世俗のもだし難きに從ひて、これを必ずとせば、願も多く、身も苦しく、心のいとまもなく、一生は雜事の小節にさゝへられて、空しく暮れなむ。日暮れ途遠し、わが生既に蹉跎たり、諸緣を放下すべき時なり。信をも守らじ、禮儀をも思はじ。この心を得ざらむ人は、ものぐるひともいへ、うつゝなし情なしとも思へ、譏るとも苦まじ、譽るとも聞き入れじ。

(二) 殺生、偸盜、邪淫、妄語
(三) 殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出佛身血
(四) 日暮而途遠、吾生已蹉跎(盧書白居易傳)

【一一三】 四十にもあまりぬる人の、色めきたるかたち、おのづから忍びてあらむはいかがはせむ、ことにうち出でて、男女のこと、人の上をもいひたはるるこそ、にげなく見苦しけれ。大方聞きにくく、見苦しきこと、老人の若き人にまじはりて、興あらむともいひたる、數ならぬ身にて、世のおぼえある人を隔てなきさまにいひたる、まづしき所に酒宴好み、客人に饗應せむときらめきたる。

(一) 菊亭集巻、七十段にも出づ

【一一四】 今出川(一)のおほい殿、嵯峨へおはしけるに、有栖川のわたりに、水の流れたる所にて、さい王丸、御牛を追ひたりければ、あがきの水、前板までさゝとかゝりけるを、爲則、御車のしりに候ひけるが、「希有の童かな。かゝる所にて御牛をば追ふものか」といひたりければ、おほい殿御氣色あしくなりて、「おのれ車やらむこと、さい王丸にまさりてえ知らじ。希有の男なり」とて、御車に頭をうち當てられにけり。この高名のさい王丸は、太秦殿の男、料の御牛飼ぞかし。この太秦殿に侍りける女房の名ども、一人はひささち、一人はことづち、一人はほうばら、一人はおとうしとつけられけり。

(一) 藤原信清、坊門内大臣、建保四年薨、年五十八

【一一五】 宿河原(二)といふ所にて、ぼろぼろ多く集りて九品の念佛を申しけるに、外より人り來るぼろぼろの、「もしこの中に、いろおし坊と申すぼろやおはします」と尋ねければ、その中より、「いろおしこゝに候ふ。かくのたまふは誰そ」と答ふれば、「しら梵字と申す者なり。おのれが師なにがしと申しし人、東國にていろおしと申すぼろに殺されたりと

(二) 武藏國多摩川べりの河原か

承りしかば、その人に逢ひ奉りて恨み申さばやと思ひて尋ね申すなり」といふ。いろおし、「ゆゝしくも尋ねおはしたり。さること侍りき。こゝにて對面し奉らば、道場を汚し侍るべし。前の河原へ參りあはむ。あなかしこ、わきざしたち、いづ方をも見つぎ給ふな。あまたのわづらひにならば、佛事のさまたげに侍るべし」といひ定めて、二人河原へ出であひて、心ゆくばかりに貫きあひて、共に死ににけり。ぼろぼろといふもの、昔はなかりけるにや。近き世にぼろんじ、梵字、漢字などいひけるもの、その始なりけるとかや。世を棄てたるに似て我執深く、佛道を願ふに似て鬪諍をこととす。放逸無慚のありさまなれども、死を輕くして、少しもなづまざる方のいさぎよく覺えて、人の語りしまゝに書きつけ侍るなり。

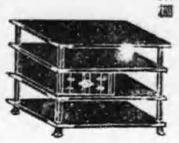
【一一六】　寺院の號、さらぬよろづの物にも、名をつくること、昔の人は少しも求めず、ただありのまゝに、やすくつけけるなり。この頃は深く案じ、才覺をあらはさむとしたるやうに聞ゆる、いとむつかし。人の名も、目なれぬ文字をつかむとする、益なきことなり。何事もめづらしき事を求め、異說を好むは、淺才の人の必ずある事なりとぞ。

【一一七】　友とするにわろきもの七つあり。一には高くやむごとなき人、二には若き人、三には病なく身强き人、四には酒を好む人、五には武く勇める人、六にはそらごとする人、七には欲ふかき人。よき友三つあり。一にはものくるる友、二にはくすし、三には智惠ある友。

【一一八】　鯉のあつものくひたるは、鬢そゝけずとなむ。膠にもつくるものなれば、ねばりたるものにこそ。鯉ばかりこそ、御前にても切らるるものなれば、やむごとなき魚なり。鳥には雉、さうなきものなり。雉、松茸などは、御湯殿の上にかゝりたるも苦しからず。その外は心うきことなり。中宮の御方の御湯殿の上の黑み棚に、雁の見えつるを、北山の入道殿の御覽じて、歸らせ給ひて、やがて御文にて、「かやうのもの、さながらその妻にて御棚にゐて候ひしこと、見ならはず、さまあしき事なり。はかばかしき人の候はぬ故にこそ」など申されたりけり。

【一一九】　鎌倉の海に鰹魚といふ魚は、かの境にはさうなきものにて、この頃もてなすものなり。それも鎌倉の年寄の申し侍りしは、「この魚、おのれら若かりし世までは、はかばかしき人の前に出づること侍らざりき。頭は下部も食はず、切り棄て侍りしものなり」と申しき。かやうのものも、世の末になれば、上ざままでも入りたつわざにこそ侍れ。

【一二〇】　からの物は、藥の外は、なくとも事かくまじ。書どもはこの國に多くひろまりぬれば、書きも寫してむ。もろこしぶねのたやすからぬ道に、無用の物どものみ取り積みて、所せく渡しもてくる、いと愚なり。「遠きものを寶とせず」とも、また「得がたき寶を貴まずとも」と、書にも侍るとかや。



（一）御湯殿（附圖　清涼殿圖參照）
（二）後深草帝の中宮、東二條院
（三）黑み棚
（四）西園寺實氏、常磐井相國と稱す。中宮の御父
（五）不レ貴二遠物一則遠人稽（イタル）（尙書卷七）
（六）不レ貴二難得之寶一使二民不レ爲レ盜（老子卷一）

【一二一】　養ひ飼ふものには、馬・牛。つなぎ苦むるこそいたましけれど、なくてかなはぬものなればいかがはせむ。犬は守り防ぐつとめ、人にもまさりたれば、必ずあるべし。されど家ごとにあるものなれば、ことさらに求め飼はずともありなむ。その外の鳥・獣、すべて用なきものなり。走る獣は檻にこめ、鎖をさゝれ、飛ぶ鳥は翼を切り、籠に入れられて、雲を戀ひ、野山をおもふ愁やむ時なし。その思わが身に當りて忍び難くば、心あらむ人これを樂まむや。生を苦めて目を喜ばしむるは桀紂が心なり。王子猷が鳥を愛せし、林に樂ぶを見て逍遥の友としき。捕へ苦めたるにはあらず。およそ、「めづらしき鳥、あやしき獣、國に養はず」とこそ、書にも侍るなれ。

【一二二】　人の才能は、書あきらかにして、聖の教を知れるを第一とす。つぎには手かくこと、むねとする事はなくとも、これを習ふべし。學問にたよりあらむ爲なり。次に醫術を習ふべし。身を養ひ、人を助け、忠孝のつとめも、醫にあらずばあるべからず。次に弓射、馬に乘ること、六藝に出せり。必ずこれを窺ふべし。文武醫の道、まことに缺けてはあるべからず。これを學ばむをば、いたづらなる人といふべからず。次に食は人の天なり。よく味ひを調へ知れる人、大なる德とすべし。次に細工、よろづの用多し。この外の事ども、多能は君子の恥づる所なり。詩歌に巧に絲竹に妙なるは、幽玄の道、君臣これを重くすといへども、今の世にはこれをもちて世を治むること、漸く愚なるに似たり。金はすぐれたれども、鐵の益多きにしかざるが如し。

【一二三】　無益の事をなして時を移すを、愚なる人とも、ひがことする人ともいふべし。國のため、君の爲に、やむことを得ずしてなすべき事多し。そのあまりの暇いくばくならず、思ふべし。人の身にやむ事を得ずしていとなむ所、第一に食物、第二に著る物、第三に居る所なり。人間の大事、この三つに過ぎず。飢ゑず、寒からず、風雨に犯されずして、靜に過すを樂とす。ただし人みな病あり。病に犯されぬれば、その愁しのび難し。醫療を忘るべからず。樂を加へて、四つの事もとめ得ざるを貧しとす。この四つかけざるを富めりとす。この四つの外を求めいとなむを驕とす。四つのこと儉約ならば、誰の人か足らずとせむ。

【一二四】　是法法師は、淨土宗に恥ぢずといへども、學匠をたてず、ただあけくれ念佛して、やすらかに世を過すありさま、いとあらまほし。

【一二五】　人におくれて、四十九日の佛事に、ある聖を請じ侍りしに、說法いみじくして、皆人涙を流しけり。導師かへりて後、聽聞の人ども、「いつよりもことにけふは尊く覺え侍りつる」と感じあへりし返事に、ある者のいはく、「何とも候へ、あれほど唐の狗に似候ひなむ上は」といひたりしに、あはれもさめてをかしかりけり。さる導師の譽めやうやはあるべき。

(一) 夏の桀王・殷の紂王
(二) 晉の王羲之の子、風雅の士
(三) 阮籍嘯(ハ)人歩レ月、子猷看(ル)鵲馬柄レ壁(和漢朗詠集、下雜)
(四) 珍禽奇獸不レ育二于國一(尚書卷七)
(五) 禮・樂・射・御・書・數
(六) 夫食爲二人天一(晉書二紀木一(書經帝範)
(七) 吾少也賤故多二能鄙事一、君子多乎、不レ多也(論語子罕篇)
(一) 淨土宗の僧。歌をよくす、慈好と交はる

また、「人に酒勧むるとて、おのれまづたべて、人に強ひ奉らむとするは、剣にて人を斬らむとするに似たる事なり。二方に刃つきたるものなれば、もたぐる時、まづわが頭を斬る故に、人をばえ斬らぬなり。おのれまづ酔ひ臥しなば、人はよもめさじ」と申しき。剣にて斬り試みたりけるにや、いとをかしかりき。

【一二六】　ばくちのまけ極りて、殘りなくうち入れむとせむに、あひてはうつべからず。立ちかへり、つづけて勝つべき時の至れると知るべし。その時を知るを、よきばくちといふなり」と、あるもの申しき。

【一二七】　あらためて益なきことは、あらためぬをよしとするなり。

【一二八】　雅房(一)の大納言は、才かしこく、よき人にて、大將にもなさばやとおぼしける頃、院(二)の近習なる人、「只今あさましき事を見侍りつ」と申されければ、「何事ぞ」と問はせ給ひけるに、「雅房卿、鷹にかはむとて、生きたる犬の足を切り侍りつるを、中垣の穴より見侍りつ」と申されけるに、うとましく、にくくおぼしめして、日頃の御氣色も違ひ、昇進もし給はざりけり。さばかりの人、鷹をもたれたりけるは、思はずなれど、犬の足はあとなき事なり。そらごとは不便なれども、かゝる事を聞かせ給ひて、にくませ給ひける君の御心は、いと尊きことなり。大方生けるものを殺し、いためたゝかはしめて、遊び樂むる人は、畜生殘害のたぐひなり。よろづの鳥・獸、小き蟲までも、心をとめてありさまを見るに、子

(一) 源雅房、正二位大納言
(二) 後宇多上皇

を思ひ、親をなつかしくし、夫婦をともなひ、妬み怒り、欲多く、身を愛し、命を惜める事、ひとへに愚痴なる故に、人よりもまさりて甚し。かれに苦みを與へ、命を奪はむこと、いかでかいたましからざらむ。すべて一切の有情を見て、慈悲の心なからむは人倫にあらず。

【一二九】　顔回(一)は、志(二)、人に勞をほどこさじとなり。すべて人を苦め、ものを虐ぐること、賤しき民の志をも奪ふべからず。又いときなき子をすかし、おどし、いひはづかしめて、興ずる事あり。おとなしき人はまことならねば、事にもあらず思へど、幼き心には、身にしみて恐しく、恥しく、あさましき思ひ、誠に切なるべし。これをなやまして興ずること、慈悲の心にあらず。おとなしき人の喜び、怒り、悲び、樂むも、皆虚妄なれども、誰か實有の相に著せざる。身をやぶるよりも、心をいたましむるは、人をそこなふことなほ甚し。病を受くることも、多くは心より受く。外より來る病は少し。藥(三)を飲みて汗をもとむるには、驗なきことあれども、一旦恥ぢ恐るることあれば、必ず汗を流すは、心のしわざなりといふ事を知るべし。凌雪(四)の額を書きて、白頭の人となりしためしなきにあらず。

【一三〇】　ものに爭はず、おのれを枉げて人に從ひ、わが身を後にして、人を先にするにはしかず。よろづの遊にも、勝負を好む人は、勝ちて興あらむためなり。おのれが藝のまさりたる事を喜ぶ。されば負けて興なく覺ゆべきこと、また知られたり。われ負けて、人

(一) 支那春秋時代ッの人、孔子の高弟、魯王三十八年歿、年卅二
(二) 子曰、善哉回也、……顔淵曰、願無伐善、無施勞、（論語、公冶長）
(三) 夾脇ノ薬汗ヲ流シ、或有ル佛ノ如ク而悅ブ一樂、渙然流離（文選、養生論）
(四) 隱岡帶立ニ淡然ニ現、淡先釘ヲ之、去ル地一十五丈、筆下ノ髮皆然還門三子弱、直寫ニ一法（二國志）

を喜ばしめむと思はば、更に遊の興なかるべし。人に本意なく思はせて、わが心を慰まむこと、德に背けり。

むつまじき中にたはぶるるも、人をはかり欺きて、おのれが智のまさりたる事を興とす。これまた禮にあらず。さればはじめ興宴より起りて、長き恨を結ぶたぐひ多し。これ皆あらそひを好む失なり。人に勝らむことを思はば、ただ學問して、その智を人にまさらむと思ふべし。道を學ぶとならば、善に伐らず、ともがらに爭ふべからずといふ事を知るべき故なり。大なる職をも辭し、利をも捨つるは、ただ學問の力なり。

【一三一】　貧しき者は財をもて禮とし、老いたる者は力をもて禮とす。おのが分を知りて及ばざる時は、速にやむを智といふべし。許さざらむは人のあやまりなり。分を知らずして强ひて勵むは、おのれがあやまりなり。貧しくて分を知らざれば盜み、力衰へて分を知らざれば病をうく。

【一三二】　鳥羽のつくり道は、鳥羽殿たてられて後の名にはあらず、昔よりの名なり。元良親王、元日の奏賀の聲、甚だ殊勝にして、大極殿より鳥羽のつくり道まで聞えけるよし、李部王の記に侍るとかや。

【一三三】　夜の御殿は東御枕なり。おほかた東を枕として、陽氣をうくべき故に、孔子も東首し給へり。寢殿のしつらひ、或は南枕、常の事なり。白河院は北首に御寢なりけり。

(一) 論語　百二十九段參照
(二) 京都九條より鳥羽に通ずる大路
(三) 白河帝創建、鳥羽帝增修の御所
(四) 鎌成帝皇子、兵部卿、天慶六年薨、御年五十四
(五) 元旦天皇大極殿に出御、屠上列立の王公百官より一人進んで賀詞を奏す
(六) 李部卿式部卿重明親王の日記
(七) 疾君親之、東首加三朝服一拖紳（論語鄕黨篇）東首以受二生氣一（朱註）

北は忌む事なり。また伊勢は南なり、大神宮の御方を御あとにせさせ給ふ事いかがと、人申しけり。但し大神宮の遙拜は、たつみに向はせ給ふ、南にはあらず。

【一三四】　高倉院の法華堂の三昧僧、某の律師とかやいふもの、ある時鏡を取りて、顏をつくづくと見て、わがかたちの見にくく、あさましき事を、あまりに心うく覺えて、鏡さへうとましき心ちしければ、その後、長く鏡を恐れて、手にだに取らず、更に人に交ることなし。御堂のつとめばかりにあひて、籠り居たりと聞き侍りしこそ、あり難く覺えしか。かしこげなる人も、人の上をのみはかりて、おのれをば知らざるなり。われを知らずして、外を知るといふことわりあるべからず。されば、おのれを知るを、もの知れる人といふべし。かたち見にくけれども知らず、心の愚なるをも知らず、藝の拙きをも知らず、身の數ならぬをも知らず、年の老いぬるをも知らず、病の犯すをも知らず、死の近き事をも知らず、行ふ道の至らざるをも知らず、身の上の非を知らねば、まして外の譏を知らず。但しかたちは鏡に見ゆ、年は數へて知る。わが身のこと知らぬにはあらねど、すべき方のなければ、知らぬに似たりとぞいはまし。かたちを改め、齡を若くせよとにはあらず。拙きを知らば、何ぞやがて退かざる。老いぬと知らば、何ぞ靜に身をやすくせざる。行ひ愚なりと知らば、何ぞこれを思ふことこれにあらざる。すべて人に愛樂せられずして、衆に交るは恥なり。かたち見にくく、心おくれにして出で仕へ、無智にして大才に交り、不堪の藝をも

＊山城國愛宕郡清閑寺中に高倉帝の納骨法華堂あり

ちて堪能の座に列り、雪の頭を戴きて、さかりなる人にならび、況や及ばざる事を望み、かなはぬ事を憂へ、來らざる事を待ち、人に恐れ、人に媚ぶるは、人の與ふる恥にあらず、貪る心に引かれて、みづから身を辱むるなり。貪る事のやまざるは、命を終ふる大事、今ここに來れりと、たしかに知らざればなり。

【一三五】　資季大納言入道とかや聞えける人、具氏宰相中將にあひて、「わぬしの問はれむ程の事、何事なりとも答へ申さざらむや」といはれければ、具氏、「いかが侍らむ」と申されけるを、「さらばあらがひ給へ」といはれて、「はかばかしき事は、かたはしもまねび知り侍らねば、尋ね申すまでもなし。何となきそぞろごとの中に、おぼつかなき事をこそ、問ひ奉らめ」と申されけり。「ましてこゝもとの淺き事は、何事なりとも、あきらめ申さむ」といはれければ、近習の人々、女房なども、「興あるあらがひなり。同じくは御前にて爭はるべし。負けたらむ人は供御をまうけらるべし」と定めて、御前にてめし合せられたりけるに、具氏、「をさなくより聞き習ひ侍れど、その心知らぬこと侍り。『馬のきつりやうきつにのをか、なかくぼれいりぐれんどう』と申すことは、いかなる心にか侍らむ、承らむ」と申されけるに、大納言入道、はたとつまりて、「これはそぞろごとなれば、いふに足らず」といはれけるを、「もとより深き道は知り侍らず、そぞろごとを尋ね奉らむと、定め申しつ」と申されければ、大納言入道負になりて、所課いかめしくせられたりけるとぞ。

(一) 藤原資季、正二位大納言、出家して了心といふ
(二) 源具氏、從三位參議中將

【一三六】　醫師あつしげ、故法皇の御前にさぶらひて、供御の參りけるに、「今參り侍る供御のいろいろを、文字も功能も、尋ね下されて、そらに申し侍らば、本草に御覽じあはせられ侍れかし。一つも申し誤り侍らじ」と申しける時しも、六條の故内府まゐり給ひて、「有房、ついでにもの習ひ侍らむ」とて、「まづしほといふ文字は、いづれの偏にか侍らむ」と、問はれたりけるに、「土偏に候ふ」と申したりければ、「才のほど、既にあらはれにたり。今はさばかりにて候へ。ゆかしき所なし」と申されけるに、とよみになりて、まかり出でにけり。

【一三七】　花は盛に、月は隈なきをのみ見るものかは。雨にむかひて月をこひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれになさけ深し。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ、見どころ多けれ。歌の詞書にも、「花見にまかれりけるに、はやく散り過ぎにければ」とも、「さはることありてまからで」なども書けるは、「花を見て」といへるに劣れることかは。花の散り、月の傾くをしたふならひは、さることなれど、ことにかたくなる人ぞ、「この枝、かの枝、散りにけり。今は見どころなし」などはいふめる。よろづのことも、始め終こそをかしけれ。男女の情も、ひとへに逢ひ見るをばいふものかは。逢はで止みにし憂さを思ひ、あだなる契をかこち、長き夜をひとりあかし、遠き雲井を思ひやり、淺茅が宿に昔をしのぶこそ、色このむとはいはめ。望月のくまなきを、千里の外までながめたるよりも、曉近くなりて待ち出でたるが、いと心深う、青みたるやうにて、深き山の杉

(一) 花園院のことか
(二) 源有房、元應元年内大臣となる
(三) 對「經」月（和漢朗詠集、上秋、源順の國貴妃及び李夫人を詠じたる詩の題）
(四) たれこめて春のゆくへもしらぬ間に待ちし櫻もうつろひにけり（古今集、卷二、藤原よるか）

の梢に見えたる木の間の影、うちしぐれたるむら雲がくれのほど、又なくあはれなり。椎柴・白樫などの濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて、心あらむ友もがなと、都こひしう覺ゆれ。すべて、月花をば、さのみ目にて見るものかは。春は家を立ち去らでも、月の夜はねやの中ながらも思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。

よき人は、ひとへにすけるさまにも見えず、興ずるさまもなほざりなり。片田舎の人こそ、色こくよろづはもて興ずれ。花のもとには、ねぢ寄り、立ち寄り、あからめもせずまもりて、酒飲み、連歌して、はては、大きなる枝、心なく折り取りぬ。泉には手足さしひたして、雪には下り立ちて跡つけなど、よろづのもの、よそながら見ることなし。さやうの人の祭見しさま、いとめづらかなりき。「見ごといと遅し。そのほどは棧敷不用なり」とて、奥なる屋にて酒飲み、もの食ひ、圍碁・雙六など遊びて、棧敷には人を置きたれば、「渡り候ふ」といふ時に、おのおの肝つぶるるやうに爭ひ走り上りて、落ちぬべきまで簾はり出でて、押しあひつゝ、ひとことも見もらさじとまもりて、とあり、かゝりと、ものごとにいひて、渡り過ぎぬれば、「また渡らむまで」といひて下りぬ。ただものをのみ見むとするなるべし。都の人のゆゝしげなるは、ねぶりていとも見ず。若く末々なるは、宮づかへに立ちゐ、人の後にさぶらふは、さまあしくも及びかゝらず、わりなく見むとする人もなし。何となく葵かけわたしてなまめかしきに、明けはなれぬほど、忍びて寄する車どものゆかしきを、それか、かれかなど思ひ寄すれば、牛飼・下部などの見知れるもあり。をかしくも、きらきらしくも、さまざまに行きかふ、見るもつれづれならず。暮るるほどには、立てならべつる車ども、所なく並みゐつる人も、いづ方へ行きつらむ、ほどなく稀になりて、車どものらうがはしさもすみぬれば、簾たゝみも取り拂ひ、目の前にさびしげになり行くこそ、世のためしも思ひ知られてあはれなれ。大路見たるこそ、祭見たるにてはあれ。

かの棧敷の前を、こゝら行きかふ人の、見知れるがあまたあるにて知りぬ。世の人數も、さのみは多からぬにこそ。この人みなうせなむ後、わが身死ぬべきに定りたりとも、ほどなく待ちつけぬべし。大きなるうつはものに水を入れて、細き穴をあけたらむに、したゝるること少しといふとも、怠る間なく漏り行かば、やがて盡きぬべし。都の中に多き人、死なざる日はあるべからず。一日に一人二人のみならむや。鳥部野・舟岡、さらぬ野山にも、送る數多かる日はあれど、送らぬ日はなし。されば棺をひさぐ者、作りてうち置くほどなし。若きにもよらず、強きにもよらず、思ひかけぬは死期なり。けふまで遁れ來にけるは、あり難き不思議なり。しばしも世をのどかには思ひなむや。まゝ子だてといふものを、雙六の石にてつくりて、立て並べたるほどは、取られむ事、いづれの石とも知らねども、數へあてて、一つを取りぬれば、その外は遁れぬと見れど、またまた數ふれば、かれこれまぬきに行くほどに、いづれも遁れざるに似たり。兵の軍に出づるは、死に近き事を知りて、家を

も忘れ、身をも忘る。世をそむける草の庵には、しづかに水石をもてあそびて、これをよそに聞くと思へるはいとはかなし。静なる山の奥、無常の敵きほひ来らざらむや。その死に臨めること、軍の陣にすゝめるに同じ。

【一三八】 祭過ぎぬれば、後の葵不用なりとて、ある人の、御簾なるを皆とらせ侍りしが、色もなく覺え侍りしを、よき人のし給ふ事なれば、さるべきにやと思ひしかど、(一)周防の内侍が、

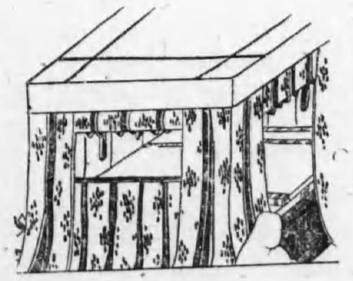
かくれどもかひなきものはもろ共に
みすのあふひのかれ葉なりけり

とよめるも、母屋の御簾に葵のかゝりたる枯葉をよめるよし、

御帳

家の集に書けり。古き歌のことばがきに、「枯れたる葵にさしてつかはしける」とも侍り。枕の草紙にも、(二)「ここし方戀しきもの、かれたる葵」と書けるこそいみじくなつかしう思ひ寄りたれ。

(三)鴨長明が四季物語にも、(四)「玉だれに後の葵はとまりけり」とぞ書ける。おのれと枯るるだにこそあるを、名殘なく、いかが取り捨つべき。(五)御帳にかゝれる(六)薬玉も、長月九日菊にとりかへらるる



(一) 周防内侍 鎌倉の女官、後冷泉院の女官

(二) すきにしかたのこひしきもの。枯れたる葵、雛あそびの調度（枕草紙）

(三) 賀茂社の祠官、出家して蓮胤と稱す。方丈記の著者

(四) 和泉式部、小野大將に忘られまゐらせて、又こと方の上宮人に馴れるのし給ふを、まのあたり見るに怨しきとうち嘆立ちて、六月の中の七日の夕ぐれがた、御階の上の高欄に、わらはべ御簾にありしを取りてかなぐり捨てたりしを、枯葉に添へて、少將内侍のがり行くにことづけて言ひやりけるとなむ。玉だれに後の葵はとまりけりかれても通へ人の面影といへるぞかし（四季物語）

(五) 御帳 下圖參照

(六) 薬玉

とい へば、菖蒲は菊の折さでもあるべきに　そ。(一)枇杷の皇太后宮かくれ給ひて後、ふるき御帳の中に、菖蒲・薬玉などの枯れたるが侍りけるを見て、「(二)折ならぬねをなほぞかけつる」と、(三)辨ののめのとのいへる返事に、「(四)あやめの草はありながら」とも、(五)江の侍從がよみしぞかし。

【一三九】 家にありたき木は、松・櫻。松は五葉もよし、花はひとへなるよし。八重櫻は奈良の都にのみありけるを、この頃ぞ、世に多くなり侍るなる。吉野の花・(六)左近の櫻、みな一重にてこそあれ。八重櫻はことやうのものなり、いとこちたくねぢけたり。植ゑずともありなむ。おそ櫻、またすさまじ。蟲のつきたるもむつかし。梅は白き、うす紅梅。ひとへなるがとく咲きたるも、重りたる紅梅のにほひめでたきも、みなをかし。おそき梅は、櫻に咲きあひておぼえ劣り、けおされて、枝にしぼみつきたる、心うし。「一重なるがまづ咲きて散りたるは、心とくをかし」とて、(六)京極の入道中納言は、なほひとへ梅をなむ、軒近く植ゑられたりける。京極の屋の南むきに、今も二本侍るめり。柳またをかし。卯月ばかりの若楓、すべてよろづの花紅葉にもまさりて、めでたきものなり。橘・桂、いづれも木はものふり、大きなるよし。

草は山吹・藤・杜若・撫子。池には蓮。秋の草は荻・薄・桔梗・萩・女郎花・藤袴・紫苑・われもかう・刈萱・龍膽・菊・黄菊も、蔦・葛・朝顔、いづれもいと高からず、さゝやかなるが垣に

(一) 三條帝の中宮、妍子、藤原道長の第二女、萬壽四年崩、御年三十四

(二) あやめ草淵の玉にぬきかへて　ねりならぬねをなほぞかけつる（千載集、哀傷、「弾乳母」）

(三) 三條帝の皇女禎子内親王の乳母、前加賀守藤原の女

(四) 玉ぬきしあやめの草はありながらとのは荒れむものとやは見し（千載集、辨乳母の歌のかへし）

(五) 未詳

(六) 左近櫻　二十三段挿圖參照

(七) 藤原定家、貞永元年權中納言、同十一月出家、仁治二年歴、年八十三

繁からぬよし。この外、世に稀なるもの、唐めきたる名の聞きにくく、花も見馴れぬなど、いとなつかしからず。おほかた何もめづらしく、あり難きものは、よからぬ人のもて興するものなり。さやうのものなくてありなむ。

【一四〇】　身死して財殘る事は智者のせざる所なり。よからぬもの蓄へ置きたるも拙く、よきものは、心をとめけむと、はかなし。こちたく多かる、まして口惜し。「われこそ得め」などいふ者どもありて、あとに爭ひたる、さまあし。あとは誰にと志すものあらば、生けらむ中にぞ讓るべき。朝夕なくてかなはざらむものこそあらめ、その外は、何も持たでぞあらまほしき。

【一四一】　悲田院の堯蓮上人は、俗性は三浦のなにがしとかや、さうなき武者なり。故郷の人の來りて物語すとて、「あづまびとこそ、いひつることは頼まるれ。都の人はことうけのみよくて、實なし」といひしを、聖、「それはさこそおぼすらめど、おのれは都に久しく住みて、馴れて見侍るに、人の心劣れりとは思ひ侍らず。なべて心やはらかに情ある故に、人のいふほどの事、けやけくいなび難く、よろづえいひ放たず、心弱くことうけしつ。僞せむとは思はねど、乏しくかなはぬ人のみあれば、おのづから、本意通らぬこと多かるべし。あづま人はわが方なれど、げには心の色なく、情おくれ、ひとへにすくよかなるものなれば、始より否といひてやみぬ。にぎはひゆたかなれば、人には頼まるるぞかし」と、こ

(一) 京中の路頭病者、孤見多餐
(二) 所傳不詳

とわられ侍りしこそ、この聖、聲うちゆがみ、あらあらしくて、聖教のこまやかなる理、いと辨へずもやと思ひしに、この一言の後、心にくくなりて、多かる中に、寺をも住持せらるるは、かくやはらぎたる所ありて、その益もあるにこそと、覺え侍りし。

【一四二】　心なしと見ゆるものも、よき一言はいふものなり。ある荒夷の恐しげなるが、かたへにあひて、「御子はおはすや」と問ひしに、「一人も持ち侍らず」と答へしかば、「さてはもののあはれは知り給はじ。情なき御心にぞものし給ふらむと、いと恐し。子故にこそ、よろづのあはれは思ひ知らるれ」といひたりし、さもありぬべき事なり。恩愛の道ならでは、かゝる者の心に慈悲ありなむや。孝養の心なきものも、子持ちてこそ、親の志は思ひ知るなれ。世を棄てたる人の、よろづにするすみなるが、なべてほだし多かる人の、よろづにへつらひ、望ふかきを見て、むげに思ひくたすは僻事なり。その人の心になりて思へば、まことにかなしからむ親のため、妻子のためには、恥をも忘れ、盗もしつべき事なり。されば盗人をいましめ、僻事をのみ罪せむよりは、世の人の飢ゑず寒からぬやうに、世をば行はまほしきなり。*人恒の產なき時は、恒の心なし。人きはまりて盗す。世治らずして、凍餒のくるしみあらば、科のもの絶ゆべからず。人を苦め、法を犯さしめて、それをつみなはむこと、不便のわざなり。さていかがして、人を惠むべきとならば、上の奢り費す所をやめ、民を撫で農をすゝめば、下に利あらむこと疑あるべからず。衣食世の常なる上に、ひ

* 無二恒產一而有二恒心一者、惟士爲レ能、若レ民則無二恒產一因無二恒心一、苟無二恒心一、放辟邪侈、無レ不レ爲レ已、及レ陷二於罪一、然後從而刑レ之、是罔レ民也、焉有二仁人在レ位、罔レ民而可レ爲也(孟子、梁惠王)

がことせむ人をぞ、まことの盗人とはいふべき。

【一四三】　人の終焉のありさまのいみじかりし事など、人の語るを聞くに、ただ靜にして亂れずといはば、心にくかるべきを、愚なる人は、あやしくことなる相を語りつけ、いひし言葉も、ふるまひも、おのれが好む方に譽めなすこそ、その人の日頃の本意にもあらずやと覺ゆれ。この大事は、權化の人も定むべからず、博學の士もはかるべからず。おのれ違ふ所なくば、人の見聞くにはよるべからず。

【一四四】　栂尾(一)の上人、道を過ぎ給ひけるに、河にて馬洗ふ男、「あしあし」といひければ、上人立ちとまりて、「あな尊や、宿執開發(二)の人かな。阿字阿字と唱ふるぞや。いかなる人の御馬ぞ。あまりに尊く覺ゆるは」と、尋ね給ひければ、「府生殿(三)の御馬に候ふ」と答へけり。「こはめでたき事かな。阿字本不生にこそあなれ。うれしき結緣をしつるかな」とて、感涙をのごはれけるとぞ。

【一四五】　御隨身(四)秦重躬、北面の下野の入道信願(五)を、「落馬の相ある人なり。よく慎み給へ」といひけるを、いとまことしからず思ひけるに、信願、馬より落ちて死ににけり。道に長じぬる一言、神の如しと、人思へり。さていかなる相ぞと、人の問ひければ、「きはめて桃尻にて、沛艾の馬を好みしかば、この相をおほせ侍りき。いつかは申しあやまりたる」とぞいひける。

(一) 澤高僧、明恵上人のこと、寛喜四年寂、年六十

(二) 近衛府の官人

(三) 隨身

(四) 傳不詳

【一四六】　明雲座主*、相者にあひ給ひて、「おのれもし兵仗(一)の難やある」と、尋ね給ひければ、相人、「まことにその相おはします」と申す。「いかなる相ぞ」と、尋ね給ひければ、「傷害のおそれおはしますまじき御身にて、かりにもかくおぼしよりて尋ね給ふ。これ既にそのあやぶみのきざしなり」と申しけり。果して矢にあたりて失せ給ひにけり。

【一四七】　灸治(二)また所になりぬれば、神事にけがれありといふこと、近く人のいひ出せるなり。格式等にも見えずとぞ。

【一四八】　四十以後の人、身に灸を加へて、三里をやかざれば、上氣のことあり。必ず灸すべし。

【一四九】　鹿茸(三)を鼻にて嗅ぐべからず。小さき蟲ありて、鼻より入りて腦をはむといへり。

【一五〇】　能をつかむとする人、よくせざらむ程は、なまじひに人に知られじ、うちうちよく習ひ得て、さし出でたらむこそ、いと心にくからめと、常にいふめれど、かくいふ人、一藝も習ひ得る事なし。未だ堅固かたほなるより、上手の中にまじりて、譏り笑はるるにも恥ぢず、つれなく過ぎてたしなむ人、天性その骨(四)なけれども、道になづまず、みだりにせずして年を送れば、堪能の嗜まざるよりは、遂に上手の位に至り、德たけ、人に許されて、ならびなき名を得ることなり。天下のものの上手といへども、始は不堪のきこえらあり、

* 比叡山の座主、寿永二年源義仲後白河院の法住寺を攻むる時流矢に中りて寂

むげの瑕瑾もありき。されどもその人、道のおきて正しく、これを重くして放埒せざれば世の博士にて、萬人の師となる事、諸道かはるべからず。

【一五一】　ある人の曰く、年五十になるまで上手に至らざらむ藝をば棄つべきなり。勵み習ふべき行末もなし。老人のことをば、人もえ笑はず。衆に交りたるも、あいなく見ぐるし。大方よろづのしわざは止めて、いとまあるこそ、めやすく、あらまほしけれ。世俗の事にたづさはりて、生涯を暮すは下愚の人なり。ゆかしく覺えむことは、學び聞くとも、その趣を知りなば、おぼつかなからずして止むべし。もとより望む事なくしてやまむは、第一のことなり。

【一五二】　西大寺(一)靜然(二)上人、腰かがまり、眉白く、まことに德たけたるありさまにて、内裏へ參られたりけるを、西園寺(三)内大臣殿、「あなたふとのけしきや」とて、信仰の氣色(きそく)ありければ、資朝(四)卿これを見て、「年の寄りたるに候ふ」と申されけり。後日に、むく犬のあさましく老いさらぼひて、毛はげたるを引かせて、「このけしきたふとく見えて候ふ」とて、内府へ參らせられたりけるとぞ。

【一五三】　爲兼(五)大納言入道、召し捕られて、武士どもうち圍みて、六波羅へゐて行きければ、資朝卿一條わたりにて、これを見て、「あなうらやまし。世にあらむ思ひ出、かくこそあらさはしけれ」とぞいはれける。

(一) 南都七大寺の一、大和國生駒郡
(二) 傳不詳
(三) 西園寺實衡
(四) 日野中納言藤原資朝、後醍醐帝の謀臣、元弘二年、北條氏の爲に佐渡配所にて斬らる
(五) 權大納言藤原爲兼、元弘二年歿

【一五四】　この人、東寺(*)の門に雨やどりせられたりけるに、かたは者どもの集りゐたるが、手も足もねぢけゆがみ、うちかへりて、いづくも不具にことやうなるを見て、とりどりにたぐひなきくせ者なり。最も愛するに足れりと思ひて、まもり給ひけるほどに、やがてその興つきて、見にくく、いぶせく覺えければ、ただすなほに、珍しからぬものにはしかずと思ひて、歸りて後、この間、植木を好みて、ことやうに曲折あるをもとめて、目を喜ばしめつるは、かのかたは者を愛するなりけりと、興なく覺えければ、鉢に植ゑられける木ども、みな掘り棄てられにけり。さもありぬべき事なり。

【一五五】　世に從はむ人は、まづ機嫌を知るべし。ついであしき事は、人の耳にもさかひ、心にも違ひて、その事成らず。さやうの折節を心得べきなり。但し病をうけ、子產み、死ぬることのみ、機嫌をはからず、ついでありとて止むことなし。生住異滅(しやうぢゆういめつ)のうつりかはる、まことの大事は、たけき河の漲り流るるが如し。しばしも滯らず、直に行ひゆくものなり。されば眞俗につけて、必ず果し遂げむと思はむことは、機嫌をいふべからず、とかくの用意なく、足を踏みとどむまじきなり。春くれて後夏になり、夏はてて秋の來るにはあらず。春はやがて夏の氣を催し、夏より既に秋はかよひ、秋はすなはち寒くなり、十月は小春の天氣、草も靑くなり、梅もつぼみぬ。木の葉の落つるも、まづ落ちて芽ぐむにはあらず、下より萌しつはるに堪へずして落つるなり。迎ふる氣、下にまうけたる故に、待ち

* 京都市下京にあり、教王護國寺

とるついで甚だ早し。生老病死のうつり來ること、またこれに過ぎたり。四季はなほ定れるついでであり。死期はついでを待たず。死は前よりしも來らず、かねて後にせまれり。人みな死ある事を知りて、待つ事しかも急ならざるに、覺えずして來る。沖の干潟遙なれども、磯より潮の滿つるが如し。

【一五六】　大臣の大饗は、さるべき所を申しうけて行ふ、常のことなり。(一)宇治左大臣殿は(二)東三條殿にて行はる。內裏にてありけるを、申されけるによりて、他所へ行幸ありけり。させることのよせなけれども、女院の御所など借り申す故實なりとぞ。

【一五七】　筆を取ればもの書かれ、樂器を取れば音を立てむと思ふ。盃を取れば酒を思ひ、賽を取れば攤うたむ事を思ふ。心は必ず事に觸れて來る。かりにも不善のたはぶれをなすべからず。あからさまに聖教の一句を見れば、何となく前後の文も見ゆ。率爾にして多年の非を改むる事もあり。假に今、この文をひろげざらましかば、この事を知らむや。これすなはち觸るる所の益なり。心更に起らずとも、佛前にありて數珠をとり、經をとらば、怠る中にも善業おのづから修せられ、散亂の心ながらも、繩床に坐せば、覺えずして禪定なるべし。事理もとより二ならず。外相もしそむかざれば、內證必ず熟す。強ひて不信といふべからず。仰ぎてこれを尊むべし。

【一五八】　「盃のそこを棄つることは、いかが心得たる」と、ある人の尋ねさせ給ひしに、

(一) 藤原朝長、宇治關白左府、保元の亂の時崇德上皇方、流矢に中りて死、年三十八
(二) 京都二條の南にあり、初重明親王の邸、後藤原氏の女にて母后となりし方ここに居ます

「凝當と申し侍れば、底に殘りたるを棄つるにや候ふらむ」と申し侍りしかば、「さにはあらず、魚道なり。ながれを殘して、口のつきたる所をすゝぐなり」とぞ仰せられし。

【一五九】　「みなむすびといふは、絲を結び重ねたるが、蜷といふ貝に似たればいふ」と、あるやむごとなき人仰せられき。「にな」といふは、あやまりなり。

【一六〇】　門に額かくるを、「うつ」といふはよからぬにや。勘解由小路の二品禪門は、「額かくる」とのたまひき。見物の「棧敷うつ」もよからぬにや。「平張うつ」などは、常の事なり。「棧敷かさふる」などいふべし。「護摩たく」といふもわろし。「修する」、「護摩する」などいふなり。「行法」も、「法」の字をすみていふわろし、にごりていふと、清閑寺の僧正仰せられき。常にいふことに、かかる事のみ多し。

【一六一】　花の盛りは、冬至より百五十日とも、時正の後七日ともいへど、立春より七十五日、おほやう違はず。

【一六二】　遍照寺の承仕法師、池の鳥を日頃かひつけて、堂の內まで餌をまきて、戶一つをあけたれば、數も知らず入りこもりける後、おのれも入りて、たてこめて、捕へつゝ殺しけるよそほひ、おどろおどろしく聞えけるを、草刈る童聞きて、人に告げければ、村の男ども起りて、入りて見るに、大雁どもふためきあへる中に、法師まじりて、うち伏せ、ねぢ殺しければ、この法師を捕へて、所より使廳へ出したりけり。殺す所の鳥を首にかけさせて、

(一) みなむすび
(二) 正三位參議世尊寺行忠卿
(三) 遍我僧正、清閑寺は京都東山清水寺東南にあり
(四) 山城國葛野郡廣澤池の西北にありし寺

(一) 藤基俊、九十九段堀川相国の子
(二) 陰陽道九月の異名
(三) 傳不詳
(四) 陰陽博士安倍吉平、天文博士安倍晴明の子
(五) 藤原宗平か、正和二年關白となる

禁獄せられにけり。基俊(一)大納言、別當の時になむ侍りける。

【一六三】 太衙(二)の太の字、點うつべからずといふこと、陰陽のともがら、相論のことありけり。もりちか(三)入道申し侍りしは、「吉平(四)が自筆の占文の裏に書かれたる御記、近衛關白殿にあり。點うちたるを書きたり」と申しき。

【一六四】 世の人あひ逢ふ時、しばらくも默止することなし。必ず言葉あり。そのことを聞くに、多くは無益の談なり。世間の浮説、人の是非、自他のために失多く、得少し。これを語る時、互の心に、無益の事なりといふ事を知らず。

【一六五】 あづまの人の都の人にまじはり、都の人のあづまに行きて身を立て、また本寺本山を離れぬる顯密の僧、すべてわが俗にあらずして、人にまじはれる、見ぐるし。

【一六六】 人間の營みあへるわざを見るに、春の日に雪佛を作りて、そのために金銀珠玉の飾を營み、堂塔を建てむとするに似たり。そのかまへを待ちて、よく安置してむや。人の命ありと見るほども、下より消ゆること雪の如くなる中に、營み待つこと、甚だ多し。

【一六七】 一道にたづさはる人、あらぬ道のむしろに臨みて、「あはれわが道ならましかば、かくよそに見侍らじものを」といひ、心にも思へること、常の事なれど、世にわろく覺ゆるなり。知らぬ道の羨しく覺えば、「あなうらやまし、などか習はざりけむ」といひてありなむ。わが智を取り出でて人に爭ふは、角あるものの角をかたぶけ、牙あるものの牙をかみ出すたぐひなり。人としては善にほこらず、物と爭はざるを德とす。他にまさる事のあるは、大なる失なり。品の高さにても、才藝のすぐれたるにても、先祖の譽にても、人にまされりと思へる人は、たとひ言葉に出でてこそいはねども、内心にそこばくのとがあり。慎みてこれを忘るべし。をこにも見え、人にもいひけたれ、禍をも招くは、ただこの慢心なり。一道にもまことに長じぬる人は、みづから明にその非を知る故に、志常に滿たずして、遂にものに誇る事なし。

【一六八】 年老いたる人の、一事すぐれたる才能ありて、「この人の後には、誰にか問はむ」などいはるるは、老の方人にて、生けるもいたづらならず。さはあれど、それもすたれたる所のなきは、一生この事にて暮れにけりと、つたなく見ゆ。「今は忘れにけり」といひてありなむ。大方は知りたりとも、すずろにいひちらすは、さばかりの才にはあらぬにやと聞え、おのづからあやまりもありぬべし。「さだかにもわきまへ知らず」などいひたるは、なほまことに、道のあるじとも覺えぬべし。まして知らぬ事、したり顔に、おとなしくもどきぬべくもあらぬ人の、いひ聞かするを、さもあらずと思ひながら聞きゐたる、いとわびし。

【一六九】 「何事の式といふことは、後嵯峨の御代まではいはざりけるを、近き程よりいふことばなり」と、人の申し侍りしに、建禮門院(一)の右京の大夫、後鳥羽の院の御位の後、又

(一) 高倉帝の中宮、平清盛の女
(二) 建禮門院に仕へし女官、歌人

うちずみしたる事をいふに、「世の式(一)もかはりたる事はなきにも」と書きたり。

【一七〇】　さしたることなくて人のがり行くは、よからぬことなり。用ありて行きたりとも、その事はてなば、とく歸るべし。久しくゐたる、いとむつかし。人と對ひたれば、言葉多く、身もくたびれ、心も靜ならず、よろづの事さはりて時をうつす。互のため益なし。厭はしげにいはむもわろし、心づきなき事あらむ折は、なかなかその由をもいひてむ。同じ心に對はまほしく思はむ人の、つれづれにて、「今しばし、今日は心靜に」などいはむは、この限にはあらざるべし。阮籍(二)が青き眼、誰もあるべき事なり。その事となきに、人の來りて、のどかに物語して歸りぬる、いとよし。また文も、久しく聞えさせねばなどばかりいひおこせたる、いとうれし。

【一七一】　貝をおほふ人の、わが前なるをばおきて、よそを見渡して、人の釉の陰、膝の下まで、目をくばる間に、前なるをば人におほはれぬ。よくおほふ人は、よそまでわりなく取るとは見えずして、近きばかりおほふやうなれど、多くおほふなり。碁盤のすみに石を立てて彈くに、向ひなる石をまもりて彈くはあたらず。わが手もとをよく見て、こゝなるひじり目をすぐに彈けば、立てたる石必ずあたる。よろづのこと、外に向きて求むべからず。ただこゝもとを正しくすべし。清獻公(三)がことばに、「好事(四)を行じて、前程を問ふことなかれ」といへり。世を保たむ道もかくや侍らむ。内を慎まず、輕くほしきまゝにしてみだりなれば、遠國必ずそむく時、始めてはかりごゝをもとむ。「風にあたり、濕に臥して、病を神靈に訴ふるは愚なる人なり」と、醫書にいへるが如し。目の前なる人の愁をやめ、惠をほどこし、道をただしくせば、その化、遠く流れむ事を知らざるなり。禹(一)の行きて三苗を征せしも、師をかへして德を布くにはしかざりき。

【一七二】　若き時は、血氣内にあまり、心ものに動きて、情慾多し。身をあやぶめて碎けやすき事、玉を走らしむるに似たり。美麗を好みて寶を費し、これをすてて苦の袂にやつれ、いさめる心さかりにしてものと爭ひ、心に恥ぢうらやみ、好むところ日々に定らず。色に耽り情にめで、行をいさぎよくして百年の身をあやまり、命を失へるためし願はしく して、身のまたく久しからむ事をば思はず、すける方に心引きて、長き世がたりともなる。身を過つことは、若き時のしわざなり。老いぬる人は精神衰へ、あはくおろそかにして、感じ動くところなし。心おのづから靜なれば、無益のわざをなさず。身をたすけて愁なく、人のわづらひなからむことを思ふ。老いて智の若き時にまされること、若くしてかたちの老いたるにまされるが如し。

【一七三】　小野小町が事、きはめてさだかならず。衰へたるさまは、玉造(一)といふ書に見えたり。その書、清行(二)が書けりといふ說あれど、高野大師(三)の御作の目錄に入れり。大師は承和のはじめにかくれ給へり。小町がさかりなる事、その後の事にや、なほおぼつかなし。

(一)　醜惡の方ざまなど見るにも、暫住み馴れし事のみ思ひ出でられて、戀しきに、御しつらひも世の式もゆゑありたる事も無きに、唯わが心のうちばかり碎けまさる悲しさ、見のくさも無きを眺めて覺えぬことも無くかきくらさる（續戰門院右京大夫集）

(二)　晉の人、竹林の七賢の一人。晉書阮籍傳に「阮籍、字嗣宗、不ン拘二禮教一、能作二青白眼一。對レ之、及二其母喪一、籍作二白眼一、喜不レ懌而退。喜弟康聞レ之、乃齎レ酒挾レ琴造焉。籍大悅、乃見二青眼一」

(三)　宋の趙抃のこと、杭州の知事となる。殁後清獻と謚せらる（「四」行二好事一、莫レ問二前程一」（清獻公と右銘）

(四)　書經大禹謨に出づ

(一)　玉造小町壯衰書のこと

(二)　三善清行のことか、貞觀年中文章生、後、大納言、參議但馬守、延喜十七年卒、年七十二

(三)　弘法大師、承和二年高野山にて寂、年六十二

【一七四】　小鷹によき犬、大鷹につかひぬれば、小鷹にわろくなるといふ。大につき小を捨つることわり、まことにしかなり。人事多かる中に、道を樂ぶより氣味深きはなし。これまことの大事なり。一たび道を聞きて、これに志さむ人、いづれのわざかすたれざらむ、何事をか營まむ。愚なる人といふとも、賢き犬の心に劣らむや。

【一七五】　世には心得ぬ事の多きなり。ともあるごとには、まづ酒をすゝめて、强ひ飲ませたるを興とする事、いかなる故とも心得ず。飲む人の顏いと堪へがたげに、眉をひそめ、人目をはかりてすてむとし、逃げむとするを、捉へて引き止めて、すずろに飲ませつれば、うるはしき人も忽に狂人となりて、をこがましく、息災なる人も、目の前に大事の病者となりて、前後も知らずたふれふす。祝ふべき日などは、あさましかりぬべし。あくる日まで頭いたく、もの食はず、によびふし、生を隔てたるやうにして、昨日のこと覺えず。公私の大事を缺きてわづらひとなる。人をしてかゝる目を見すること、慈悲もなく、禮儀にもそむけり。かくからき目にあひたらむ人、ねたく口惜しと思はざらむや。人の國にかゝる習あなりと、これらになき人ごとにて、傳へ聞きたらむは、あやしく不思議に覺えぬべし。人の上にて見るだに心うし。思ひ入りたるさまに、心にくしと見し人も、思ふ所なく笑ひのゝしり、言葉多く、烏帽子ゆがみ、紐はづし、脛高くかゝげて、用意なき氣色、日頃の人とも覺えず。女は額髮晴らかにかきやり、まばゆからず、顏うちさゝげてうち笑ひ、盃もてる手に取りつき、よからぬ人は、肴とりて口にさしあて、みづからも食ひたる、さまあし。聲のかぎり出して、おのおの歌ひ舞ひ、年老いたる法師召し出されて、黑くきたなき身を肩ぬぎて、目もあてられずすぢりたるを、興じ見る人さへ、うとましく憎し。あるは又、わが身いみじき事ども、かたはらいたくいひ聞かせ、あるは醉ひ泣きし、下ざまの人はのりあひ、いさかひて、あさましく恐し。恥がましく、心うき事のみありて、はては許さぬ物どもおし取りて、緣より落ち、馬車より落ちてあやまちしつ。ものにも乘らぬきはは、大路をよろぼひ行きて、築土、門の下などにむきて、えもいはぬ事どもしちらし、年老い、袈裟かけたる法師の、小童の肩をおさへて、聞えぬ事どもいひつゝよろめきたる、いとかはゆし。かゝる事をしても、この世も後の世も益あるべきわざならば、いかがはせむ。この世にてはあやまち多く、財を失ひ、病をまうく。百藥の長とはいへど、よろづの病は酒よりこそ起れ。憂を忘るといへど、醉ひたる人ぞ、過ぎにしうさをも思ひ出でて泣くめる。後の世の人の智惠を失ひ、善根を燒くこと火の如くして、惡を增し、よろづの戒を破りて、地獄に落つべし。「酒を取りて、人に飲ませたる人、五百生が間、手なきものに生る」とこそ、佛は說き給ふなれ。

かくうとましと思ふものなれど、おのづから棄てがたき折もあるべし。月の夜、雪の朝、花のもとにても、心のどかに物語して盃出したる、よろづの興を添ふるわざなり。つ

(一) 夫醫食肴之將、酒百藥之長（隋書食貨志）

(二) 以酒施二於持戒之人一、或破二禁戒一而自飲酒、或作二魔業一、臨命終時其心顚倒、失二於正念一（隋三地觀一（正法念經））

(三) 若自身手過二酒器一與二人飲一、酒者、五百世無二手、何況自飲一（梵網經心地法門品）

れづれなる日、思ひの外に友の入り來て、とり行ひたるも心慰む。なれなれしからぬあたりの御簾の中より、御くだもの御酒など、よきやうなるけはひしてさし出されたる、いとよし。冬、狹き所にて、火にてものいりなどして、隔なきどちさし向ひて、多く飲みたるいとをかし。旅のかりや、野山などにて、「み肴何」などいひて、芝の上にて飲みたるもをかし。いたういたむ人の、強ひられて、少し飲みたるも、いとよし。よき人のとりわきて、「今一つ、上すくなし」など、のたまはせたるもうれし。近づかさほしき人の、上戸にてひしひしと馴れぬる、またうれし。さはいへど、上戸はをかしく、罪許さるるものなり。醉ひくたびれて、朝寢したる所を、あるじの引きあけたるに、さどひてほれたる顏ながら、細き髻さし出し、ものも著あへず、いだき持ち、引きしろひて逃ぐるかいどり姿のうしろで、毛生ひたる細脛のほど、をかしくつきづきし。

【一七六】黑戸は、小松の御門位に卽かせ給ひて、昔ただ人におはしましし時、まさなごとせさせ給ひしを、忘れ給はで、常にいとなませ給ひける間なり。みかさ木にすゑけたれば、黑戸といふとぞ。

【一七七】鎌倉の中書王にて御鞠ありけるに、雨降りて後、未だ庭の乾かざりければ、いかがせむと沙汰ありけるに、佐々木隱岐の入道、鋸の屑を車に積みて、多く奉りたれば、一庭に敷かれて泥土のわづらひなかりけり。とりためけむ用意あり難しと、人感じあへり。

（一）我宗はとばり幔を立てれば大君來ませ婿にせむ、み肴には何よけむ、鮑、栄螺か、かせよけむ（催馬樂）

（二）黑戸の御所、淸涼殿の北、渦口の戸の西にある間

（三）光孝天皇、小松の山陵に葬り奉る

（四）一品宗尊親王、中務卿、建長一年鎌倉に下り、征夷大將軍、文永十一年薨、御年卅三

（五）佐々木政義、佐々木隱岐前司義淸の子、入道して心願といふ

この事を、ある者の語り出でたりしに、吉田の中納言の、「乾砂子の用意やはなかりける」とのたまひたりしかば、恥しかりき。いみじと思ひける鋸の屑、いやしくことやうの事なり。庭の儀を奉行する人、乾砂子をまうくる故實なりとぞ。

【一七八】ある所の侍ども、內侍所の御神樂を見て、人に語るとて、「寶劒をば、その人ぞ持ち給へる」などいふを聞きて、內なる女房の中に、「別殿の行幸には、晝の御座の御劒にてこそあれ」と、しのびやかにいひたりし、心にくかりき。その人、ふるき典侍なりけるとかや。

【一七九】入宋の沙門道眼上人、一切經を持來して、六波羅のあたり、やけ野といふ所に安置して、ことに首楞嚴經を講じて、那蘭陀寺と號す。その聖の申されしは、「那蘭陀寺は大門、北向なりと、江帥の說とていひ傳へたれど、西域傳・法顯傳などにも見えず、更に所見なし。江帥はいかなる才覺にてか申されけむ、おぼつかなし。唐土の西明寺は北向勿論なり」と申しき。

【一八〇】さぎちやうは、正月にうちたる毬杖を、眞言院より神泉苑へ出して燒きあぐるなり。「法成就の池にこそ」とはやすは、神泉苑の池をいふなり。

【一八一】「降れ降れこ雪、たんばのこ雪」といふこと、米

さぎちやう

（一）藤原鎭房のことか

（二）附圖　淸涼殿圖參照

（三）傳不詳

（四）一名、中印度摩訶陀大菩提場經

（五）大江匡房、太宰權帥、『本朝二年奏、年七十二

（六）玄奘三藏の大唐西域記

（七）法顯三藏の自傳

（八）さぎちやう（下圖參照）に義長、三種杖、正月十五日或は十四日十八日等に禁中にて行はる

（九）大內裏八省院の北にあり、御修法一部を勤むる所

（一〇）鉅武帝創設、天皇遊覽の所、今京都上京區門前町に在あり

搗きふるひたるに似たれば、粉雪といふ。「たまれこ雪」といふべきを、誤りて、「たんばの」とはいふなり。「垣や木のまたに」と歌ふべしと、あるものしり申しき。昔よりいひける事にや、鳥羽院をさなくおはしまして、雪の降るに、かく仰せられけるよし、讃岐の典侍が日記に書きたり。

(一) 堀河院の女官

【一八二】 四條大納言隆親卿、からざけといふものを供御に參らせられたりけるを「かくあやしきもの參るやうあらじ」と、人の申しけるを聞きて、大納言、「鮭といふ魚參らぬ事にてあらむにこそあれ。鮭のしらぼし、なでふことかあらむ。鮎のしらぼしは參らぬかは」と申されけり。

(二) 善勝寺大納言隆衡の男、權大納言正二位兼非違使別當

【一八三】 人突く牛をば角を切り、人くふ馬をば耳を切りて、そのしるしとす。しるしをつけずして、人をやぶらせぬるは、主のとがなり。人くふ犬をば養ひ飼ふべからず。これみなとがあり。律のいましめなり。

(三) 凡馬牛及犬有人觸觸咬人而記號檢察不如法若有三狂犬不殺者笞四十(後廐牧令)

【一八四】 相模の守時頼の母は、松下の禪尼とぞ申しける。守を入れ申さるることありけるに、すゝけたる明障子のやぶればかりを、禪尼手づから、小刀して切り廻しつゝ張られければ、兄の城の介義景、その日の經營して候ひけるが、「賜りてなにがし男に張らせ候はむ。さやうの事に心得たるものに候ふ」と、申されければ、「その男、尼が細工によもまさり侍らじ」とて、なほ一間づつ張られけるを、義景、「みなを張りかへ候はむは、はるかにたやすく候ふべし。まだらに候ふも、見ぐるしくや」と、重ねて申されければ、「尼も後はさわさわと張りかへむと思へども、今日ばかりは、わざとかくてあるべきなり。ものはやぶれたる所ばかりを修理して用ふることぞと、若き人に見ならはせて、心づけむためなり」と申されける、いとあり難かりけり。世を治むる道、儉約をもととす。女性なれども聖人の心に通へり。天下を保つほどの人を子にてもたれける、まことにただ人にはあらざりけるとぞ。

(四) 北條時頼、執權職、相模守、薙髪して最明寺入道といふ、弘長三年卒、年四十八

(五) 北條時氏の室

(六) 安達義景、秋田の城の介

【一八五】 城の陸奥の守泰盛は雙なき馬乘なりけり。馬を引き出させけるに、足をそろへて、闘をゆらりと越ゆるを見ては、「これは勇める馬なり」とて、鞍を置きかへさせけり。また足をのべて、闘に蹴あてぬれば、「これは鈍くして過あるべし」とて、乘らざりけり。道を知らざらむ人、かばかり恐れなむや。

※ 前段城の介義景の子、秋田城の介泰盛陸奥守

【一八六】 吉田と申す馬乘の申し侍りしは、「馬ごとにこはきものなり。人の力爭ふべからずと知るべし。乘るべき馬をば、まづよく見て、強き所、弱き所を知るべし。次に轡・鞍の具に、危きことやあると見て、心にかゝることあらば、その馬をはすべからず。この用意を忘れざるを、馬乘とは申すなり。これ祕藏のことなり」と申しき。

【一八七】 よろづの道の人、たとひ不堪なりといへども、堪能の非家の人にならぶ時、必ずまさることは、たゆみなくつゝしみて、輕々しくせぬと、ひとへに自由なるとの、ひとし

＊輿

からぬなり。藝能、所作のみにあらず、大方のふるまひ、心づかひも、慈にしてつゝしめるは得のもとなり。巧にしてほしきまゝなるは失のもとなり。

【一八八】　あるもの、子を法師になして、「學問して因果の理をも知り、説經などして世渡るたつきともせよ」といひければ、教のまゝに説經師にならむ爲に、まづ馬に乘り習ひけり。輿*車もたぬ身の、導師に請ぜられむ時、馬など迎へにおこせたらむに、桃尻にて落ちなむは心うかるべしと思ひけり。次に佛事の後、酒などすゝむることあらむに、法師のむげに能なきは、檀那すさまじく思ふべしとて、早歌といふことを習ひけり。二つのわざ、やうやう境に入りければ、いよいよよくしたく覺えて、たしなみけるほどに、説經習ふべき隙なくて年よりにけり。この法師のみにもあらず、世間の人、なべてこの事あり。若きほどは、諸事につけて身を立て、大いなる道をも成し、能をもつき、學問をもせむと、行末久しくあらます事ども、心にはかけながら、世をのどかに思ひて、うち怠りつゝ、まづさし當りたる目の前の事のみにまぎれて月日を送れば、ことごとなすことなくして身は老いぬ。遂にものの上手にもならず、思ひしやうに身をもたず、取りかへさるる齢ならねば、走りて坂を下る輪の如くに衰へ行く。

されば一生のうちに、むねとあらまほしからむ事の中に、いづれか勝さるると、よく思ひくらべて、第一の事を案じ定めて、その外は思ひすてて、一事を勵むべし。一日の中、一時の中にも、あまたのことの來らむ中に、少しも益のまさらむ事をいとなみて、その外をばうちすてて、大事をいそぐべきなり。いづ方をもすてじと、心にとりもちては、一事も成るべからず。たとへば碁をうつ人、一手もいたづらにせず、人にさきだちて、小をすてて大につくが如し。それにとりて、三つの石をすてて、十の石につくことはやすし、十をすてて、十一につくことは難し。一つなりともまさらむ方にこそつくべきを、十までなりぬれば、惜しく覺えて、多くまさらぬ石にはかへにくし。これをもすてず、かれをも取らむと思ふ心に、かれをも得ず、これをも失ふべき道なり。京に住む人、急ぎて東山に用ありて、既に行きつきたりとも、西山に行きて、その益まさるべき事を思ひ得たらば、門より歸りて、西山へ行くべきなり。こゝまで來つきぬれば、この事をばまづいひてむ。日をさゝぬ事なれば、西山のことは、歸りてまたこそ思ひたゝめと思ふ故に、一時の懈怠、すなはち一生の懈怠となる。これを恐るべし。

一事を必ずなさむと思はば、他のことの破るるをもいたむべからず。人の嘲りをも恥づべからず。萬事にかへずしては、一の大事成るべからず。人のあまたありける中にて、ある者、「ますほの薄、まそほの薄などいふことあり。わたのべのひじり、この事を傳へ知りたり」と語りけるを、登蓮法師その座に侍りけるが聞きて、雨の降りけるに、「蓑笠やあるかし給へ。かの薄のことならひに、わたのべのひじりのがり尋ねまからむ」といひけ

(一) 難波堀江の渡邊に居りし僧　傳不詳
(二) 傳不詳、歌人

るを、「あまりにものさわがし。雨やみてこそ」と、人のいひければ、「むげの事をも仰せらるるものかな。人の命は雨のはれまをも待つものかは、われも死に、ひじりも失せなば、尋ね聞きてむや」とて、走り出でて行きつゝ、習ひ侍りにけりと、申し傳へたるこそ、ゆゝしくあり難う覺ゆれ。「敏*き時はすなはち功あり」とぞ、論語といふ書にも侍るなる。この薄を、いぶかしく思ひけるやうに、一大事の因緣をぞ思ふべかりける。

【一八九】 今日はその事をなさむと思へど、あらぬいそぎまづ出で來て、まぎれ暮し、待つ人はさはりありて、たのめぬ人は來り、頼みたるかたの事は違ひて、思ひよらぬ道ばかりはかなひぬ。わづらはしかりつる事はことなくて、やすかるべき事はいと心ぐるし。日々に過ぎゆくさま、かねて思ひつるに似ず。一年の事もかくの如し。一生の間もまたしかなり。かねてのあらまし、皆違ひゆくかと思ふに、おのづから違はぬ事もあれば、いよいよものは定め難し。不定と心得ぬるのみ、誠にて違はず。

【一九〇】 妻といふものこそ、男の持つまじきものなれ。いつも獨住みにてなど聞くこそ、心にくけれ。誰がしが聟になりぬとも、又いかなる女をとりすゑて、相住むなど聞きつれば、むげに心おとりせらるるわざなり。ことなることなき女を、よしと思ひ定めてこそ、添ひゐたらめと、いやしくも推しはかられ、よき女ならば、この男こそらうたくして、あが佛とまもり居たらめ、たとへばさばかりにこそと覺えぬべし。まして家の中を行ひをさめたる女、いと口惜し。子など出できて、かしづき愛したる、心うし。男なくなりて後、尼になりて年よりたるありさま、なきあとまであさまし。いかなる女なりとも、明暮添ひ見むには、いと心づきなく、にくかりなむ。女の爲も中空にこそならめ。よそながら時々通ひ住まむこそ、年月經ても、絶えぬなからひともならめ。あからさまに來て、とまり居などせむは、めづらしかりぬべし。

【一九一】 夜に入りて、もののはえなしといふ人、いと口惜し。よろづの物のきらかざり、色ふしも、夜のみこそめでたけれ。晝はことそぎ、およすけたる姿にてもありなむ。夜はきらゝかに、花やかなる裝束いとよし。人のけしきも、夜の火影ぞよきはよく、ものいひたる聲も、暗くて聞きたる、用意ある、心にくし。にほひも、ものの音も、ただ夜ぞひときはめでたき。さしてことなることなき夜、うちふけて、參れる人の清げなるさましたる、いとよし。若きどち、心とどめて見る人は、時をもわかぬものなれば、殊にうちとけぬべき折節ぞ、けはれなく引きつくろはまほしき。よき男の日くれてゆするし、女も夜ふくるほどに、すべりつゝ、鏡とりて顏などつくろひ出づるこそをかしけれ。

【一九二】 神佛にも、人のまうでぬ日、夜まゐりたる、よし。

【一九三】 くらき人の人をはかりて、その智を識れりと思はむ、更にあたるべからず。つたなき人の碁うつことばかりに敏く巧みなるは、賢き人のこの藝におろかなるを見て、お

* 子張問二仁於孔子一。孔子曰、能行二五者一於天下一爲レ仁矣。請三問之一。曰、恭寛信敏惠。恭則不レ侮、寛則得レ衆、信則人任焉、敏則有レ功、惠則足二以使一レ人（論語、陽貨篇）

のれが智に及ばずと定めて、よろづの道のたくみ、わが道を人の知らざるを見て、おのれ勝れたりと思はむこと、大なるあやまりなるべし。文字の法師、暗證の禪師、互にはかりて、おのれにしかずと思へる、共にあたらず。おのれが境界にあらざるものをば爭ふべからず、是非すべからず。

【一九四】 達人の人を見る眼は、少しも誤る所あるべからず。たとへばある人の、世にそらごとを構へ出して、人をはかる事あらむに、すなはにまことと思ひて、いふまゝにはからるる人あり。あまりに深く信を起して、なほわづらはしく、そらごとを心得そふる人あり。又何としも思はで、心をつけぬ人あり。また聊かおぼつかなく覺えて、賴むにもあらず、賴まずもあらで、案じゐたる人あり。又まことしくは覺えねども、人のいふ事なれば、さもあらむとて、止みぬる人もあり。又さまざまに推し、心得たるよししして、かしこげにうちうなづき、ほゝゑみてゐたれど、つやつや知らぬ人あり。また推し出して、あはれさるめりと思ひながら、なほ誤もこそあれと、怪しむ人あり。又ことなるやうもなかりけりと、手を打ちて笑ふ人あり。又心得たれども、知れりともいはず、おぼつかなからぬは、とかくのことなく、知らぬ人と同じやうにて過ぐる人あり。又このそらごとの本意を、はじめより心得て、少しも欺かず、かまへ出したる人と同じ心になりて、力を合する人あり。愚者の中のたはぶれだに、知りたる人の前にては、このさまざまの得たる所、詞にても、顏にても、かくれなく知られぬべし。まして明ならむ人の、惑へるわれらを見むこと、掌の上のものを見むが如し。ただしかやうのおしはかりにて、佛法までをなぞらへいふべきにはあらず。

【一九五】 ある人、(一)久我繩手を通りけるに、小袖に大口(二)著たる人、木作の地藏を田の中の水におしひたして、ねんごろに洗ひけり。心得がたく見るほどに、(三)狩衣の男、二三人出で來て、「こゝにおはしましけり」とて、この人を具して去にけり。(四)久我の内大臣殿にてぞおはしける。世の常におはしましける時は、神妙にやむごとなき人にておはしけり。

【一九六】 東大寺の(五)神輿、東寺の(六)若宮より歸座の時、源氏の公卿參られけるに、(七)この殿大將にて、さきを追はれけるを、(八)土御門の相國、「社頭にて警蹕いかが侍るべからむ」と申されければ、「隨身のふるまひは、(九)兵仗の家が知ることに候ふ」とばかり答へ給ひけり。さて後に仰せられけるは、「この相國、北山抄を見て、(九)西宮の說をこそ知られざりけれ。眷屬の惡鬼惡神を恐るる故に、神社にてはことにさきを追ふ理あり」とぞ仰せられける。

【一九七】 諸寺の僧のみにもあらず、定額の女孺といふこと、(一〇)延喜式に見えたり。すべて數定りたる公人の通號にこそ。

【一九八】 揚名の介に限らず、揚名の目といふものあり。政事要略にあり。

【一九九】 (一二)よがは(一三)ぎやうせん横川の行宣法印が申し侍りしは、「唐土は呂の國なり、律の音なし。和國は單

(一) 京都郊外、桂川の西岸久我村より山崎に至る踏手道
(二) 大口
(三) 狩衣（四十四段挿圖參照）
(四) 久我通基、正應元年内大臣
(五) 奈良東大寺の鎭守神たる手向山八幡宮の神輿
(六) 京都東寺の鎭守神たる男山八幡宮の若宮
(七) 久我内大臣
(八) 太政大臣源定實
(九) 西宮左大臣源高明の說
(一〇) 醍醐帝の勅により藤原時平、忠平撰、五十卷
(一一) 一條帝の時、惟宗允亮著、百三十卷
(一二) 比叡山延暦寺の境内橫川谷
(一三) 傳不詳

律の國にて、呂の音なし」と申しき。

【二〇〇】 呉竹は葉細く、河竹は葉廣し。御溝に近きは河竹、仁壽殿の方に寄りて植ゑられたるは呉竹なり。

【二〇一】 退凡下乘の卒都婆、外なるは下乘、内なるは退凡なり。

【二〇二】 十月を神無月といひて、神事にはばかるべきよしは、記したるものなし。本文も見えず。但し當月、諸社の祭なき故に、この名あるか。この月、よろづの神たち、大神宮へ集り給ふなどいふ説あれども、その本説なし。さる事ならば、伊勢にはことに祭月とすべきに、その例もなし。十月、諸社の行幸、その例も多し。但し多くは不吉の例なり。

【二〇三】 勅勘の所に靱かくる作法、今は絶えて知れる人なし。主上の御惱、大かた世の中のさわがしき時は、五條の天神に靱をかけらる。鞍馬に靱の明神といふも、靱かけられたりける神なり。看督長の負ひたる靱を、その家に掛けられぬれば、人出で入らず。このこと絶えて後、今の世には、封をつくる事になりにけり。

【二〇四】 犯人を笞にて打つ時は、拷器によせて結ひつくるなり。拷器の樣も、よする作法も、今はわきまへ知れる人なしとぞ。

【二〇五】 比叡山に、大師勸請の起請文といふことは、慈惠僧正書きはじめ給ひけるなり。起請文といふこと、法曹にはその沙汰なし。古の聖代、すべて起請文につきて行はる

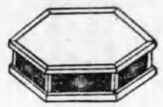
(一) 仁壽殿(二十三段挿畫參照)
(二) 靱
(三) 法號良藝、康保三年天台座主、天元四年大僧正、永觀三年寂年七十四

る政はなきを、近代、このこと流布したるなり。また法令には、水火にけがれを立てず、入物にはけがれあるべし。

【二〇六】 德大寺の右大臣殿、檢非違使の別當の時、中門にて、使廳の評定行はれけるほどに、官人章兼が牛はなれて、廳の中へ入りて、大理の座のはまゆかの上にのぼりて、にれうちかみて臥したりけり。重き怪異なりとて、牛を陰陽師のもとへつかはすべきよし、おのおの申しけるを、父の相國聞き給ひて、「牛に分別なし。足あれば、いづくへかのぼらざらむ。庶弱の官人、たまたま出仕の微牛をとらるべきやうなし」とて、牛をば主にかへして、臥したりける疊をばかへられにけり。あへて凶事なかりけるとなむ。あやしみを見てあやしまざる時は、あやしみ却りてやぶるといへり。

【二〇七】 龜山殿建てられむとて、地をひかれけるに、大きなる蛇、數も知らずこり集りたる塚ありけり。この所の神なりといひて、事のよしを申しければ、いかがあるべきと、勅問ありけるに、「ふるくよりこの地をしめたる者ならば、さうなく掘りすてられ難し」とみな人申されけるに、この大臣一人、「王土にをらむ蟲、皇居を建てられむに、何のたゝりをかなすべき。鬼神は邪なし、咎むべからず。ただ皆掘りすつべし」と申されたりければ、塚をくづして、蛇をば大井川に流してけり。更にたゝりなかりけり。

【二〇八】 經文などの紐をゆふに、上下よりたすきにちがへて、二筋の中より、わなの頭



(一) 藤原公孝の事か、太政大臣嘉元三年薨
(二) 傳不詳
(三) はまゆか
(四) 太政大臣藤原實基
(五) 京都郊外鳥羽にあり、龜山院の山莊、第五十一段にも出づ
(六) 前段の實基
(七) 經文の紐(右、上下よりたすきにちがへ)

を、横さまに引き出すことは、常の事なり。さやうにしたるをば、華嚴院の弘舜僧正、解きてなほさせけり。「これはこの頃やうの事なり、いとにくし。うるはしくは、ただくるくると巻きて、上より下へわなのさきをさしはさむべし」と、申されけり。ふるき人にて、かやうのこと知れる人になむ侍りける。

【二〇九】　人の田を論ずるもの、うたへに負けて、ねたさに、その田を刈りて取れとて、人をつかはしけるに、まづ道すがらの田をさへ刈りもてゆくを、「これは論じ給ふ所にあらず。いかにかくは」といひければ、刈るものども、「その所とても、刈るべき理なけれども、僻事せむとてまかるものなれば、いづくをか刈らざらむ」とぞいひける。理いとをかしかりけり。

【二一〇】　喚子鳥は春のものなりとばかりいひて、いかなる鳥とも、さだかに記せるものなし。ある眞言書の中に、喚子鳥鳴く時、招魂の法をば行ふ次第あり。これは鶺鴒なり。萬葉集の長歌に、「霞たつ長き春日の」などつづけたり。鶺鳥も喚子鳥のこゝとざまにかよひて聞ゆ。

【二一一】　よろづの事は頼むべからず。愚なる人は深くものを頼む故に、恨み怒る事あり。勢ありとて頼むべからず、こはきものまづ亡ぶ。財多しとて頼むべからず、時の間に失ひ易し。才ありとて頼むべからず、孔子も時にあはず。德ありとて頼むべからず、顏回も不幸なりき。君の寵をも頼むべからず、誅を受くること速なり。奴したがへりとて頼むべからず、背き走ることあり。人の志をも頼むべからず、必ず變ず。約をも頼むべからず、信ある事少し。身をも人をも頼まざれば、是なる時は喜び、非なる時は恨みず。左右廣ければさはらず、前後遠ければふさがらず。狹き時はひしげくだく。心を用ふること少しきにしてきびしき時は、ものにさかひ爭ひてやぶる。ゆるくしてやはらかなる時は、一毛も損せず。人は天地の靈なり。天地はかぎる所なし。人の性何ぞ異らむ。寛大にして極らざる時は、喜怒これにさはらずして、ものの爲にわづらはず。

【二一二】　秋の月は、かぎりなくめでたきものなり。いつとても月はかくこそあれとて、思ひわかざらむ人は、むげに心うかるべきことなり。

【二一三】　御前の火爐に火をおく時は、火箸してはさむことなし、土器より直に移すべし。さればころび落ちぬやうに心得て、炭をつむべきなり。八幡の御幸に、供奉の人、淨衣を著て、手にて炭をさゝれければ、ある有職の人、「白きものを著たる日は火箸を用ふる、苦しからず」と申されけり。

【二一四】　想夫戀といふ樂は、女、男を戀ふる故の名にはあらず。もとは相府蓮、文字の通へるなり。晉の王儉、大臣として、家に蓮を植ゑて愛せし時の樂なり。これより大臣を蓮府といふ。廻忽も廻鶻なり。廻鶻國とて夷のこはき國あり。その夷、漢に服して後に

(一) 傳不詳

(二) 前頁雅文の評(左)參照

(三) 霧立つ、長き春日の暮れにけるゝ、わつきも知らず、むらぎもの心を痛み、ぬえこ鳥うら泣け居れば……(萬葉集卷一、第三見ヶ山作歌)

(四) 孔丘字は仲尼、魯人、四方に遊說して用ひられず、哀公十六年卒、年七十三

(五) 字は子淵、魯人、孔子の高弟、年三十二卒

(一) 石清水八幡宮

(二) 字は仲寶、年三十八卒

來りて、おのれが國の樂を奏せしなり。

【二一五】　平の宣時朝臣老の後、昔語りに、「最明寺入道、ある宵の間によばるることありしに、『やがて』と申しながら、直垂のなくて、とかくせし程に、また使來りて、『直垂などの候らはぬにや、夜なれば、ことやうなりとも疾く』とありしかば、なえたる直垂、うちうちのまゝにてまかりたりしに、銚子に土器とり添へて、もて出でて、『この酒を一人たうべむがさうざうしければ申しつるなり。肴こそなけれ、人は靜りぬらむ。さりぬべきものやあると、いづくまでも求め給へ』とありしかば、紙燭さしてくまぐまを求めしほどに、臺所の棚に、小土器に味噌の少しつきたるを見出でて、『これぞ求め得て候ふ』と申ししかば、『こと足りなむ』とて、心よく數獻に及びて、興に入られ侍りき。その世にはかくこそ侍りしか」と申されき。

紙燭　此の間約三寸

長さ一尺五寸程にて丸し

【二一六】　最明寺入道、鶴が岡の社參のついでに、足利左馬の入道のもとへ、まづ使をつかはして、立ち入られたりけるに、あるじまうけせられたりけるやう、一獻にうちあはび、二獻に鍛、三獻にかいもちひにてやみぬ。その座には亭主夫婦、隆辨僧正、あるじがたの人にて座せられけり。さて、「年ごとに賜る足利の染物、心もとなく候ふ」と申されければ、「用意し候ふ」とて、いろいろの染物三十、前にて女房どもに、小袖に調ぜさせて、後につかはされけり。その時見たる人の、近くまで侍りしなり。

(一) 六條陸奥守宣時、北條時政四代の孫

(二) 直垂

(三) 紙燭　下圖參照

(四) 鶴岡八幡宮

(五) 足利義氏、武藏守陸奥守を經て左馬頭、仁治年中卒、建長六年卒、年六十六

(六) 富士鶴岡の別當

【二一七】　ある大福長者の曰く、「人はよろづをさし置きて、ひたぶるに德をつくべきなり。貧しくては生けるかひなし。富めるのみを人とす。德をつかむと思はば、すべからくまづその心づかひを修行すべし。その心といふは他の事にあらず、人間常住の思に住して、かりにも無常を觀ずることなかれ。これ第一の用心なり。次に萬事の用をかなふべからず。人の世にある、自他につけて所願無量なり。欲に從ひて志を遂げむと思はば、百萬の錢ありといふとも、しばらくも住すべからず。所願は止む時なし、財は盡くる期あり。限ある財をもちて、かぎりなき願に從ふこと、得べからず。所願心にきざすことあらば、われを亡すべき惡念來れりと、堅く慎み恐れて、小用をもなすべからず。次に錢を奴の如くして、つかひ用ふるものと知らば、長く貧苦を免るべからず。君の如く、神の如くおそれ尊みて、從へ用ふる事なかれ。次に恥に臨むといふとも、怒り恨むる事なかれ。次に正直にして、約を固くすべし。この義を守りて利を求めむ人は、富の來る事、火の乾けるにつき、水の下れるに隨ふが如くなるべし。錢積りて盡きざる時は、宴飲聲色を事とせず、居所を飾らず、所願を成せざれども、心とこしなへに安く樂し」と申しき。

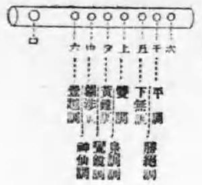
そもそも人は所願を成せむが爲に、財をもとむ。錢を財とする事は、願をかなふるが故なり。所願あれどもかなへず、錢あれども用ひざらむは、全く貧者と同じ。何をか樂とせ

(一) 太政大臣久我基具の邸

(二) 藤原ヶ資の事か、禮中納言後非遣使南朝の爲に殺くす。正平七年ノ死

(三) 豊原龍秋、樂家、後醍醐帝及後光厳帝の師範、貞治二年卒、年七十三

(四) 横笛



む。このおきてはただ人間の望を斷ちて、貧を憂ふべからずと聞えたり。欲をなして樂とせむよりは、しかじ財なからむには。癰疽を病むもの、水に洗ひて樂とせむよりは、病まざらむには如かじ。ここに至りては貧富わく所なし。究竟は理卽にひとし、大欲は無欲に似たり。

【二一八】 狐は人にくひつくものなり。堀川殿(一)にて舍人が寢たる足を狐にくはる。仁和寺にて夜、本寺の前を通る下法師に、狐三つ飛びかゝりてくひつきければ、刀を拔きてこれを防ぐ間、狐二疋を突く。一つは突き殺しぬ。二つは逃げぬ。法師はあまた所くはれながら、こと故なかりけり。

【二一九】 四條の黄門命ぜられていはく、「龍秋(二)は道にとりてはやむごとなき者なり。先日來りていはく、『短慮のいたり、きはめて荒凉のことなれども、横笛(四)の五の穴は、聊かいぶかしき所の侍るかと、ひそかにこれを存ず。その故は、干の穴は平調、五の穴は下無調なり。その間に勝絶調を隔てたり。上の穴雙調、次に鳧鐘調を置きて、夕の穴黄鐘調なり。その次に鸞鏡調をおきて、中の穴盤渉調、中と六とのあはひに神仙調あり。かやうに間々に、みな一律をぬすめるに、五の穴のみ、上の間に調子をもたずして、しかも間をくばることひとしき故に、その聲不快なり。さればこの穴を吹く時は、必ずのく。のけあへぬ時はものにあはず。吹き得る人かたし』と申しき。料簡の至り、まことに興あり。先達、

(一) 大神景茂、壻人

(二) 笙

後生を恐るといふ事、この事なり」と侍りき。他日に景茂(一)が申し侍りしは、「笙(二)は調べおほせてもちたれば、ただ吹くばかりなり。笛は吹きながら、息の中にて、かつしらべもて行くものなれば、穴ごとに口傳の上に性骨を加へて、心を入るること、五の穴のみに限らず。ひとへにのくとばかりも定むべからず。あしく吹けば、いづれの穴も心よからず。上手はいづれをも吹きあはす。呂律のものにかなはざるは、人のとがなり、器ものの失にあらず」と申しき。

【二二〇】 「何事も、邊土は卑しくかたくなれども、天王寺の舞樂のみ都に恥ぢず」といへば、天王寺の伶人の申し侍りしは、「當寺の樂は、よく圖をしらべ合せて、ものの音のめでたくとゝのほり侍る事、外よりもすぐれたり。故は太子の御時の圖、今に侍るを博士とす。いはゆる六時堂の前の鐘なり。その聲黄鐘調のものなかなり。寒暑に從ひてあがりさがりあるべき故に、二月涅槃會より聖靈會までの中間を指南とす。祕藏のことなり。この一調子をもちて、いづれの聲をもとゝのへ侍るなり」と申しき。およそ鐘の聲は黄鐘調なるべし。これ無常の調子、祇園精舍の無常院の聲なり。西園寺の鐘、黄鐘調に鑄らるべしとて、あまた度鑄かへられけれども、かなはざりけるを、遠國より尋ね出されけり。法金剛院の鐘の聲、また黄鐘調なり。

【二二一】 「建治、弘安の頃は、祭の日の放免のつけものに、ことやうなる紺の布四五反に

(三) 四天王寺、大阪市天王寺區にあり

(四) 聖德太子、四天王寺を創建せられる

(五) 天王寺境内にあり、晨朝・日中・日没・初夜・中夜・後夜の六時に勤むる堂

(六) 二月十五日釋迦入滅の日

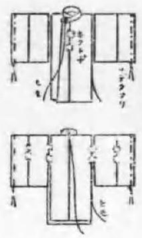
(七) 二月二十二日聖德太子の忌辰

(八) 印度に於ける釋迦說法の寺

(九) 山城國葛野郡衣笠村にあり

(一〇) 山城國葛野郡

(一一)(一二) 後宇多帝の年號



(一) 水干

て馬をつくりて、尾髪には燈心をして、蛛の網書きたる水干につけて、歌の心などいひてわたりしこと、常に見及び侍りしなども、興ありてしたる心ちにてこそ侍りしか」と、老いたる道志どもの、今日も語り侍るなり。この頃はつけもの年を送りて、過差ことの外になりて、よろづの重きものを多くつけて、左右の袖を人に持たせて、みづからは、鉾をだにもたず、息つき苦むありさま、いと見ぐるし。

【二二二】竹谷の乗願房、東二條院へ參られたりけるに、「亡者の追善には何事か勝利多き」と尋ねさせ給ひければ、『光明眞言寶篋印陀羅尼』と申されたりけるを、弟子ども、「いかにかくは申し給ひけるぞ。念佛にまさること候ふまじとは、など申し給はぬぞ」と申しければ、「わが宗なれば、さこそ申さまほしかりつれども、まさしく稱名を追福に修して、巨益あるべしと說ける經文を見及ばねば、何に見えたるぞと、重ねて問はせ給はば、いかが申さむと思ひて、本經のたしかなるにつきて、この眞言陀羅尼をば申しつるなり」とぞ申されける。

【二二三】鶴のおほいどのは、童名たづ君なり。鶴を飼ひ給ひける故にと申すは、ひがことなり。

【二二四】陰陽師有宗入道、鎌倉より上りて、尋ねまうで來りしが、まづさし入りて、「この庭のいたづらに廣きこと、あさましく、あるべからぬ事なり。道を知るものは植うることをつとむ。細道一つ殘して、みな畠につくり給へ」といさめ侍りき。まことに少しの地をも、いたづらに置かむ事は、益なきことなり。食ふ物、藥種などを植ゑ置くべし。

(一) 水干
(二) 山城國醍醐の地名
(三) 傳不詳
(四) 後堀河帝の后、公子
(五) 九條内大臣基家
(六) 安倍有宗、陰陽頭

【二二五】多の久資が申しけるは、通憲入道、舞の手の中に、興あることどもを擇びて、磯の禪師といひける女に敎へて舞はせけり。白き水干に鞘卷をさゝせ、烏帽子を引き入れたりければ、男舞とぞいひける。禪師が女、靜といひける、この藝をつげり。これ白拍子の根源なり。佛神の本緣を歌ふ。その後、源の光行多くの事を作れり。後鳥羽院の御作もあり。龜菊に敎へさせ給ひけるとぞ。

【二二六】後鳥羽院の御時、信濃前司行長、稽古のほまれありけるが、樂府の御論義の番に召されて、七德の舞を二つ忘れたりければ、五德の冠者と異名をつきにけるを、心うき事にして、學問を棄てて遁世したりけるを、慈鎭和尙、一藝ある者をば、下部までも召し置きて、不便にせさせ給ひければ、この信濃入道を扶持し給ひけり。この行長入道、平家物語を作りて、生佛といひける盲目に敎へて語らせけり。さて山門の事を、ことにゆゝしく書けり。九郎判官の事は、詳しく知りて書き載せたり。蒲の冠者の事は、よく知らざりけるにや、多くの事どもを記し漏せり。武士のこと、弓馬のわざは、生佛、東國の者にて、武士に問ひ聞きて書かせけり。かの生佛が生れつきの聲を、今の琵琶法師は學びたるなり。

【二二七】六時禮讃は、法然上人の弟子安樂といひける僧、經文をあつめて作りて、つと

(五) 源義經の妾

(六) 白拍子

(一) 伶人
(二) 信西の事、平治の亂に信頼、義朝の爲に殺さる
(三) 舞妓、殯岐小磯の人と傳ふ
(四) 鞘卷
(七) 後鳥羽院、北面、後河内守
(八) 後鳥羽院の寵を受けたる白拍子
(九) 藤原行長、後鳥羽帝の時伶人
(一〇) 慈圓、天台座主、嘉祿元年寂、七十一、傳不詳、叡山の檜笠僧侶の姉手
(一一) 比叡山延暦寺
(一二) 源義經、檢非違使尉
(一三) 源範頼、遠州蒲生にて誅す
(一四) 源空、淨土宗の開祖、建暦元年寂、年八十、
(一五) 京都の人、建永元年閏ケ谷に六時佛會を開く、後鳥羽院の宮女、參會感法師髮したるより六條河原に斬らる

(一) 山城國葛野郡太秦、廣隆寺
(二) 傳不詳
(三) 京都上京區北野神社の東北
大報恩寺。國千本釋迦堂
(四) 毎年二月九日より二十五日までの大念佛
(五) 亀山帝年號
(六) 蓮空、大報恩寺の僧
(七) 選擇勝尾寺の僧、光仁帝の時同寺の觀音像を刻む
(八) 初め藤原實長の邸、後に六條、高倉、安德の御所となる
(九) 藤原爲世のことか
(一〇) 藤原冬氏、正三位參議權非違使別當、入道して圓空、弘安五年薨、年七十一
(一一) 西園寺公經

めにしけり。その後、太秦の善觀房といふ僧、ふしはかせを定めて、聲明になせり。一念の念佛の最初なり。後嵯峨院の御代よりはじまれり。法事讃も同じく、善觀房はじめたるなり。

【二二八】 千本の釋迦念佛は、文永の頃、如輪上人これをはじめられけり。

【二二九】 よき細工は、少し鈍き刀をつかふといふ。妙觀が刀はいたくたゝず。

【二三〇】 五條の内裏にはばけものありけり。藤大納言殿語られ侍りしは、殿上人ども、黒戸にて碁を打ちけるに、御簾をかゝげ見るものあり。「誰そ」と、見向きたれば、狐、人のやうについゐて、さしのぞきたるを、「あれ狐よ」ととよまれて、まどひにげにけり。未練の狐ばけ損じけるにこそ。

【二三一】 園の別當入道は雙なき庖丁者なりけり。ある人のもとにて、いみじき鯉を出したりければ、みな人、別當入道の庖丁を見ばやと思へども、たやすくうち出でむもいかがとためらひけるを、別當入道さる人にて、「このほど百日の鯉を切り侍るを、今日猶き侍るべきにあらず。まげて申し請けむ」とて切られにける、いみじくつきづきしく興ありて人ども思へりけると、ある人、北山の太政入道殿に語り申されたりければ、「かやうの事、おのれは世にうるさく覺ゆるなり。切りぬべき人なくばたべ切らむ、といひたらむは、なほよかりなむ。なんでふ百日の鯉を切らむぞ」とのたまひたりし、をかしく覺えしと、人の語り給ひける、いとをかし。大方ふるまひて興あるよりも、興なくてやすらかなるがまさりたる事なり。されば人の饗應なども、ついでをかしきやうに取りなしたるも、まことによけれども、ただその事となくて取り出でたる、いとよし。人にものを取らせたるも、ついでなくて、これを奉らむといひたる、まことの志なり。惜むよししして、乞はれむと思ひ、勝負のまけわざにことづけなどしたる、むつかし。

【二三二】 すべて人は、無智無能になるべきものなり。ある人の子の、見ざまなどあしからぬが、父の前にて人とものいふとて、史書の文を引きたりし、さかしくは聞えしかども、尊者の前にてはさらずともと覺えしなり。又ある人のもとにて、琵琶法師の物語*を聞かむとて、琵琶を召し寄せたるに、柱の一つ落ちたりしかば、「作りてつけよ」といふに、ある男の中にあしからずと見ゆるが、「ふるきひさくの柄ありや」などいふを見れば、爪を生したり。琵琶など引くにこそ。盲法師の琵琶、そのさたにも及ばぬことなり。道に心得たるよしにやと、かたはらいたかりき。ひさくの柄はひもの木とかやいひて、よからぬものにとぞ、ある人仰せられし。若き人は少しの事もよく見え、わろく見ゆるなり。

【二三三】 よろづのとがあらじと思はば、何事にもまことありて、人をわかず、うやうやしく、言葉少からむにはしかじ。男女老少、みなさる人こそよけれども、ことに若く、かたちよき人の、ことうるはしきは、忘れがたく思ひつかるるものなり。よろづのとがは、馴

* 平家物語

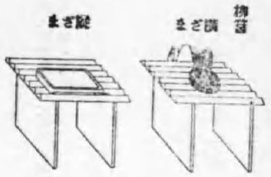
れたるさまに上手めき、所得たるけしきして、人をないがしろにするにあり。

【二三四】　人のものを問ひたるに、知らずしもあらじ、ありのまゝにいはむはをこがましとにや、心まどはすやうに返事したる、よからぬ事なり。知りたる事も、なほさだかにと思ひてや問ふらむ。またまことに知らぬ人も、などかなからむ。うらゝかにいひ聞かせたらむは、おとなしく聞えなまし。人は未だ聞き及ばぬ事を、わが知りたるまゝに、さてもその人の事のあさましさなどばかり、いひやりたれば、いかなる事のあるにかと、おし返し問ひにやるこそ、心づきなけれ。世にふりぬる事をも、おのづから聞きもらす事もあれば、おぼつかなからぬやうに告げやりたらむ、あしかるべき事かは。かやうの事は、もの馴れぬ人のあることなり。

【二三五】　主ある家には、すずろなる人、心のまゝに入りくることなし。あるじなき所には、道行き人みだりに立ち入り、狐・梟やうのものも、人げにせかれねば、所得がほに入り住み、こだまなどいふ、けしからぬかたちも、あらはるるものなり。また鏡には、色形なき故に、よろづの影來りてうつる。鏡に色かたちあらましかば、うつらざらまし。虚空よくものを容る。われらの心に、念々のほしきまゝに來り浮ぶも、心といふものなきにやあらむ。心に主あらましかば、胸の中にそこばくのことは、入り來らざらまし。

【二三六】　丹波に出雲といふ所あり。大社を遷して、めでたく造れり。しだの某とかやしる所なれば、秋の頃、聖海上人、その外も人あまたさそひて、「いざたまへ、出雲拜みに。かいもちひめさせむ」とて具しもて行きたるに、おのゝ〳〵拜みて、ゆゝしく信おこしたり。御前なる獅・狛犬そむきて、うしろざまに立ちたりければ、上人いみじく感じて、「あなめでたや、この獅子の立ちやう、いと珍し。深き故あらむ」と、涙ぐみて、「いかに殿ばら、殊勝の事は御覽じ咎めずや、むげなり」といへば、おのゝ〳〵あやしみて、「まことに他に異りけり。都のつとに語らむ」などいふに、上人なほゆかしがりて、おとなしく、もの知りぬべき顔したる神官を呼びて、「この御社の獅子の立てられやう、定めて習ある事に侍らむ。ちと承らばや」といはれければ、「その事に候ふ。さがなきわらはべどもの仕りける、奇怪に候ふ事なり」とて、さし寄りて、据ゑ直して去にければ、上人の感涙いたづらになりにけり。

【二三七】　柳營に据うるものは、縦ざま、横ざま、ものによるべきにや。巻物などは、縦ざまに置きて、木の間より、紙ひねりを通してゆひつく。「硯も縦ざまに置きたる、筆ころばずよし」と、三條の右大臣殿仰せられき。勘解由の小路の家の能書の人々は、かりにも縦



(一)　傳不詳
(二)　出雲の獅子狛犬
(三)　柳營

丹波出雲神社

(一)　丹波國桑田郡千歳村中の地名
(二)　出雲の大社、杵築大社のこと
(四)　陰人を指すか不明
(五)　藤原行成の子孫、世尊寺と稱し、書道の家

ざまに置かるる事なし。必ず横ざまに据ゑられ侍りき。

（一）傳不詳

【二三八】　御隨身近友が自讃とて、七個條書きとどめたることあり。みな馬藝、させる事なきこととどもなり。そのためしを思ひて、自讃の事、七つあり。

一、人あまたつれて、花見ありきしに、最勝光院の邊にて、男の馬を走らしむるを見て、「今一度、馬を馳するものならば、馬倒れて落つべし。しばし見たまへ」とて、立ち止りたるに、また馬をはす。とどむる所にて、馬を引きたふして、乘る人、泥土の中にころび入る。そのことばの誤らざる事を、人みな感ず。

一、當代、未だ坊におはしましころ、萬里の小路殿御所なりしに、堀川大納言殿伺候し給ひし御曹司へ、用ありて參りたりしに、論語の四五六の卷をくりひろげ給ひて、「ただ今御所にて、紫の朱うばふことをにくむいふ文を御覽せられたきことありて、御本を御覽ずれども、御覽じ出されぬなり。なほよく引き見よと、仰せごとにて求むるなり」と仰せらるるに、「九の卷のそこそこのほどに侍る」と申したりしかば、あなうれしとて、もて參らせ給ひき。かほどの事は、兒どもも常の事なれど、昔の人はいさゝかの事をも、いみじく自讃したるなり。後鳥羽院の、御歌に、「袖と袂と一首の中にあしかりなむや」と、定家卿に尋ね仰せられたるに、「秋の野の草のたもとか花すゝき、穂に出てまねく袖と見ゆらむ」と侍れば、何事か候ふべきと、申されたることも、「時に當りて本歌を覺悟

（一）後白河院離立、京都洛東南禪寺境内にあり
（二）後醍醐皇
（三）藤原實房及子藤房の住みし家、萬里小路にあり
（四）藤原師信、萬時東宮大夫
（五）堀川大納言
（六）子曰、惡紫之奪二朱也（論語陽貨篇）
（七）藤原定家、第三十九段に出ず
（八）古今集卷四、有原滋樹の歌

す。道の冥加なり、高運なり」など、ことごとしく記し置かれ侍るなり。九條の相國伊通公の款狀にも、ことなる題目をも書きのせて自讃せられたり。

一、常在光院のつき鐘の銘は、在兼の卿の草なり。行房の朝臣淸書して、鑄型にうつさせむとせしに、奉行の入道、かの草を取り出でて見せ侍りしに、「花の外に夕を送れば、聲百里に聞ゆ」といふ句あり。「陽唐の韻と見ゆるに、百里あやまりか」と申したりしを、「よくぞ見せ奉りける。おのれが高名なり」とて、筆者のもとへいひやりたるに、「あやまり侍りけり。數行と直さるべし」と、返事侍りき。數行もいかなるべきにか。もし數歩の心か、おぼつかなし。

一、人あまた伴ひて、三塔順禮のことはべりしに、横川の常行堂のうち、龍花院と書ける古き額あり。「佐理、行成の間疑ありて、未だ決せずと申し傳へたり」と、僧ことごとしく申し侍りしを、「行成ならば裏書あるべし。佐理ならば裏書あるべからず」といひたりしに、裏は塵つもり、蟲の巢にていぶせげなるを、よく掃きのごひて、おの〳〵見侍りしに、行成位署名字年號、さだかに見え侍りしかば、人みな興に入る。

一、那蘭陀寺にて、道眼ひじり談義せしに、八災といふことを忘れて、「誰か覺えたまふ」といひしを、所化みな覺えざりしに、局の内より、これこれにやといひ出したれば、いみじく感じ侍りき。

（一）藤原伊通、第六段に出ず
（二）京都祇園寺の末寺
（三）藤原在衡、正二位左大辨
（四）藤原行房、行成の末、雲家
（五）比叡山の東塔・西塔・横川
（六）藤原佐理、能書家、長德四年本、年五十五
（七）第百七十九段に出ず
（八）同段道眼上人
（九）憂・苦・喜・樂・尋・伺・出息・入息

一、賢助僧正に伴ひて、加持香水を見はべりしに、未だはてぬほどに、僧正かへりて侍りしに、陣の外まで僧都見えず。法師どもをかへして、求めさするに、「同じさまなる大衆多くて、え求めあはず」といひて、いと久しくて出でたりしを、「あなわびし、それ求めておはせよ」といはれしに、かへり入りて、やがて具して出でぬ。

一、二月二十五日、月あかき夜うち更けて、千本の寺にまうでて、後より入りて、ひとり顔深くかくして、聴聞し侍りしに、優なる女の、姿、にほひ、人よりことなるが分け入りて、膝にゐかゝれば、にほひなどもうつるばかりなれば、便あしと思ひて、すり退きたるに、なほゐ寄りて同じさまなれば、立ちぬ。その後、ある御所ざまのふる女房の、そぞろごといはれしついでに、「むげに色なき人におはしけりと、見おとし奉る事なむありし。情なしと恨み奉る人なむある」とのたまひ出したるに、「更にこそ心得侍らね」と申してやみぬ。かの聴聞の夜、御局の内より、人の御覧じ知りて、候ふ女房を作りたてて、出し給ひて、「便よくばことばなどかけむものぞ。そのありさま、参りて申せ、興あらむ」とて、はかり給ひけるとぞ。

【二三九】　八月十五日、九月十三日は婁宿なり。この宿、清明なる故に、月をもてあそぶに良夜とす。

【二四〇】　しのぶの浦の、あまのみるめも所せく、くらぶの山も、もる人しげからむに、わ

(一) 東寺一長者、覆闕座主、太政大臣藤原公守の子
(二) 大報恩寺、第二百二十八段に出づ
(三) 涅槃会の日
(四) 浜代國信夫郡の浦。うちはへて苦しきものは人目のみしのぶの浦の海士のたくなは（新古今集巻十二、二條院讃岐）
(五) 暗部山、山城國鞍馬山の古名。匂ふ香のしるべならずば梅の花くらぶの山に折り惑はまし（風雅集巻一、中務）

りなく通はむ心の色こそ、浅からず、あはれと思ふふしぶしの、忘れ難きことも多からめ。親、兄弟許して、ひたぶるに迎へするゐたらむ、いとまばゆかりぬべし。世にありわぶる女の、にげなき老法師、あやしのあづまびとなりとも、にぎはゝしきにつきて、さそふ水あらばなどいふを、中人いづ方も、心にくきさまにいひなして、知られず知らぬ人を迎へもて來たらむあいなさよ。何事をか打いづる言葉にせむ。年月のつらさをも、分けこしは山のなどもあひ語らはむこそ、盡きせぬことのはにてもあらめ。すべてよその人の、とりまかなひたらむ、うたて、心づきなきこと多かるべし。

よき女ならむにつけても、品くだり見にくく、年もたけなむ男は、かくあやしき身のために、あたら身をいたづらになさむやはと、人も心おとりせられ、わが身は向ひゐたらむも、影はづかしく覺えなむ。いとこそあいなからめ。梅の花かうばしき夜のおぼろ月にたたずみ、みかきが原の露わけ出でむ有明の空も、わが身ざまにしのばるべくもなからむ人は、ただ色このまざらむにはしかじ。

【二四一】　望月のまどかなることは、しばらくも住せず、やがて缺けぬ。心とどめぬ人は、一夜の中に、さまでかはるさまも見えぬにやあらむ。病の重るも、住するひまなくして、死期既に近し。されども未だ病急ならず、死に赴かざるほどは、常住平生の念にならひて、生の中に、多くの事を成じて後、しづかに道を修せむと思ふほどに、病をうけて、死門に臨

(一) わびぬれば身をうきぐさの根をたえて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ（古今集十八、小野小町）
(二) 筑波山は山しげ山しげけれど思ひ入るにはさはらざりけり（新古今集十一、覆軍之）

む時、所願一事も成せず、いふかひなくて、年月の懈怠を悔いて、この度もし立ちなほりて、命を全くせば、夜を日につぎて、この事かの事、怠らず成じてむと、願を起すらめど、やがて重りぬれば、われにもあらず取りみだしてはてぬ。このたぐひのみこそあらめ、この事まづ、人々いそぎ心におくべし。所願を成じて後、いとまありて道に向はむとせば、所願つくべからず。如幻の生の中に何事をかなさむ。すべて所願みな妄想なり。所願心に來らば、妄心迷亂すと知りて、一事をもなすべからず。直に萬事を放下して道に向ふ時、さはりなく、所作なくて、心身長くしづかなり。

【二四二】　とこしなへに違順につかはるる事は、ひとへに苦樂の爲なり。樂といふは、好み愛する事なり。これを求むること、やむ時なし。樂欲するところ、一には名なり。名に二種あり。行跡と才藝とのほまれなり。二には色欲、三には味ひなり。よろづの願ひ、この三つにはしかず。これ顚倒の相より起りて、そくばくのわづらひあり。求めざるむには如かじ。

【二四三】　八になりし年、父に問ひていはく、「佛はいかなるものにか候ふらむ」といふ。父が曰く、「佛には人がなりたるなり」と。また問ふ、「人は何として、佛にはなり候ふやらむ」と。父また、「佛の教によりてなるなり」と答ふ。また問ふ、「教へ候ひける佛をば、何が教へ候ひける」と。また答ふ、「それもまたさきの佛の教によりてなり給ふなり」と。また問ふ、「その教へはじめ候ひける第一の佛は、いかなる佛にか候ひける」といふ時、父、「空よりや降りけむ、土よりや涌きけむ」といひて笑ふ。「問ひつめられて、え答へずなり侍りつ」と、もろ人に語りて興じき。

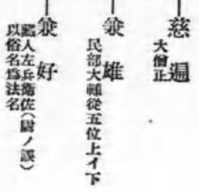
＊ 卜部兼顯、治部少輔

卜部兼好、神祇大副兼茂曾孫也、居二吉田一、（卜部系圖）兼好幼而聰悟、好讀二老莊之書一、有二文才一、善二和歌一、（徒然草）兼工レ書（太平記）仕二後宇多帝一、任二左兵衛尉一、稍被二親昵一、帝崩、兼好剔髮入二修學院一、（參二取卜部系圖一、正徹物語、吉野拾遺）後遊二木曾一、愛二其山水一、結レ廬居焉、一日國守帥レ衆獵二其地一、兼好厭二其喧擾一、賦二和歌一曰、古古毛麻多、宇伎與奈利計利、與曾奈賀良、於毛比志麻麻能、邪麻奢刀毛我那、乃還二鄉里一、歌詠自娛、（吉野拾遺）常自謂曰、燈下讀レ書、尙二友古人一、樂莫レ過レ焉、（徒然草）當時公卿大夫皆愛二其爲一人、與レ之遊者甚多、（正徹物語、兼好歌集）兼好嘗爲二高師直一作レ書挑二鹽冶高貞妻一、妻不レ從、師直怒而絕レ之、論者以レ此少レ之、（太平記）嘗卜葬地於雙岡一、而樹二櫻花一、因作二和歌一曰、知藝理於久、波奈等奈羅毘能、袁迦能陪爾、阿波禮伊久與ニ乃、波留乎須具佐牟、（兼好歌集）所レ著有二徒然草及歌集一、今行二于世一、（徒然草、兼好歌集、）兼死無レ子、其侍童有レ命松麻呂者一、傳二兼好業一、善二和歌一、後薙髮依二今川貞世一、居二鎭西一、（落書露顯○文藻淸談曰、命松丸薙髮著書、引二和歌記二時事一、今按松翁者著二吉野拾遺一、而淸談所レ引金輿二拾遺一合、拾遺曰、金輿二兼好一有二舊好一、則松翁蓋命松丸也。）

（大日本史　第二百二十一　歌人列傳）

附錄　兼好傳資料

系圖



出生

觀應元年四月四日（或は二月十五日、或は二月十八日）

（尊卑分脈）

出家

おなじ頃（後村上帝即位の初頃）兼好法師が玉津島にまうで給へるとて、たづねおはせしに、いにしへ深く契りける中なりければ、いとうれしくて、むかし今のものがたりしけるに、「古法皇（後宇多院元中元年聖壽五十八歲にて崩ず）の和歌の道に深くおぼしいらせ、御なさけの淺からせ給はで、かしこき御影とならせ給ひし悲しさのまゝに、世にながらふべき心地もあらざりけらし。せめてのやる方なさに、御後の世をもと思ひ給ふるまゝに、かゝる姿となり侍れども、露の命のきえ難くて、かゝらん世をまのあたりに見侍ることよ」と、袖をしぼられけるに、「我も先帝の御情の忘れ難くて御跡をもしたはまほしく思ひ給ふれども、さすがにおもひ

かへし侍りて、柴の戸ぼそには侍れども、心はうき雲の風にただよふらんさまして、はかなき夢路には、ふるさとの空にもかよひ、思ひとぢむれば、西の御空にもあこがれ、春の朝には、吉野の花の梢にやどり、秋の夕の哀を思ひつづけては、さやけき月の影をもくもらせ、もろくも落つる木の葉を見ては、はかなき世を思ひめぐらす袖の時雨となりて、そめにし墨の衣も空しく、旅行く人を思ひ送りては、まだ見ぬみねをもこゆるにこそ、いかなる縁にふれ侍りて、人め絶えなん山深きいはほのほらにもをさまらでとこそ、なげきて過し侍りぬれ」といへば、「誠にさには候へども、我一とせ木曾の御さかのあたりにさすらひ侍りし時、山のたたずまひ、川のきよきながれに心とまり侍りしかば、こゝにぞ思ひとどまりぬべき所にこそ侍れとて、

おもひたつ木曾のあさぎぬ浅くのみそめてやむべき袖の色かは

と詠じて、庵を引結びて暫し侍らひしに、國の守の鷹狩に、人あまた具し給ひて、山深き庵のほとりまでいまして、狩し給ふさまの浅ましく、たへがたかりければ

こゝもまたうき世なりけりよそながらおもひしまゝの山ざともがな

とながめすてて出で侍りき。それよりいづかたへこゝろとむべくもあらずと思ひとりて、ふるさとに立歸りて侍れば、世の中のみだれけるほどに、ただ和歌をともなひとして、心をすまし侍らんよりほかはあらじと思ひ侍るにこそ」とのたまはせしに、誠に世をそむく心はひとしくこそありけれと、そぞろに袖をしぼり侍りき。（吉野拾遺）

花は盛に、月はくまなきをのみ見るものかはと、兼好が書きたる様なる心ねを持ちたるものは、世間にただ一人ならでは無きなり。此心は生得にてあるものなり。久我か徳大寺かの諸大夫にてありしなり。官が瀧口にてありければ、内裏のとのゐにまゐりて、常に玉體を拜し奉りけるなり。後宇多院崩御なりしによりて遁世しけるなり。やさしき發心の因縁なり。隨分の歌仙にて、頓阿・慶運・淨辨・兼好とて、其頃の四天王にてありしなり。つれづれ草は、清少納言が枕草子のやうなり。（徹書記物語）

徒然草編纂由來

兼好法師のつれづれ草はその世には知る者無かりしを、童命松丸今川了俊の許に仕へ在りしに、兼好もしや作物やあると問はれしに、書き捨てられし藻鹽草多くは庵の壁をはられて候、こゝにも形見にもと貯へ申し候と語りければ、それ尋ねさせよとて、吉田の感神院へは命松丸を遣はし、伊賀の草庵へは、從者伊與の太郎光貞といふ者、歌の集は伊賀の草庵にてやう〳〵五十枚ばかり集め、つれづれ草は吉田にて多く壁にはられ、或は經卷などを寫せる物の裏に書きありしを取りて來ぬ。それを了俊命松丸など取り揃へ、命松丸の許にありしをも、また二條の侍從の方によみかはされしなどをも求め集め、歌の集一冊とし、また草紙、つれづれ草二冊とせり。（眞玉集）

鎭西に侍りし頃、三代集の說、又萬葉等の不審を、數寄の人人の問ひ聞き侍りしかば、存知の分をあら〳〵申して侍りしを、二條家の門弟、兼好法師が弟子、命松丸とて童形の侍りしかば、歌よみにて

侍りしが、出家の後に愚老（今川了俊）がもとに扶持したりしがいふ、かくの如きの秘説等を、さうなう人に仰せらるる事勿體なく存ずるなりといひしかば、愚老返事にいふ、尤もしかり、但この道に心ざしある人々に、あながちに秘すべき事にあらず、云々。（落書露顯）

三光院實澄の崑玉集には徒然草及び家集は、今川了俊が命松丸に尋ねて、草庵の壁に張りたるものをあつめて編めるものなるよしを記せり。されどこはまことしからず、前田家に兼好自筆の家集といふもの存せり。寶積經の裏に記せる兼好自筆の歌と筆蹟一たれば信ずべきに似たり。（藤岡作太郎、鎌倉室町時代文學史）

洞院公賢を訪ふ

六日晴陰不定、兼好法師來、和歌數寄者也、召簾前謁之（園太曆、貞和二年閏九月の條、兼好六十五歳）

天晴兼好法師入來、武藏守師直狩衣以下事談之也、今度被用正慶符、彼符趣示聞了（園太曆、貞和四年十二月廿六日の條、兼好六十七歳）

卒去（六十八歳）

兼好法師觀應元年四月八日

右法金剛院之過去帳（大日本史料、諸寺過去帳）

—終—

年十二月廿六日の條、兼好六十七歳）

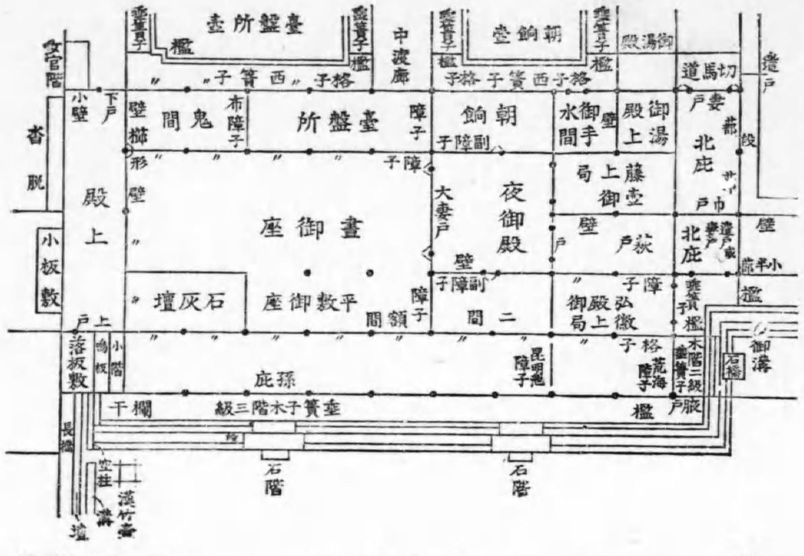
卒去（六十八歳）

兼好法師　觀應元年四月八日

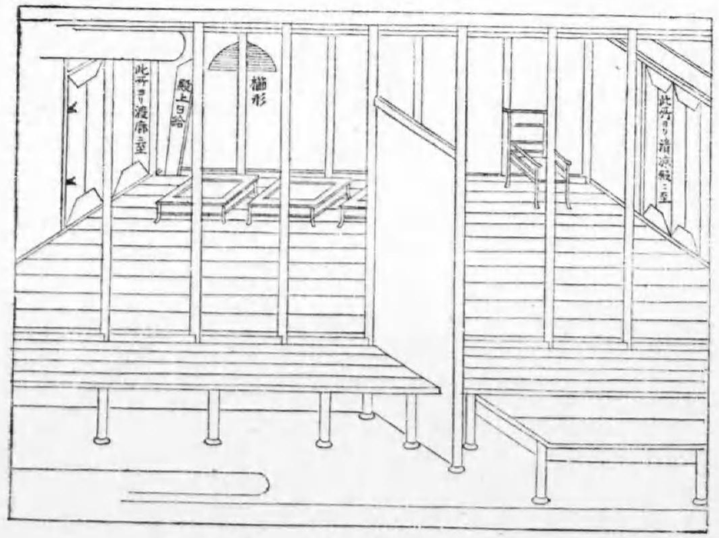
右法金剛院之過去帳（大日本史料、醍醐寺過去帳）

―終―

清涼殿略圖（大内裏圖考證に據る）



殿上内の圖（國史大辭典に據る）



著作權所有

昭和二年四月十五日印刷
昭和二年四月十八日發行

定價金九十錢

編者　平林治德　東京市神田區淺神保町二番地
發行者　矢島一三　東京市神田區淺神保町二番地
印刷者　上條勇　東京市牛込區早稻田鶴巻町一〇七番地
印刷所　康文社印刷所

著作權所有
草然徒

◆發行所　東京市神田區淺神保町二番地
中興館
（電話神田一二三五番　振替東京四一二三番）

□高等學校國文科教科書□

源氏物語　前東京帝國大學文學部助教授　文學士　島津久基先生編　上（中未刊）下　二冊　定價各金一圓五十錢

謠曲狂言　大阪女子專門學校教授　文學士　平林治德先生編　全一冊　定價金一圓二十錢

大鏡　東京帝國大學文學部助教授　文學士　久松潛一先生編　全一冊　定價金一圓十錢

增鏡　第五高等學校教授　文學士　上田英夫先生編　全一冊　定價金一圓十錢

山家・金槐・和泉式部集　東京女子高等師範學校教授　文學博士　關根正直先生編　全一冊　定價金一圓十錢

枕草子　東京帝國大學文學部教授　文學博士　藤村作先生編　全一冊　定價金一圓三十錢

近松淨瑠璃選　東京帝國大學文學部教授　文學士　高木市之助先生　浦和高等學校教授　文學士　沼澤龍雄先生共編　全一冊　定價金一圓三十錢

平家物語　東京帝國大學文學部教授　文學士　高木市之助先生　東京帝國大學文學部助教授　文學士　久松潛一先生共編　全一冊　定價金一圓五十錢

發行所　東京市神田區一ツ橋二丁目三番地　振替東京一二四番　中興館

□高等學校國文科教科書□

萬葉集　東京帝國大學文學部教授　文學士　高木市之助先生　東京帝國大學文學部助教授　文學士　久松潛一先生共編　全一冊　定價金九十錢

古事記　大阪女子專門學校教授　文學士　平林治德先生編　全一冊　定價（近刊）

源氏物語新抄　前東京帝國大學文學部助教授　文學士　島津久基先生編　全一冊　定價金一圓三十錢

雨月物語（完本）　第五高等學校教授　文學士　八波則吉先生編　全一冊　定價金九十錢

更級日記（完本）　東京帝國大學文學部講師　文學博士　佐々木信綱先生編　全一冊　定價金五十錢

近古小說選　前東京帝國大學文學部助教授　文學士　島津久基先生編　全一冊　定價金一八十錢

おくの細道　中興館編輯所編　全一冊　定價金五十錢

徒然本（完本）　大阪女子專門學校教授　文學士　平林治德先生編　全一冊　定價金九十錢

發行所　東京市神田區一ツ橋二丁目三番地　振替東京一二四番　中興館

◆あらゆる方面に採用された日本文學史の教科書◆

東京帝國大學文學部教授　文學博士　藤村　作先生著

訂正七版

國文學史總說

定價金二圓五十錢
郵稅金十八錢

教科用（學生用廉價版）
定價金貳圓
郵稅金十八錢

內容目次概梗

緒論　國文學史と其の區劃　**第一篇　大和時代**　序說　第一章前期（古事記と日本書記―風土記―祝詞）第二章後期（萬葉集―宣命―懷風藻と日本靈異記）**第二篇　平安時代**　序說　第一章前記（初期の漢詩及び漢文―六歌仙と古今集―神樂と催馬樂―歌物語と傳奇的物語―土佐日記と蜻蛉日記）第二章中期（和歌と謠物―源氏物語―枕草子と日記隨筆）第三章後期（和歌と謠物―小說物語―歷史物語と傳說物語）**第三篇　鎌倉室町時代**　序說　第一章前期（歌集と歌人―宴曲―軍記物語と其の他の物語―日記・隨筆・紀行）、第二章後期（和歌と連歌―軍記物語と歷史物語其の他―お伽草紙と鄕の木―謠曲と狂言―徒然草）**第四篇　江戶時代**　序說　第一章前期（古學復興時代の和歌―俳諧と芭蕉―假名草紙と井原西鶴―古淨瑠璃と近松）第二章中期（賀茂眞淵と其の時代の和歌―蕪村と其時代の俳諧―狂歌と川柳―初期の讀本と馬琴―淨瑠璃と歸木）第三章後期（後期の和歌―後期の俳諧―後期の小說―歸木）**第五篇　明治時代**　序說　第一章前期（思潮概觀―詩歌と謠曲―小說）第二章中期（思潮概觀―長詩と短詩―小說―謠曲）第三章後期（思潮概觀―詩歌と謠曲―小說）

現行の國文學史教科書中で、優秀のものと評せられ、最も汎く用ゐられて居ります。古寫本・版本等の面影を親はせるために七十餘個の寫眞銅版・凸版を挿入して、引例に充て、傳記・解題の間に思潮の概觀や批評にも筆を及ぼし、頗る要領を得せしめた所に著者の苦心が見られます。

發行所　東京市神田區錦町二丁目一番地　東京市東京帝國大學前　中興館

◆古典文學の權威一堂に集まる◆

東京帝國大學文學部教授　文學博士　藤村作先生
東京女子高等師範學校教授　文學博士　尾上八郎先生
東京帝國大學法學部政治學科教授　文學士　小山龍之輔先生
前東京帝國大學文學部助教授　文學士　島津久基先生
東京帝國大學文學部助教授　文學士　久松潛一先生　共著

日本文學聯講（第一期上世）

上製美本金壹冊
定價金貳圓
郵稅金十八錢

ラヂオの講演が
たつなに單行本
國文學講座

JOAKのラヂオで放送された『國文學講座』の第一期の分を纏めて單行本にしたものであります。耳よりしか講演を更に眼から味はせるために、各著者に於て原稿を整理補筆して完成したものであります。

內容目次

1 國文學講座の開設に就いて……文學博士　藤村作
2 上代文學概說……文學博士　尾上八郎
3 古事記と日本神話……文學士　小山龍之輔
4 祝詞と神と政治……文學士　久松潛一
5 萬葉集と文學生活……文學士　久松潛一
6 古今集より新古今集まで……文學士　久松潛一
7 源氏物語と宮廷生活……文學士　島津久基
8 枕草子と清少納言……文學士　島津久基
9 日記文學と女性……文學士　久松潛一
10 大鏡と道長時代……文學士　島津久基
11 西行と實朝……文學士　久松潛一

發行所　東京市神田區錦町二丁目一番地　東京市東京帝國大學前　中興館

◆引續いて『第二期』の分を刊行致します◆

東京帝國大學文學部教授　文學博士　藤村　作先生編

日本文學聯講（第二期　中世）

上製美本全壹冊
定價金
郵税金

同じく『國文學講座』の第二期の分を繼めたものであります。東京放送局が計畫したいろ〳〵の講座の中で、最も有益にして意義のあるものとして、聽衆から盛んに讃詞を送られた講座の第二期であります。

内容と其の執筆者

一、近古文學概說……東京帝國大學文學部助教授　文學士　久松潛一
二、軍記物語の性質……東京帝國大學文學部助教授　文學士　久松潛一
三、平家物語と時代精神……浦和高等學校教授　文學士　沼澤龍雄
四、太平記と吉野時代の武士……武藏高等學校教授　文學士　高木武二
五、徒然草の思想……女子學習院教授　文學士　佐藤幹二
六、義經記と義經傳說……前東京帝國大學文學部助教授　文學士　島津久基
七、曾我物語……學習院教授　文學士　山岸德平
八、能樂の藝術的性質……女子學習院教授　文學士　成謙太郎
九、世阿彌の藝術觀……女子學習院教授　文學士　佐成謙太郎
一〇、狂言と世相……東京高等學校教授　文學士　佐野良
一一、連歌と時代……東京帝國大學文學部講師　文學士　志田義秀
一二、歌謠と白拍子……東京帝國大學文學部講師　文學士　志田義秀

發行所　東京市神田區東京神保町一番地　振替貯金東京四一二三番　中興館

終